茨城県教育財団文化財調査報告第420集

殿　畠　遺　跡

主要地方道玉里水戸線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第420集

殿畠遺跡

公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第420集

殿畠遺跡

（とのはた）

主要地方道玉里水戸線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成29年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は，国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として，昭和52年に調査課が設置されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度，茨城県水戸土木事務所による主要地方道玉里水戸線道路改良事業に伴って実施した，茨城県小美玉市殿畠遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって，縄文時代前期，古墳時代後期及び平安時代の集落跡，古墳時代前期の方形周溝墓が確認でき，宮田地区における土地利用の一端が明らかになりました。これらの成果は，当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で，欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が，歴史研究の学術資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上のための資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から本書の刊行に至るまで，多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，小美玉市教育委員会をはじめ，御指導，御協力をいただきました関係各位に対し，深く感謝申し上げます。

平成29年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長　野　口　　通

例　　言

1　本書は，茨城県水戸土木事務所の委託により，公益財団法人茨城県教育財団が平成26年度に発掘調査を実施した，茨城県小美玉市宮田字権現平172－7ほかに所在する殿畠（とのはた）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成26年10月1日～12月31日

整理　平成28年11月1日～平成29年3月31日

3　発掘調査は，調査課長白田正子のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　寺内久永

次席調査員　　舟橋　理

調査員　　近江屋成陽

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理課長後藤一成のもと，調査員近江屋成陽が担当した。

5　第13号土坑及び第14号土坑出土の炭化材の年代測定，樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し，考察は付章として巻末に掲載した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X = + 21,680 m，Y = + 45,800 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3，…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　FP －炉穴　P －ピット　SD －溝跡　SI －竪穴建物跡　SK －土坑　TM －方形周溝墓
TP －陥し穴

遺物　DP －土製品　M－金属製品　Q－石器

土層　K－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1，各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は，原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		炉・火床面・繊維土器断面
	竈部材・粘土範囲・石器使用痕		柱あたり
●土器	□石器	‐ - ‐ -	硬化面

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm，cm，gで示した。なお，現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　竪穴建物跡の「主軸」は，炉・竈を通る軸線とし，主軸方向は，その他の遺構の長軸（径）方向と共に，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N － 10°－ E）。

7　今回の報告分で，整理段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更　SK 1→第1号陥し穴　SK 3→第1号炉穴　SK 4→第2号陥し穴　SK 6→第3号陥し穴
SK18→第4号陥し穴

欠番　SK 2・10・11・12・16・17

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
殿畠遺跡の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 3
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　位置と地形 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の成果 …… 9
　第１節　調査の概要 …… 9
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 11
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 11
　　(1) 竪穴建物跡 …… 11
　　(2) 陥し穴 …… 43
　　(3) 炉穴 …… 49
　　(4) 土坑 …… 50
　　２　古墳時代の遺構と遺物 …… 58
　　(1) 竪穴建物跡 …… 58
　　(2) 方形周溝墓 …… 65
　　(3) 溝跡 …… 69
　　３　平安時代の遺構と遺物 …… 71
　　竪穴建物跡 …… 71
　　４　その他の遺構と遺物 …… 74
　　(1) 溝跡 …… 75
　　(2) 遺構外出土遺物 …… 76
　第４節　まとめ …… 79
付　章 …… 85
写真図版 …… PL 1 ～ PL22
抄　録
付　図

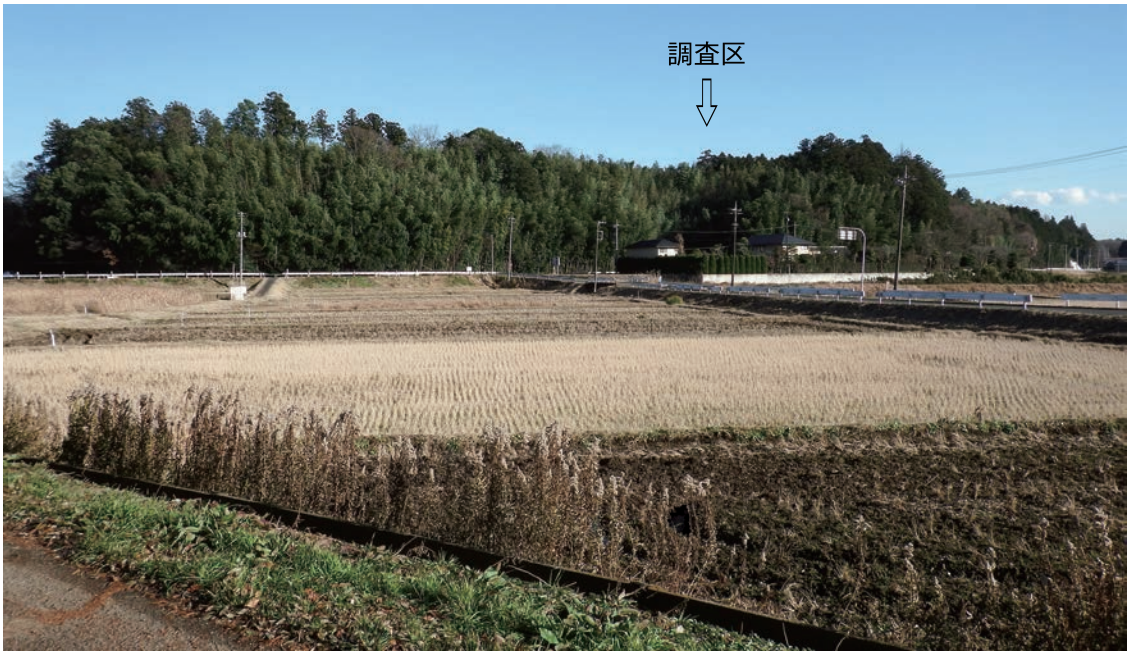
殿畠遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

殿畠遺跡は，小美玉市の中央部に位置し，園部川支流の沢目川左岸の標高 22 mほどの台地平坦部に立地しています。主要地方道玉里水戸線道路改良事業に先立ち，遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため，茨城県教育財団が平成 26 年度に 7,625㎡について発掘調査を行いました。

調査の内容

調査の結果，縄文時代の竪穴建物跡 14 棟，陥し穴 4 基，炉穴 1 基，土坑 19 基，古墳時代の竪穴建物跡 2 棟，方形周溝墓 1 基，溝跡 2 条，平安時代の竪穴建物跡 2 棟などを確認しました。主な出土遺物は縄文土器（深鉢），土師器（坏・坩・高坏・鉢・壺・提瓶・甕・手捏土器），須恵器（坏・蓋・皿・甕），土製品（土玉・円筒埴輪），石器（掻器・鏃・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石・砥石・紡錘車），金属製品（銭貨・鉄砲玉）などです。



遺跡の遠景

縄文時代の竪穴建物跡

縄文時代の竪穴建物跡から出土している様子

方形周溝墓の全体の様子

方形周溝墓から出土した土器

調査の成果

調査区は，遺跡の西部である台地縁辺部にあたります。調査では，縄文時代，古墳時代，平安時代の集落や墓域（ぼいき）として断続的に土地利用されていることが明らかとなりました。縄文時代では，前期初頭から中期初頭の集落跡が確認でき，縄文海進と呼ばれる海水面が上昇した時期に営（いとな）まれた集落と考えられます。古墳時代では，４世紀の方形周溝墓１基が見つかりました。方形に区画された溝の内側の，ほぼ中央部に，埋葬施設（まいそうしせつ）が見つかりました。周溝からは，底に穴があけられたり，打ち欠かれたりしている土器が出土しています。亡くなった人を弔（とむら）う儀式を行った痕跡と考えられます。また，壺の中には，北陸地方の影響をうけた器形のものが出土しており，遠隔地の人々との交流がうかがわれます。また，６世紀の竪穴建物跡が確認でき，墓域から集落として土地利用されたことがわかりました。

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は，小美玉市において主要地方道玉里水戸線の道路改良事業を進めている。

平成25年11月6日，茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに，主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成25年12月2日に現地踏査を，平成25年12月20日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成26年1月17日，茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに，事業地内に殿畠遺跡が所在すること，及びその取扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成26年3月14日，茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに，文化財保護法第94条に基づき，土木工事の通知を提出した。平成26年3月20日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県水戸土木事務所長あてに現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年3月24日，茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに，主要地方道玉里水戸線の道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成26年3月24日，茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに，殿畠遺跡の発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は，茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成26年10月1日から12月31日まで発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過

殿畠遺跡の調査は，平成26年10月1日から12月31日までの3か月間にわたって実施した。以下，その概要を表で記載する。

期間／工程	10　月	11　月	12　月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注記 写真整理			
撤収			

第2章　位　置　と　環　境

第1節　位　置　と　地　形

殿畠遺跡は，茨城県小美玉市宮田字権現平 172 － 7 ほかに所在している。

小美玉市は，茨城県の中央部に位置し，巴川と園部川に挟まれた標高 30m を主とする行方台地と，園部川河口付近から西部へと広がる標高 20m 前後の出島・石岡台地によって二分されている。

これらの洪積台地からは，先の２河川に加えた鎌田川，梶無川の４河川が，支流を集めて北浦や霞ケ浦へと流入し，その過程で形成された谷津や沖積地が樹枝状で複雑に開析されている。特に巴川と園部川の沿岸においては，細長く発達した沖積地が形成されている[1)]。

当遺跡が所在する行方台地の西端部は，台地中央部から緩やかに下り標高 25 mほどとなり，園部川に沿って，北西へと延び，やがては吾国山の東麓へと発達している。

この台地を形成している地層は，下層位から石崎層，志崎層，笹神層，見和層（成田層に相当），茨城粘土層（常総粘土層に相当），関東ローム層，そして現在の生活面も含む沖積層と続いている。石崎層，志崎層，笹神層は内湾底堆積，見和層は下末吉海進時の外洋から干潟に至る堆積で第四期洪積古東京湾時代のものである。茨城粘土層からは陸成堆積となり，関東ローム層は火山灰堆積となる[2)]。

当遺跡は，小美玉市の中央部に位置し，園部川支流の沢目川左岸の標高約 22m の樹枝状の台地上に立地している。遺跡の範囲は，東西約 500 m，南北約 700 mで，今回の調査区は西部の台地縁辺部にあたる。現在の当遺跡周辺は，園部川沿岸の沖積地に水田が営まれ，台地上は山林や畑地として土地利用されている。

第2節　歴　史　的　環　境

殿畠遺跡〈１〉は，行方台地の西端部に位置し，西方に園部川や出島･石岡台地を望んで集落が営まれている。園部川の両岸においては，分布調査によって確認された多くの遺跡から，古くから人々の生活が営まれてきたことをうかがい知ることができる。特に，霞ケ浦に面した地域から園部川河口付近の台地上には遺跡の分布が密で，各時代の人々が，霞ケ浦やそれに注ぎ込む河川を生活に取り込みながら，有効に利用していたことを知ることができる。なお本節では，園部川下流を中心に記すこととする。

旧石器時代の遺跡は，ガラス質安山岩製のナイフ形石器が採取された富士峯遺跡や硬質頁岩製の尖頭器が採取された出口遺跡，ナイフ形石器，台形様石器が出土した館山遺跡が知られている。これらの他，香取下遺跡〈31〉，千部塚遺跡〈51〉，栗又四ケ遺跡〈66〉，大作台遺跡などでも確認されているが，全体的な分布は薄い。

縄文時代になると，遺跡数は爆発的に増加し，自然環境に育まれた狩猟・採取による生活の痕跡をうかがい知ることができる。小美玉市においては，草創期の遺跡こそ現時点では希薄であるが，早期以降中期にかけては急激に増加している。園部川下流域では，右岸の田木谷遺跡〈40〉，八幡脇貝塚〈43〉，宮後貝塚〈53〉，館山遺跡，左岸の兵助山遺跡〈６〉，池下北町遺跡〈11〉，原口遺跡〈24〉，古城ノ内遺跡〈30〉などが早期から中期の遺跡に該当している。当遺跡においても，前期の集落跡が確認できているが，後期以降では遺跡が急減する特徴がみられる。また，早期から前期の遺跡と中期の遺跡が形成される台地が，谷津を境に異なる傾向にあり，中期から後期にかけて遺跡群の社会的変化の構造が生じた可能性が指摘されている[3)]。

弥生時代の遺跡は梶無川以西で少数確認されている。沢目川が園部川へ合流する近辺には庄司ノ上遺跡〈７〉や火打久保上遺跡〈８〉が所在し，園部川右岸では香取下遺跡，東前遺跡〈36〉，桜久保遺跡〈47〉，千部塚遺跡，栗又四ヶ遺跡，弥陀ノ台遺跡〈76〉などが，谷津口やその奥に面した台地上に位置している。わずかに採集された土器片からは，後期に属するものが多いようである[4)]。

古墳時代では，園部川流域に集落跡や古墳群が分布している。前期は，当遺跡から南西側対岸の弥陀ノ台遺跡の調査で，竪穴建物跡７棟が確認され，報告では同時期の竪穴建物跡が３棟一組という有機的な関係を示唆されている[5)]。古墳は全長 67m の前方後円墳である羽黒山古墳を中心とする羽黒山古墳群が所在する。霞ケ浦の北東岸の台地上に立地する権現平古墳群で，方形周溝墓が１基確認されている[6)]。

中期には園部川下流域において集落，古墳群の形成はなされておらず，恋瀬川流域に形成された舟塚山古墳群（関東第２位の規模を有する舟塚山古墳を含む）に墳墓は集中している[7)]。

後期では約 100m ほどの前方後円墳である要害山古墳１号墳を中心とする要害山古墳群〈75〉のうち，要害山３号墳の調査で内径 27m，外径 42m の円墳で雲母片岩を使用した箱式石棺の埋葬施設が確認された。後世の盗掘により遺物や人骨は確認できなかったが，墳丘や周溝から出土している円筒型埴輪の時期から６世紀前半の築造と考えられている[8)]。このほか，全長 42m の前方後円墳である木船塚１号墳古墳を中心とする木船塚古墳群[9)]〈58〉，大塚古墳〈22〉や権現山古墳，円筒型埴輪や朝顔型埴輪が出土した地蔵塚古墳[10)]などが河口付近に多数存在している。また多くの古墳の被葬者である有力者が基盤とした集落跡も推測されており，羽黒山古墳における羽黒遺跡[11)]や大塚古墳における西ノ前遺跡〈23〉，地蔵塚古墳における羽抜沢遺跡がそれに該当するとされている[12)]。

奈良･平安時代の市域は常陸国茨城郡に位置し，『和名類聚抄』に記されている田余郷，白川郷，立花郷，生園郷，山前郷に比定されている。当遺跡が所在する宮田地区は，生園郷に含まれると考えられている[13)]。近辺の発掘調査では，区画が確認された宮平遺跡〈18〉や集落遺跡である天神遺跡などがあげられるが，その事例は少ない。遺跡の分布からは兵助山遺跡，天神平遺跡〈20〉，堂ノ上遺跡〈25〉など該期の遺跡とされるものは多数みられる。律令期に位置づけられる集落遺跡は古墳の所在地より離れているものが多く，古墳時代から継続する集落遺跡は古墳付近に所在するものと，離れるものが見受けられる。律令期に成立する集落，律令社会の中で早期段階で順応するグループや伝統を守るグループの存在などが推測される。

中世における当地域は，大掾氏，小田氏，江戸氏，佐竹氏などの抗争の場となった[14)]。園部川下流域には多くの城館跡が見られる。大掾氏の支城としてまず挙げられるのは，富士峯館跡，館山館跡，愛宕館跡，城ノ内館跡，要害館跡，田余館跡，飯塚館跡〈37〉，原山館跡〈38〉の玉里八館である。田余館は田余砦（取手山館跡）に比定され，江戸氏･佐竹氏進行のおりに激戦となった場所である。平成 24（2012）年に発掘調査され，曲輪状の平場３か所，堀跡６条，塹壕状の通路跡８か所，虎口跡１か所や門跡１か所が確認されている。宝篋印塔の部材を転用した鉄砲玉用砥石とともに火縄銃の鉄砲玉が多数出土している[15)]ことは，激戦を物語る資料として特筆される。

また，大掾氏家臣の居館とされる殿塚館跡〈68〉や笠松館跡〈79〉，大掾氏一族の築城とされる竹原城跡，弓削砦跡などがある。高原城跡〈91〉においては南北朝期に廃城となったとされるが，大掾氏の五輪塔が所在する鳳林寺，永福寺などの寺院や堀ノ内，木戸橋，関町の地名などから，富士館跡〈88〉と合わさって中郷城[16)]とする説もある。これらの城館跡は，園部川や沢目川の左岸に分布している。一方小田氏の支城は，長方形の主郭を持つ羽鳥館跡や鶴田城跡[17)]〈99〉，小田氏家臣園部氏の居城である小川城跡〈29〉がある。また，宮田館跡〈２〉や中根城跡〈21〉の支城であり，園部川･沢目川左岸の大掾氏の支城と対峙して分布している。

第１図　殿畠遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「石岡」）

表１　殿畠遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	殿畠遺跡		○		○	○	○	
2	宮田館跡						○	
3	東ノ下遺跡		○			○		
4	ハサマ遺跡		○		○			
5	三蔵久保遺跡				○			
6	兵助山遺跡		○			○		
7	庄司ノ上遺跡		○	○	○			
8	火打久保上遺跡		○	○				
9	西原遺跡		○					
10	大峰遺跡		○					
11	池下北町遺跡		○					
12	十一平遺跡		○		○			
13	下田城跡						○	
14	乾谷遺跡		○					
15	白旗後遺跡		○					
16	宮久保遺跡		○					
17	白旗前遺跡				○			
18	宮平遺跡		○		○	○		
19	柊平遺跡		○		○			
20	天神平遺跡		○			○		
21	中根城跡						○	
22	大塚古墳				○			
23	西ノ前遺跡		○		○			
24	原口遺跡		○			○		
25	堂ノ上遺跡		○		○	○		
26	五切遺跡		○			○		
27	小川焼窯跡							○
28	水走り遺跡		○					
29	小川城跡						○	
30	古城ノ内遺跡		○					
31	香取下遺跡	○	○	○		○		○
32	香取台稲荷古墳				○			
33	香取遺跡		○	○	○	○	○	○
34	折戸古墳				○			
35	辻微高地遺跡		○	○	○	○	○	○
36	東前遺跡		○	○		○	○	○
37	飯塚館跡				○	○	○	
38	原山館跡		○	○	○	○	○	○
39	中台北遺跡		○		○	○		
40	田木谷遺跡		○	○	○	○	○	
41	稲荷遺跡		○		○	○		
42	西平中根遺跡		○	○	○	○		
43	八幡脇貝塚		○			○		
44	西平西根古墳				○			
45	岩屋古墳				○			
46	岩屋遺跡		○	○	○	○		○
47	桜久保遺跡		○	○	○	○	○	○
48	東前古墳群				○			
49	鷲下古墳				○			
50	宮後古墳群				○			

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
51	千部塚遺跡	○	○	○	○	○	○	○
52	千部塚						○	○
53	宮後貝塚		○					
54	寺塔遺跡		○		○			○
55	沼田遺跡					○		○
56	沼田平遺跡		○	○	○	○		
57	大塚古墳群			○				
58	木船塚古墳群			○	○			
59	石橋遺跡		○		○	○		
60	木ノ内遺跡		○					
61	観音峯遺跡		○					
62	細田遺跡		○	○		○		
63	山ノ神遺跡		○	○	○	○		
64	原田向遺跡		○	○		○		
65	大山遺跡		○	○	○	○		
66	栗又四ヶ遺跡	○	○	○	○	○		
67	安楽寺阿弥陀堂跡						○	
68	殿塚館跡		○		○	○	○	
69	極楽寺遺跡					○		
70	駒崎遺跡		○	○	○	○		
71	境塚古墳				○			
72	天神山古墳				○			
73	権現山古墳群				○			
74	観音前遺跡		○			○	○	
75	要害山古墳群				○			
76	弥陀ノ台遺跡			○		○		
77	笠松遺跡		○		○	○		
78	茶屋塚古墳群				○			
79	笠松館跡		○	○	○		○	
80	高野遺跡		○			○		
81	根田上遺跡		○	○				
82	池下遺跡			○		○		
83	下坪遺跡		○	○		○	○	
84	蟹硲遺跡		○	○	○	○		
85	山ノ内古墳群				○			
86	七人塚古墳群				○			
87	君ヶ塚古墳群				○			
88	富士館跡						○	
89	平古墳群				○			
90	十一久保経塚群							○
91	高原城跡						○	
92	一字一石経塚							○
93	十三遺跡		○					
94	十三塚				○			
95	三箇弁天経塚群						○	
96	熊野権現古墳				○			
97	蝶巣塚古墳群				○			
98	東山遺跡		○	○	○	○		
99	鶴田城跡						○	

平成23年度の宮田館跡の調査では，調査区が舌状に張り出した台地の先端部及び園部川に面した急傾斜となる尾根部分で，２区画の曲輪跡と掘立柱建物跡１棟，土塁跡２条，堀跡１条，土坑１基が確認されている[18)]。

※　文中の〈　〉内の番号は，第１図及び表１の該当番号と同じである。なお，本章は『茨城県教育財団文化財調査報告』第374集を基にし，若干加筆したものである。

註

1）小川町史編さん委員会編『小川町史』下巻　小川町　1988年３月

2）横山芳春 「茨城県における更新統下総層群の層序と堆積史」『早稲田大学リポジトリ』 早稲田大学　2005年３月

3）小玉秀成・本田信之 『館山遺跡発掘調査報告書－旧石器・縄文・弥生時代編－玉里村総合文化センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 玉里村史料館　1999年３月

4）ａ本田信之「香取下遺跡」『玉里村史料館報　Vo.I ６』玉里村史料館　2001年３月
ｂ註１文献に同じ

5）小川和博・大渕淳志・大渕由紀子ほか 『石岡市弥陀ノ台遺跡－小美玉市道栗又四ヶ線道路改良工事に伴う発掘調査－』小美玉市・石岡市教育委員会・有限会社日考研茨城　2014年８月

6）伊東重敏「玉里村権現平古墳群」『玉里村埋蔵文化財報告』第１集　茨城県新治郡玉里村教育委員会　1994年３月

7）小林三郎 『玉里村権現山古墳発掘調査報告書』 玉里村教育委員会　2000年３月

8）宮本秀男・海老澤稔・安彦候良・佐々木義則『要害山古墳群発掘調査報告書（要害山古墳３号墳)』茨城県石岡市教育委員会　1988年３月

9）註６文献に同じ

10）宮内良隆・石田幹治 『地蔵塚古墳』 小川町教育委員会　1981年３月

11）赤井博之 「竹原小学校遺跡出土の古墳時代前期の埴輪と土師器」『小美玉市史料館報　第４号』小美玉市史料館　2010年３月

12）註９文献に同じ

13）註１文献に同じ

14）註１文献に同じ

15）本田信之・土生朗治 「－茨城県小美玉市－取手山館跡」『小美玉市埋蔵文化財調査報告』第１集　小美玉市教育委員会・有限会社　毛野考古学研究所　2013年８月

16）中郷城の所在については諸説あり，この他にも竹原城を比定する説や竹原中郷地内の高原城跡以外の場所に求める説などがある。中郷地区においては，上馬場から竹原城跡に向かうルート上にあり，また中郷から三箇弁天経塚群〈95〉や中世においてランドマークとなる十三塚〈94〉，熊野権現古墳〈96〉を経由して三箇へ至るルートもみられ，交通の要所であったことがうかがわれる。

17）美野里町史編さん委員会編『美野里町史（上)』 美野里町　1989年３月

18）田村雅樹 「宮田館跡　主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第374集　2013年３月

第３章　調　査　の　成　果

第１節　調　査　の　概　要

殿畠遺跡は，小美玉市の中央部に位置し，園部川支流の沢目川左岸の標高約 22 ｍの台地上に立地している。調査区の地形は，台地西部の縁辺部と急傾斜面にあたる。調査面積 7,625㎡のうち，5,162㎡は崖部であるため安全を考慮して調査から除外することになり，平坦部の 2,463㎡を行った。平坦部は谷を挟んで北部の 2,053㎡をＡ区，南部の 410㎡をＢ区と呼称した。調査前の現況は山林である。

調査の結果，竪穴建物跡 18 棟（縄文時代 14・古墳時代２・平安時代２），方形周溝墓１基（古墳時代），溝跡７条（古墳時代２・時期不明５），陥し穴４基（縄文時代），炉穴１基（縄文時代），土坑 19 基（縄文時代）を確認した。遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20㎝）に 18 箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢），弥生土器（壺），土師器（坏・坩・高坏・鉢・壺・提瓶・甕・手捏），須恵器（坏・蓋・甕），陶磁器（碗・皿・擂鉢），土製品（土玉・円筒埴輪），石器（掻器・鏃・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石・砥石・紡錘車），金属製品（銭貨･鉄砲玉）などである。調査Ｂ区については，宮田館に関する施設の可能性を視野に入れ，地形に合せて，東西南北方向に６本のトレンチを入れ，地山まで掘り下げた。地山までの土層堆積状況の確認を行ったが，遺構は確認できなかった。盛土整地層は確認できたが，下層に現代の猟銃の薬莢が出土したことから，時期は現代と判明した。

第２節　基　本　層　序

調査区北東部の台地平坦部（Ｂ２b6 区）に設定した。

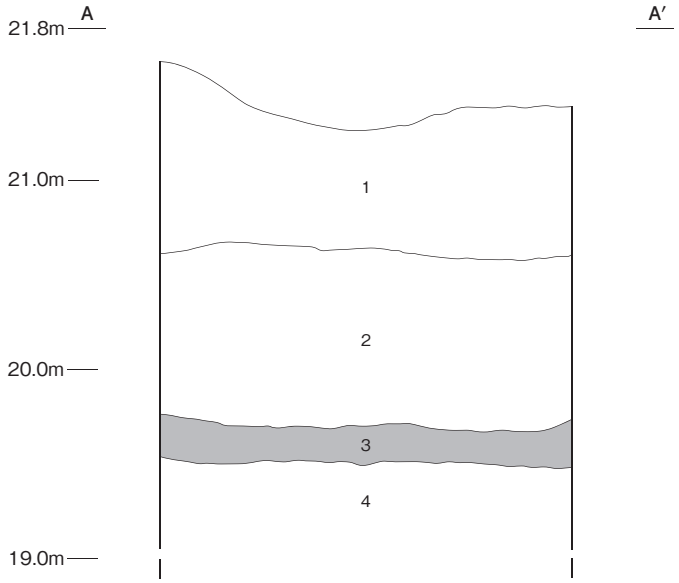
第１層は黒褐色の腐植土である。粘性，締まりともに弱く，層厚は 80 ～ 102㎝である。

第２層は褐色のハードローム層である。粘性は普通で，締まりが強く，層厚は 78 ～ 90㎝である。

第３層は暗褐色のハードローム層である。第２黒色帯（ＢＢⅡ）に相当する。粘性は普通で，締まりが強く，層厚は 22 ～ 28㎝である。

第４層は灰白色の粘土層である。常総粘土層に相当する。締まりともに強い。層厚は，下層が未掘のため不明である。

遺構は，第２層の上面で確認した。



第２図　基本土層図

第３図　殿畠遺跡調査区設定図（小川町都市計画図 2,500 分の 1 より作成）

第３節 遺 構 と 遺 物

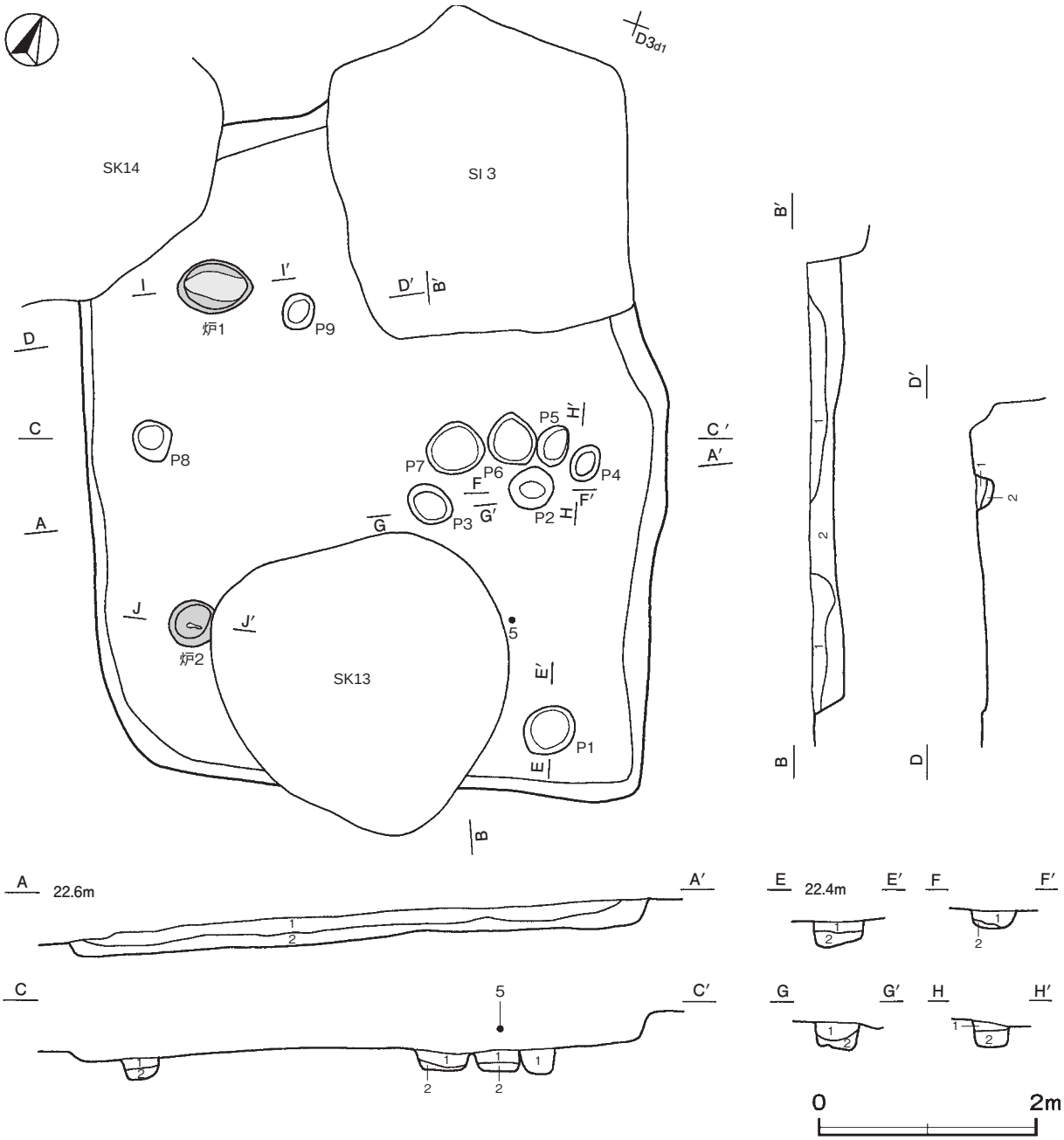
１　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，調査区域内のほぼ全域にわたって分布している。竪穴建物跡14棟，陥し穴４基，炉穴１基，土坑19基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

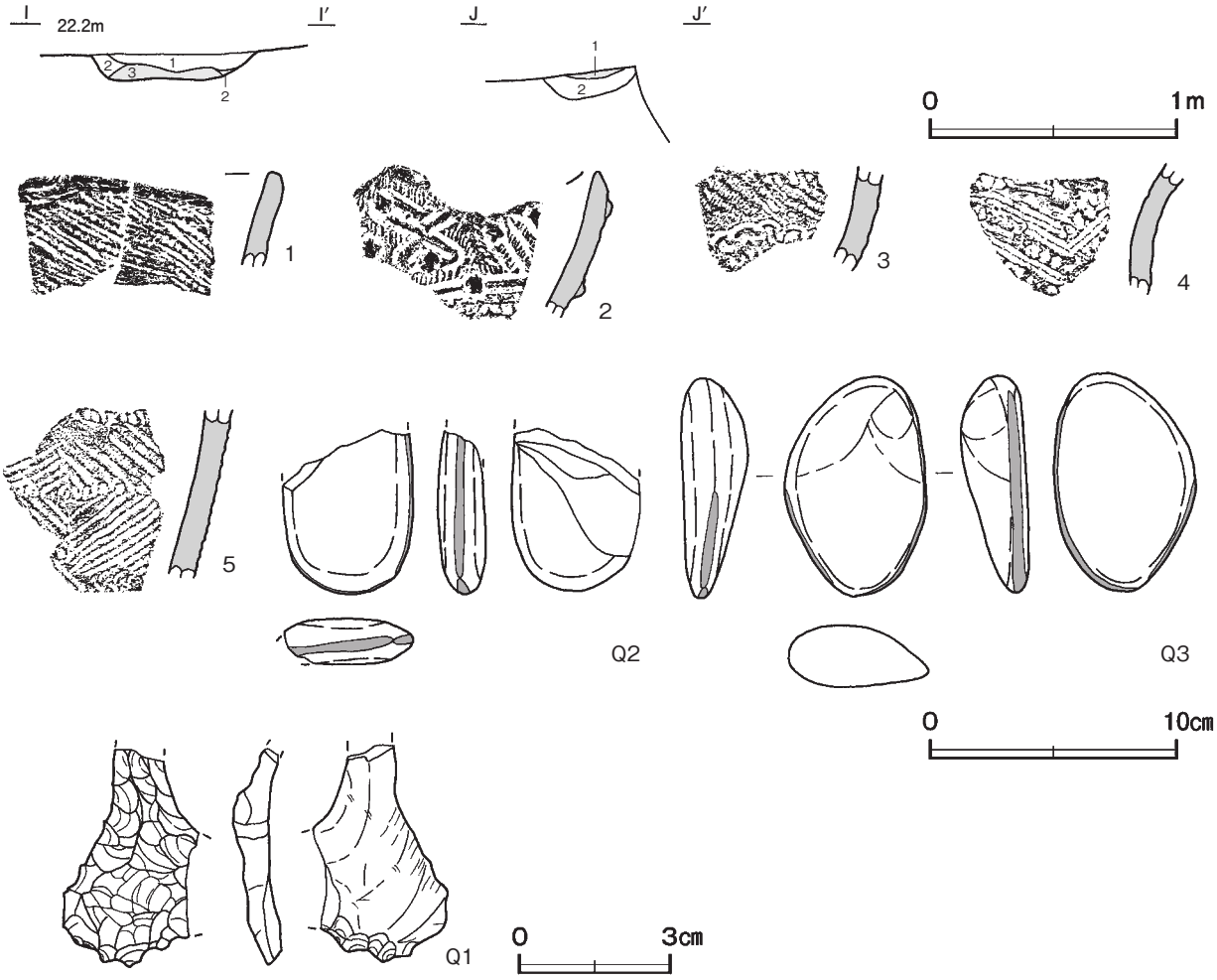
(1)　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第４・５図　PL ２）

位置　調査Ａ区南東部のＤ２e0区，標高22ｍほどの台地平坦部に位置している。



第４図　第１号竪穴建物跡実測図



第５図　第１号竪穴建物跡・出土遺物実測図

重複関係　第３号竪穴建物，第 13・14 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸 6.00 m，短軸 5.30 mの長方形で，長軸方向はN－22°－Wである。壁は高さ 10 ～ 23cmで，外傾して立ち上っている。

床　平坦で，全面が踏み固められている。

炉　２か所。炉１は北西コーナ部，炉２は南西コーナー部にそれぞれ付設されている。炉１は長径 70cm，短径 48cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面から深さ 12cmで，火熱を受け赤変硬化している。炉２は第 13 号土坑に東部をわずかに掘り込まれているが，径 40cmのほぼ円形の地床炉と推定できる。炉床は床面とほぼ同じ高さで，火熱を受けて赤変硬化している。

炉１土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3	赤褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉２土層解説

1	明赤褐色	焼土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　９か所。ほかの遺構に掘り込まれていることから，主柱穴や出入り口施設に伴うピットは不明である。Ｐ１～Ｐ９の深さは 16 ～ 25cmである。

ピット土層解説（各ピット共通）

1	褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	明褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
１　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　２　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 121 点（深鉢），石器３点（石匙１，磨石２），剥片 15 点（チャート６，砂岩１，安山岩８）が，全域に散在して覆土上層から下層にかけて出土している。４は北西部の覆土下層，３は北西部，２・５・Ｑ１は南東部，１は北東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ｉ式期）と考えられる。

第１号竪穴建物跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	無節縄文Ｒ　内面丁寧な磨き	北東部覆土上層	関山式
2	縄文土器	深鉢	－	(5.9)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文　内面丁寧な磨き	南東部覆土上層	関山Ｉ式
3	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・繊維	黄橙	普通	0段多条縄文ＲＬ→コンパス文　内面丁寧な磨き	北西部覆土上層	関山Ｉ式
4	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	直前段縄文による合撚　内面丁寧な磨き	北西部覆土下層	関山Ｉ式
5	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	0段多条羽状縄文→刺突文　内面丁寧な磨き	南東部覆土上層	関山Ｉ式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ１	石匙	(4.4)	(2.7)	(0.95)	(7.05)	石英	横型　両面押圧剥離　つまみ部・刃部一部欠損	南東部覆土上層	ＰＬ 18
Ｑ２	磨石	(6.6)	5.2	1.9	(79.1)	砂岩	側縁部使用痕	覆土中	－
Ｑ３	磨石	8.8	5.6	2.7	147.6	砂岩	側縁部使用痕	覆土中	－

第２号竪穴建物跡（第６～８図　PL ２）

位置　調査Ａ区南東部のＤ２c9 区，標高 22 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第８号竪穴建物跡，第 19 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 5.40 m，短径 5.22 mの円形である。壁は高さ６～ 28cmで，外傾している。

床　平坦で，全面が踏み固められている。

炉　南西部寄りに付設されている。長径 70cm，短径 62cmのほぼ円形の地床炉である。炉床は床面から 18cmほどＵ字状に掘りくぼめ，第３層を埋め戻して構築され，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
１　暗　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子少量　　３　明　褐　色　ロームブロック多量
２　赤　褐　色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子微量

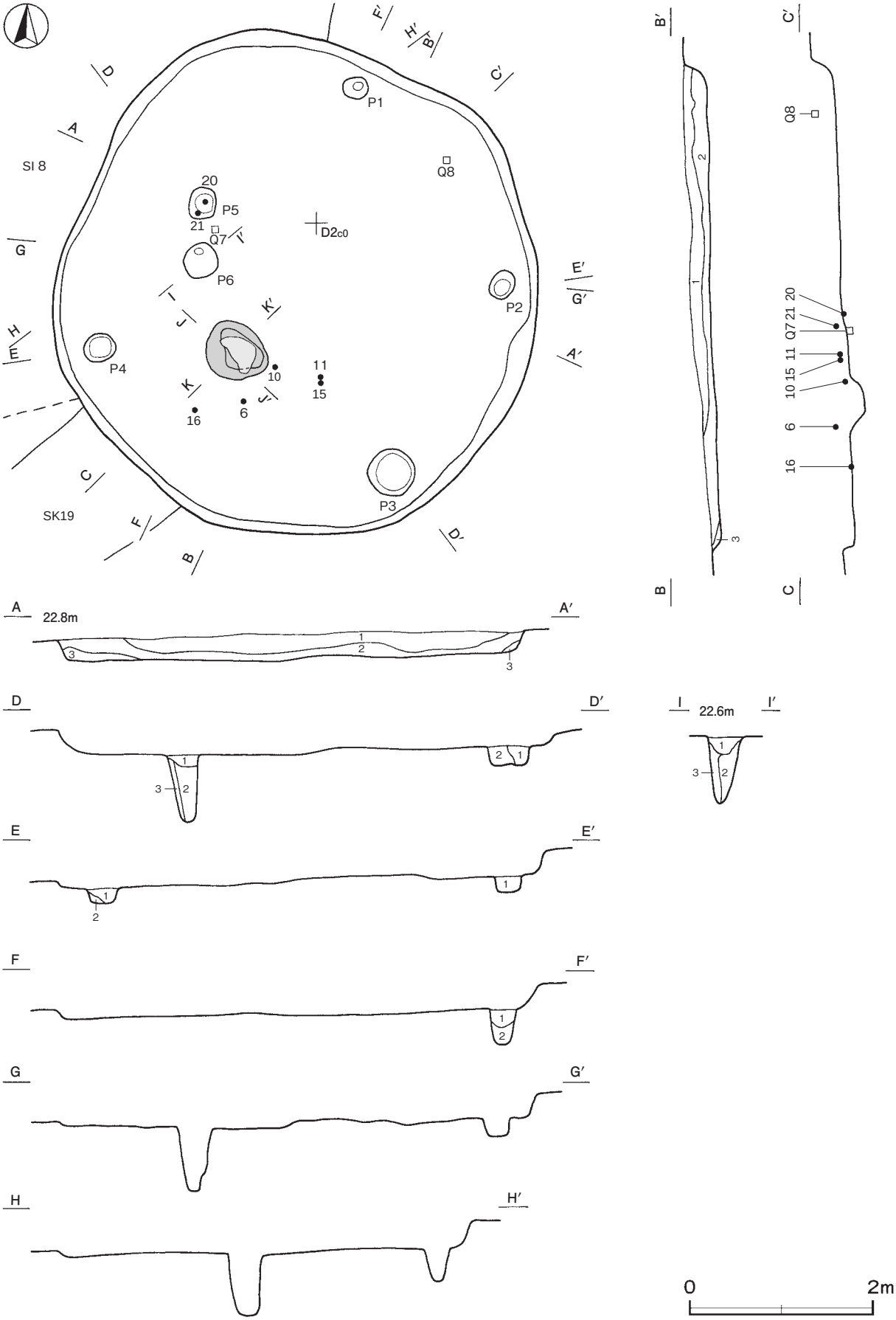
ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ５は深さ 19 ～ 68cmで，配置状況から主柱穴と考えられる。Ｐ６は深さ 73cmで，性格不明である。

ピット土層解説（Ｐ１～Ｐ４）
１　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
２　褐　　色　ロームブロック多量

ピット土層解説（Ｐ５・Ｐ６）
１　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
２　褐　　色　ロームブロック中量
３　褐　　色　ロームブロック多量

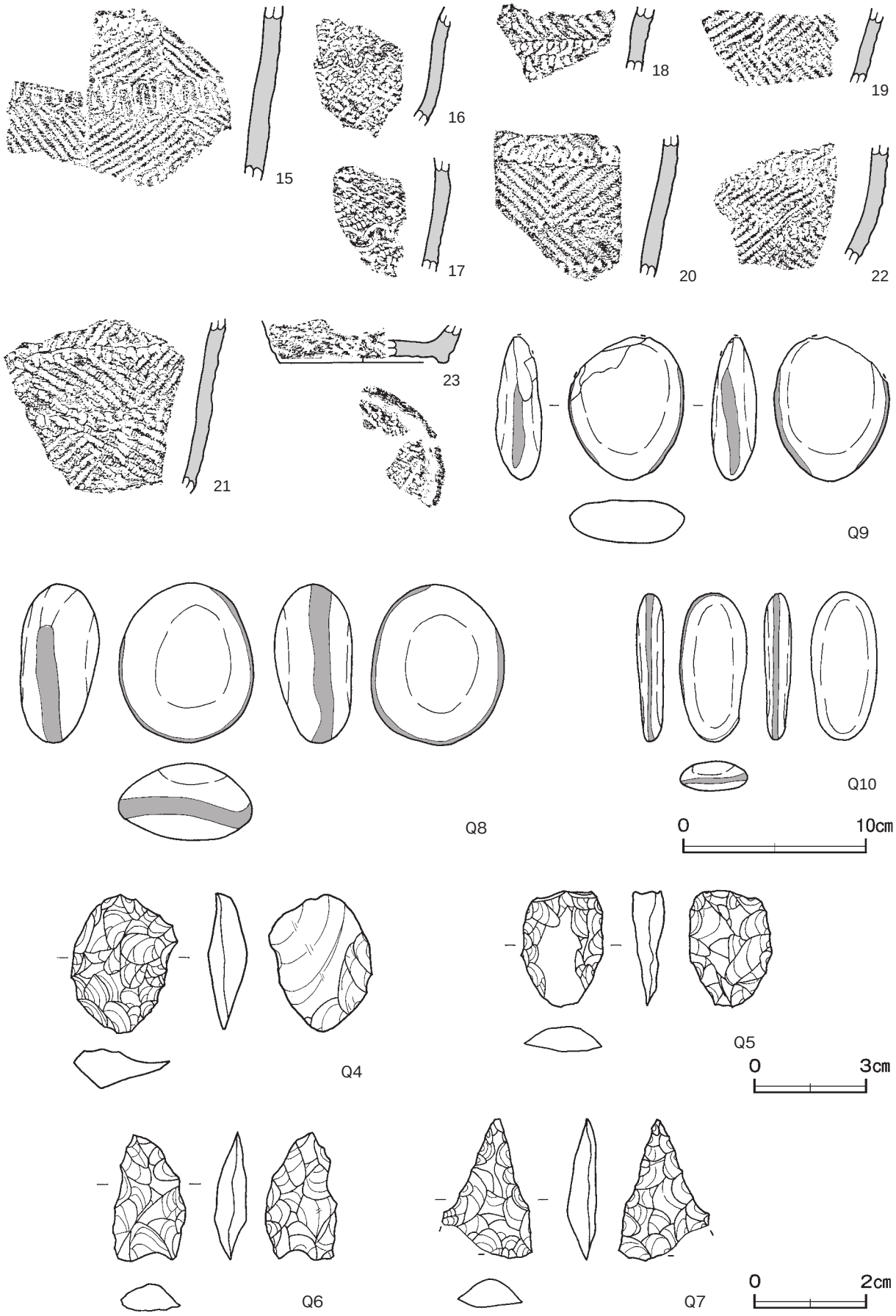
覆土　３層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
１　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量　　３　黄　褐　色　ロームブロック多量
２　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量



第６図　第２号竪穴建物跡実測図

第７図　第２号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第８図　第２号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片 221 点（深鉢），石器８点（掻器２，鏃２，磨石４），剥片 42 点（砂岩 13，安山岩 11，チャート 10，石英６，黒色片岩１，緑色片岩１），粘土塊１点が，それぞれ全域に散在して，覆土上層から床面にかけて出土している。20 はＰ５内，10 は南西部の炉の付近，Ｑ７は北西部の床面，Ｑ６・Ｑ 10 は北東部，７～９・12・18・19・21・22 は北西部，13・14・16・17・Ｑ９は南西部，11・15 は南部の覆土下層，６は南西部，23・Ｑ５は南東部，Ｑ８は北東部の覆土上層，Ｑ４は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ｉ式期）と考えられる。

第２号竪穴建物跡出土遺物観察表（第７・８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	縄文土器	深鉢	－	(3.3)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	南西部覆土上層	関山Ｉ式
7	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	北西部覆土下層	関山Ｉ式
8	縄文土器	深鉢	－	(6.3)	－	長石･石英･繊維	にぶい赤褐	普通	口縁部梯子状沈線文→瘤状貼付文　胴部ループ文　単節縄文	北西部覆土下層	関山Ｉ式 ＰＬ 16
9	縄文土器	深鉢	－	(9.7)	－	長石･石英･繊維	褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文　胴部０段多条縄文	北西部覆土下層	関山Ｉ式 ＰＬ 16
10	縄文土器	深鉢	[30.3]	(14.5)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	口唇部刻み目文　口縁部結束縄文第１種→コンパス文→瘤状貼付文　胴部結束縄文第１種→コンパス文	南西部床面	10% 関山Ｉ式 ＰＬ 16
11	縄文土器	深鉢	[37.6]	(29.0)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	口唇部刻み目文　口縁部結束縄文第１種→コンパス文→瘤状貼付文　胴部上位結束縄文第１種→縦長のコンパス文　下位多段ループ文	南部覆土下層	30% 関山Ｉ式 ＰＬ 16
12	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	長石･石英･繊維	明赤褐	普通	０段多条縄文	北西部覆土下層	関山Ｉ式
13	縄文土器	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	刻み目文　０段多条縄文→半截竹管による沈線文	南西部覆土下層	関山式
14	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	－	長石･石英･繊維	にぶい橙	普通	無節縄文Ｒ	南西部覆土下層	関山Ｉ式
15	縄文土器	深鉢	－	(9.5)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	０段多条縄文羽状構成→刺突文　コンパス文	南部覆土下層	関山Ｉ式
16	縄文土器	深鉢	－	(6.5)	－	長石･石英･繊維	明褐	普通	０段多条羽状縄文→コンパス文	南西部覆土下層	関山Ｉ式
17	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石･石英･繊維	にぶい褐	普通	０段多条羽状縄文→コンパス文	南西部覆土下層	関山Ｉ式
18	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	普通	結節第１種羽状縄文	北西部覆土下層	関山式
19	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石･石英･繊維	灰褐	普通	０段多条羽状縄文	北西部覆土下層	関山Ｉ式
20	縄文土器	深鉢	－	(7.8)	－	長石･石英･繊維	橙	普通	０段多条羽状縄文	Ｐ５内	関山Ｉ式 ＰＬ 16
21	縄文土器	深鉢	－	(9.5)	－	長石･石英･繊維	にぶい橙	普通	単節羽状縄文	北西部覆土下層	関山式 ＰＬ 16
22	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	普通	０段多条羽状縄文	北西部覆土下層	関山Ｉ式
23	縄文土器	深鉢	－	(2.1)	[9.0]	長石・石英・雲母・繊維	明赤褐	普通	上げ底　胴部下端・底部外面単節縄文 LR	南東部覆土上層	５%　関山式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Ｑ４	掻器	3.7	2.8	1.1	7.37	チャート	片側側面刃部調整	覆土中	ＰＬ 18
Ｑ５	掻器	3.2	2.2	0.8	5.70	黒色頁岩	両面押圧剥離　側縁部刃部調整	南東部覆土上層	ＰＬ 18
Ｑ６	鏃	2.3	1.3	0.45	1.32	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離	北東部覆土下層	ＰＬ 18
Ｑ７	鏃	2.6	(1.6)	0.5	(1.56)	石灰岩	平基無茎鏃　両面押圧剥離	北西部床面	ＰＬ 18
Ｑ８	磨石	8.6	7.3	4.2	325.8	砂岩	側縁部両面使用痕	北東部覆土上層	－
Ｑ９	磨石	(7.8)	6.2	2.4	(155.9)	礫岩	側縁部両面使用痕	南西部覆土下層	－
Ｑ 10	磨石	8.0	3.5	1.4	57.2	砂岩	側縁部両面使用痕	北東部覆土下層	－

第４号竪穴建物跡（第９～ 11 図）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２d7 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第５・７・11・13・16 号竪穴建物に掘り込まれている。

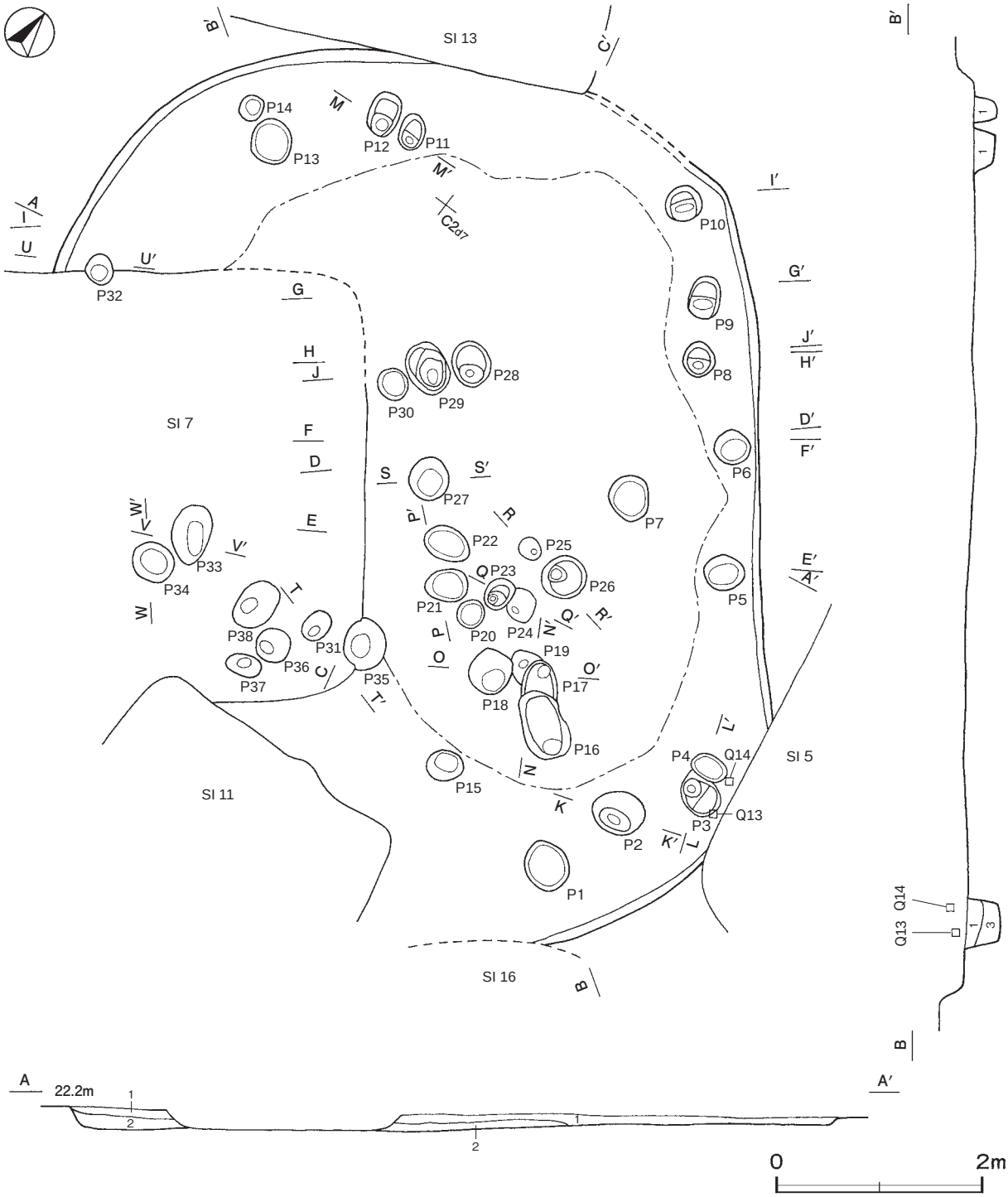
規模と形状　ほかの竪穴建物に掘り込まれているため，北西・南東は 8.72 ｍで，北東・南西軸は 6.68 ｍしか確認できなかった。残存部分から楕円形と推測でき，北西・南東軸方向はＮ－ 45°－Ｗである。壁は高さ 18 ～ 22㎝で，外傾している。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。

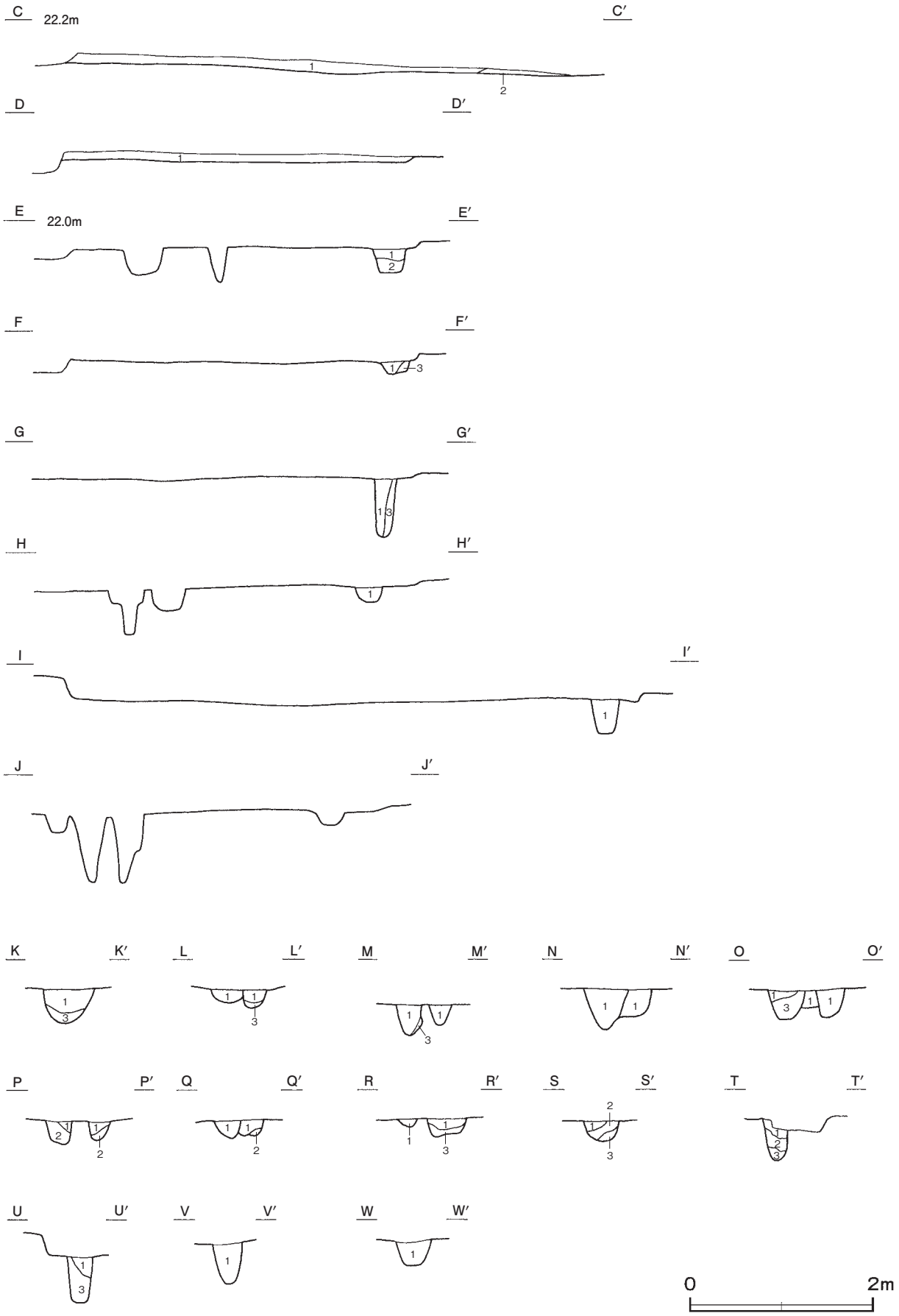
ピット　38か所。Ｐ１～Ｐ38は深さ12～74cmである。配置状況がまばらで，ほかの遺構に掘り込まれているため，主柱穴や出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。

ピット土層解説（Ｐ９・12・18・26・34以外）
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黄　褐　色　ロームブロック多量

ピット土層解説（Ｐ９・12・18・26・34）
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量



第９図　第４号竪穴建物跡実測図（１）



第 10 図　第４号竪穴建物跡実測図（２）

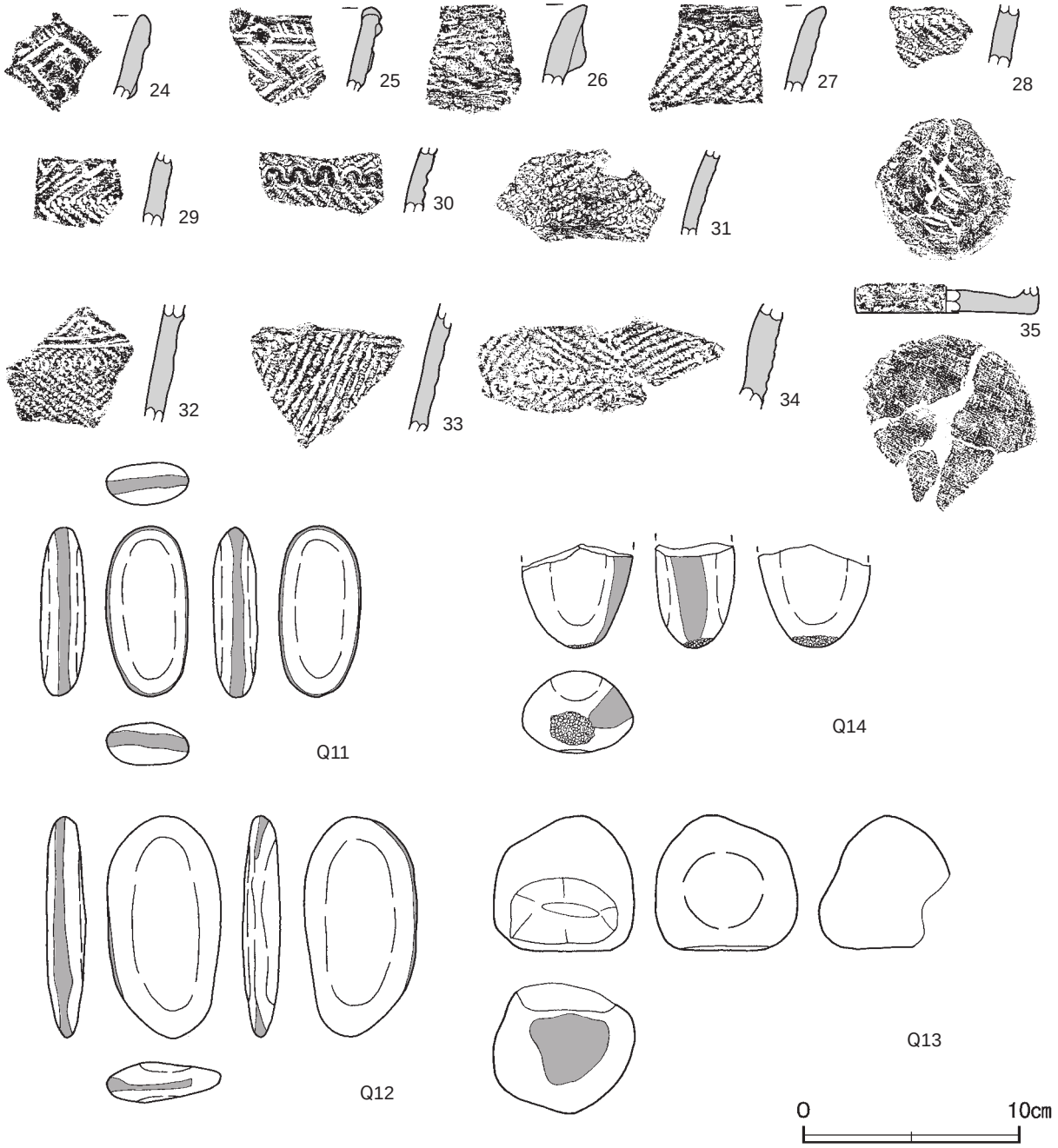
覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

１　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量　　２　明　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 128 点（深鉢），石器４点（磨石３，敲石１），剥片 35 点（砂岩 19，チャート８，安山岩５，石英２，デイサイト１），火熱した礫１点が，全域に散在して覆土上層から下層にかけて出土している。25・27 は南東部の覆土下層，24・26・29・32 は北西部，28・30・Q 11 ～Q 14 は南東部の覆土上層，31・33 ～ 35 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第 11 図　第４号竪穴建物跡出土遺物実測図

第４号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 11 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
24	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・繊維	にぶい黄褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	北西部覆土上層	関山Ⅰ式
25	縄文土器	深鉢	－	(3.7)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	南東部覆土下層	関山Ⅰ式
26	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	鍔状貼付文→無節縄文Ｒ	北西部覆土上層	関山Ⅰ式
27	縄文土器	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・繊維	明褐	普通	単節縄文 LR	南東部覆土下層	関山式
28	縄文土器	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	単節縄文 LR →刺突文	南東部覆土上層	関山式
29	縄文土器	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英・繊維	橙	普通	単節羽状縄文→コンパス文	北西部覆土上層	関山式
30	縄文土器	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	単節羽状縄文→コンパス文	南東部覆土上層	関山Ⅰ式
31	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	単節羽状縄文	覆土中	関山Ⅰ式
32	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	単節羽状縄文→半截竹管による沈線文→刺突文→瘤状貼付文	北西部覆土上層	関山Ⅰ式
33	縄文土器	深鉢	－	(5.9)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	結束縄文第１種	覆土中	関山式
34	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	結束縄文第１種	覆土中	関山Ⅰ式
35	縄文土器	深鉢	－	(1.2)	[8.2]	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	外・内面ナデ　内面擦痕	覆土中	５％ 前期前半

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ 11	磨石	7.8	3.7	2.0	86.4	砂岩	側縁部使用痕	南東部覆土上層	－
Ｑ 12	磨石	10.1	5.1	1.8	125.4	砂岩	側縁部片面使用痕	南東部覆土上層	－
Ｑ 13	磨石	6.1	6.5	6.0	307.2	砂岩	側面片面に指掛け状の剥離　一面使用痕	南東部覆土上層	ＰＬ 18
Ｑ 14	敲石	(4.8)	5.1	3.7	(98.0)	砂岩	磨石兼用　上部欠損　先端部敲打痕　側縁部片面磨痕	南東部覆土上層	－

第５号竪穴建物跡（第 12 図　PL ３）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２d8 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第４号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　東部が調査区域外へ延びているため，南北軸は 5.25 ｍで，東西軸は 3.70 ｍしか確認できなかった。確認できた部分から方形または長方形と推測でき，南北軸方向はＮ－８°－Ｗである。壁は高さ 15 ～ 20cmで，外傾している。

床　平坦で，全体が踏み固められている。

ピット　４か所。東部が調査区域外へ延びているため，不明な部分があるが，Ｐ１は深さ 65cmで主柱穴と考えられ，Ｐ２～Ｐ４は深さ 10 ～ 24cmで補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説（Ｐ１）
1　暗　褐　色　ロームブロック中量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック少量
4　褐　　色　ロームブロック多量

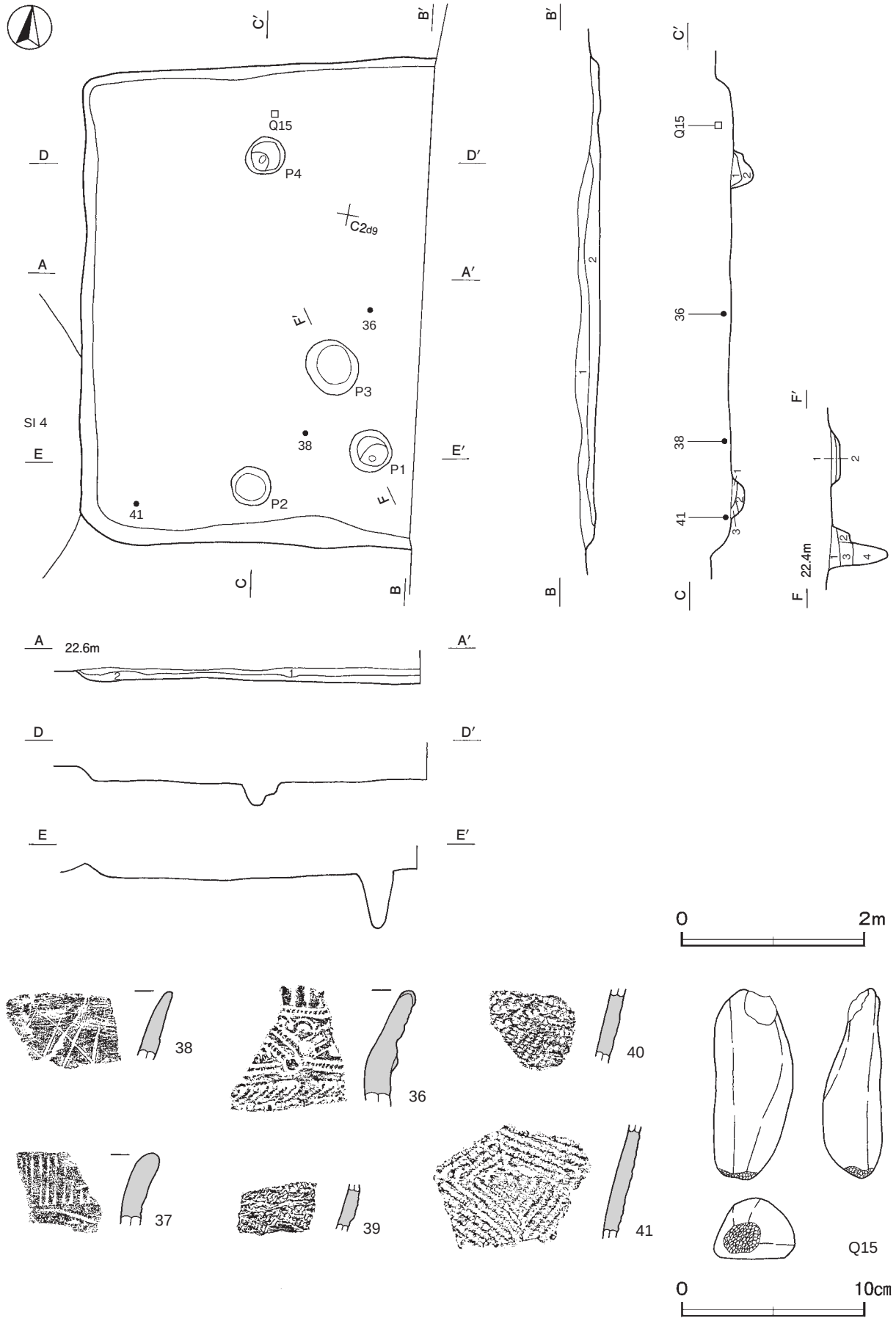
ピット土層解説（Ｐ２～Ｐ４）
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

覆土　２層に分層できる。含有物が少なく，周囲からの流れ込んだ状況から，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片 73 点（深鉢），石器１点（敲石），剥片 23 点（砂岩 12，チャート７，黒色片岩１，石英閃緑岩１，石灰岩１，石英１）が，覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。38 は南部，41 は南西コーナー部，36 は東部の覆土下層，37・40 は南東部，39 は北西部，Ｑ 15 は北部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，前期前半の関山式と前期中葉の黒浜式の土器片が混在しているが，出土土器から前期中葉（黒浜式期）と考えられる。



第 12 図　第５号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第５号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 12 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
36	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石･石英･繊維	橙	普通	口唇部山形の刻み目　口縁部梯子状沈線文→瘤状貼付文	東部覆土下層	関山Ⅰ式
37	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子・繊維	にぶい橙･褐	普通	半截竹管文	南東部覆土上層	関山Ⅱ式
38	縄文土器	深鉢	－	(3.7)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	格子状沈線文	南部覆土下層	黒浜式
39	縄文土器	深鉢	－	(2.4)	－	長石・繊維	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＬＲ	北西部覆土上層	黒浜式
40	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文	南東部覆土上層	黒浜式
41	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	普通	単節羽状縄文	南西コーナー部覆土下層	黒浜式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ 15	敲石	10.3	4.5	3.3	(171.8)	石英閃緑岩	一部欠損　先端部敲打痕	北部覆土上層	－

第７号竪穴建物跡（第 13・14 図　PL ３・４）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２d6 区，標高 21 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第４号竪穴建物跡を掘り込み，第 11 号竪穴建物，第 15 号土坑，第４号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長軸 5.38 ｍ，短軸 4.16 ｍの長方形で，長軸方向はＮ－ 51 °－Ｅである。壁は高さ 18 ～ 22cmで，外傾している。

床　平坦で，炉の周囲と東壁寄りが踏み固められている。

炉　炉はほぼ中央部に付設されている。長径 102cm，短径 92cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面から深さ 28cmで，火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1　赤　褐　色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　黄　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック多量

ピット　９か所。Ｐ１～Ｐ６は深さ 10 ～ 41cmで，配置状況から主柱穴と考えられる。Ｐ７は深さ 21cmで配置状況と床面の硬化範囲から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ８・Ｐ９は深さはそれぞれ 15cm，34cmで，それぞれコーナー部に配置することから，補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説（各ピット共通）

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック多量
3　明　褐　色　ロームブロック多量

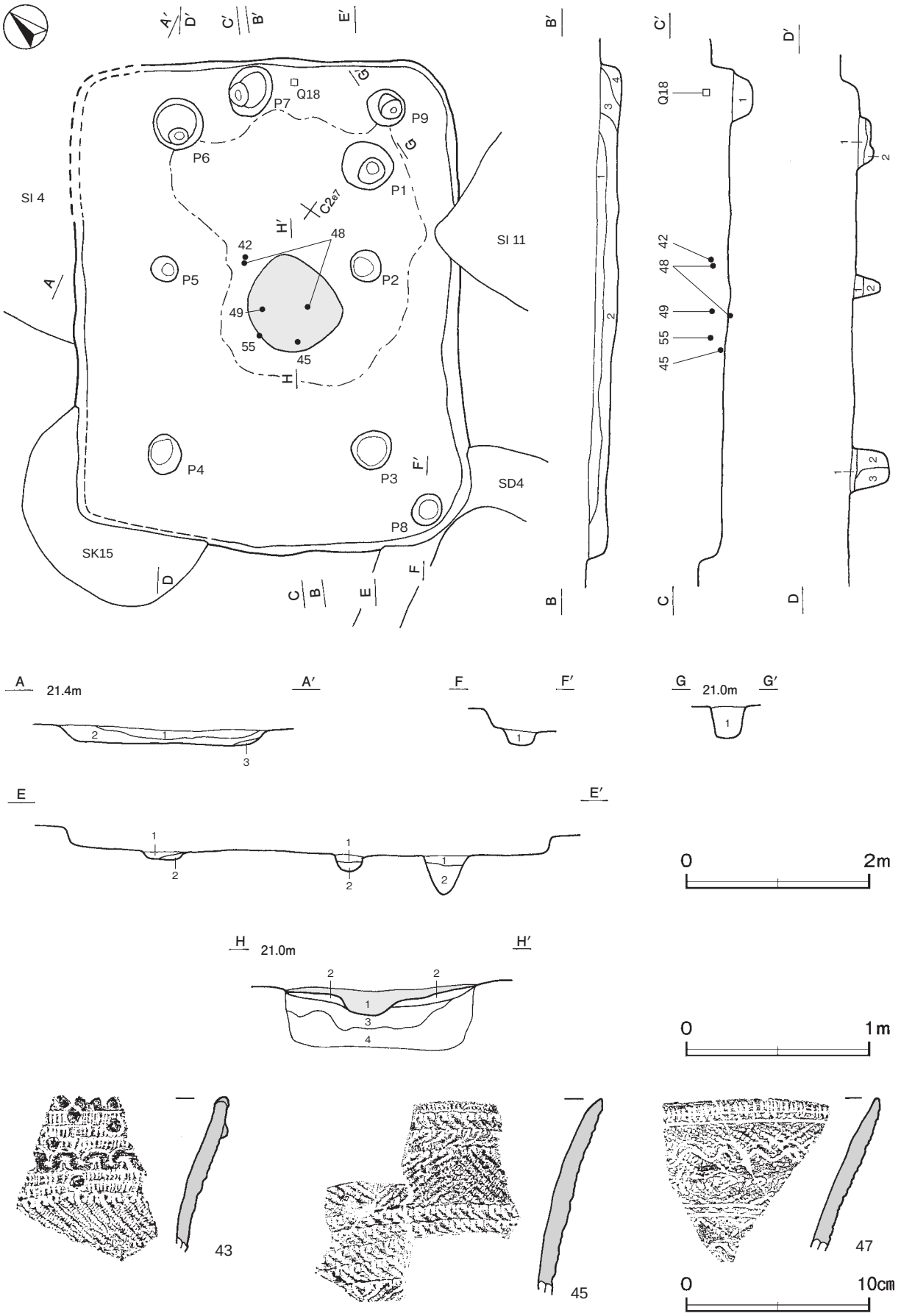
覆土　４層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

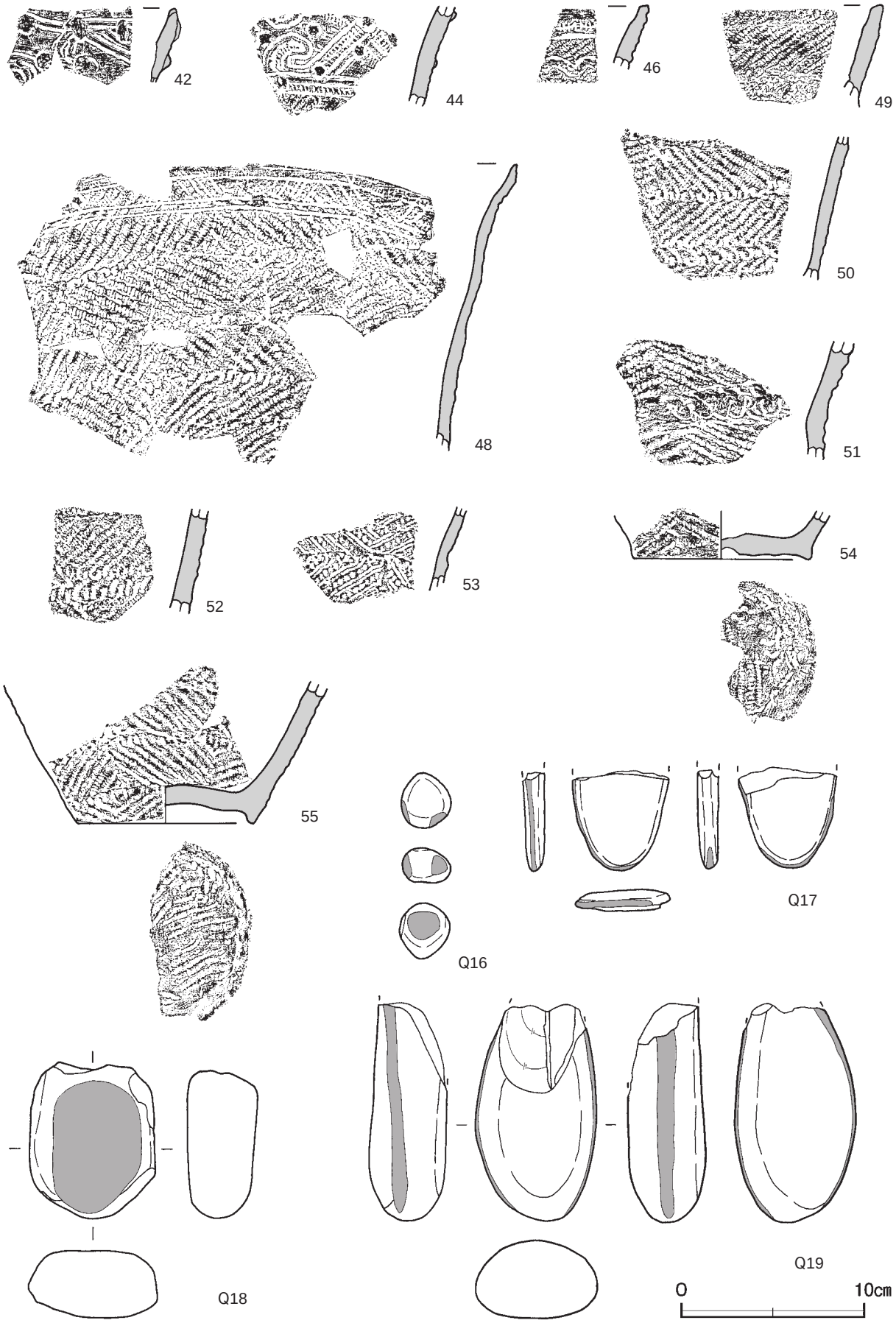
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片 300 点（深鉢），石器４点（磨石），剥片 71 点（安山岩 44，砂岩 20，チャート５，雲母片岩１，石英岩１）が，覆土上層と炉内から散在した状態で出土している。特に覆土上層のものは，北部からの出土量が多くみられる。53 は炉の掘方覆土中，45･48 は炉内，42･49･55 は中央部，43･44･54 は南部，46・47・50 ～ 52，Ｑ 17・Ｑ 19 は北部，Ｑ 18 北東部の覆土上層，Ｑ 16 は覆土中からそれぞれ出土している。なお 48 は，炉内と中央部の覆土上層から出土している破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第13図　第７号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第 14 図　第７号竪穴建物跡出土遺物実測図

第７号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 13・14 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
42	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	半截竹管による沈線文→瘤状貼付文	中央部覆土上層	関山Ⅰ式
43	縄文土器	深鉢	－	(8.3)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい褐	普通	口唇部山形の貼付文　口縁部梯子状沈線文→コンパス文→瘤状貼付文　胴部０段多条縄文	南部覆土上層	関山Ⅰ式 ＰＬ 16
44	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	外褐／内にぶい橙	普通	口縁部半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→コンパス文→瘤状貼付文　胴部０段多条縄文	南部覆土上層	関山Ⅰ式
45	縄文土器	深鉢	－	(10.4)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	外橙／内にぶい褐	普通	口唇部刻み目　単節羽状縄文→ループ文	炉内	関山式 ＰＬ 16
46	縄文土器	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	単節縄文 RL →梯子状沈線文　コンパス文	北部覆土上層	関山Ⅰ式
47	縄文土器	深鉢	－	(8.6)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	単節縄文 LR →梯子状沈線文→コンパス文　刺突文	北部覆土上層	関山Ⅱ式 ＰＬ 16
48	縄文土器	深鉢	－	(15.4)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	結束縄文第１種→梯子状沈線文	中央部覆土上層／炉内	関山Ⅱ式 ＰＬ 16
49	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	結束縄文第１種	中央部覆土上層	関山式
50	縄文土器	深鉢	－	(7.7)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	外橙／内灰黄褐	普通	結束縄文第１種	北部覆土上層	関山式 ＰＬ 17
51	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	単節羽状縄文→ループ文	北部覆土上層	関山Ⅰ式
52	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・雲母・繊維	明赤褐	普通	結束縄文第１種	北部覆土上層	関山式
53	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	直前段合撚（正反合）羽状縄文	炉掘方覆土中	関山式
54	縄文土器	深鉢	－	(2.6)	[9.6]	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	胴部下端単節羽状縄文　底部外面単節縄文 LR	南部覆土上層	５％　関山式
55	縄文土器	深鉢	－	(7.6)	[9.4]	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	胴部下端結束縄文第１種　底部外面単節縄文 LR	中央部覆土上層	10%　関山式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 16	磨石	3.0	2.7	1.9	18.5	泥岩	３か所使用痕	覆土中	ＰＬ 18
Q 17	磨石	(5.4)	(5.2)	1.2	(39.5)	砂岩	側縁部両面使用痕	北部覆土上層	－
Q 18	磨石	8.4	7.0	4.0	298.0	砂岩	一面使用痕	北東部覆土上層	ＰＬ 18
Q 19	磨石	(11.8)	6.6	4.3	(476.6)	砂岩	側縁部両面使用痕	北部覆土上層	ＰＬ 18

第８号竪穴建物跡（第 15・16 図　PL ４）

位置　調査Ａ区南部のＤ２b9 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 18 号竪穴建物跡，第 29 号土坑を掘り込み，第２号竪穴建物，第２号陥し穴，第５・19 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　ほかの遺構に掘り込まれているため，東西軸 6.60 ｍで，南北軸は 7.10 ｍしか確認できなかった。長方形と推定でき，南北軸方向はＮ－ 15°－ Ｗである。壁は高さ８～ 10cmで，緩やかに立ち上っている。

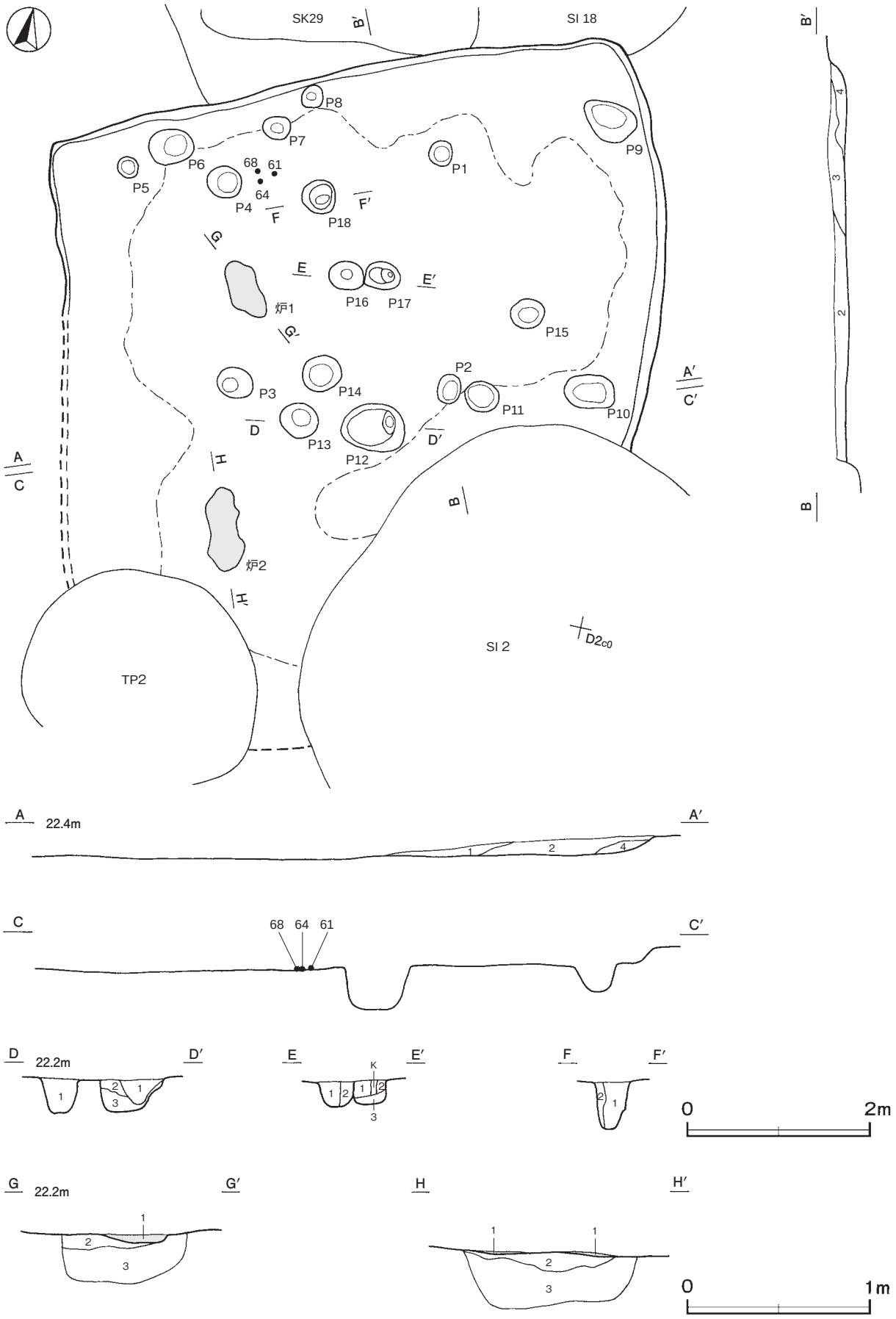
床　平坦で，炉の周囲と東壁寄りが踏み固められている。

炉　２か所。炉１は北西部寄り，炉２南西部寄りにそれぞれ付設されている。炉１は長径 70cm，短径 48cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面とほぼ同じ高さで，火熱を受け赤変硬化している。床面から 28cmまで掘り込み，焼土ブロックとロームブロックを混入した２層とロームブロックを混入した３層を埋め戻して構築されている。炉２は長径 90cm，短径 40cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さで，火熱を受けて赤変硬化している。掘方は床面から 30cmまで掘り込み，焼土ブロックとロームブロックを混入した第２・３層を埋め戻して構築されている。

炉１土層解説
1　明赤褐色　焼土ブロック多量
2　暗　褐　色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量
3　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉２土層解説
1　明赤褐色　焼土ブロック多量
2　褐　　色　焼土ブロック多量，ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック多量

ピット　18 か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ９～ 34cmで，配置状況から主柱穴と考えられる。南東部はほかの遺構に掘り込まれて不明であるが，配置状況から６本の主柱穴であった可能性がある。その他のピットは深さ 12 ～ 52cmで，位置と深さが不揃いであるため，性格は不明である。



第 15 図　第８号竪穴建物跡実測図

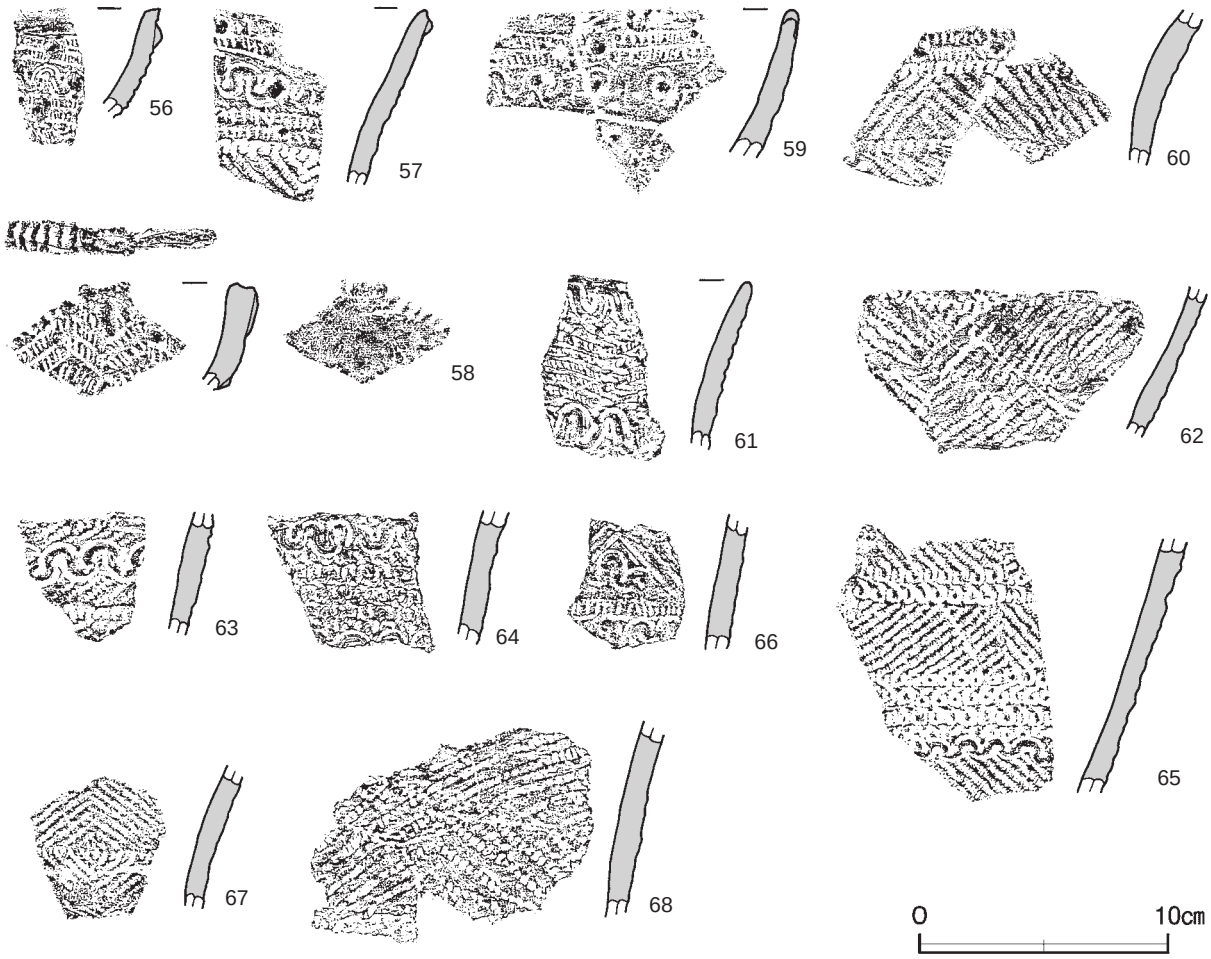
ピット土層解説（各ピット共通）
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　3　褐　　色　ロームブロック多量
2　明　褐　色　ロームブロック多量

覆土　４層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　3　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量　　4　明　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片 146 点（深鉢），剥片 19 点（砂岩９，安山岩４，石灰岩２，チャート２，黒色片岩１，雲母片岩１）が，覆土中から床面にかけて出土している。特に覆土中のものは北東部に集中し，北西部に若干の出土がみられる。61・64・68 は北西部の床面，56 ～ 60・62・63・65 ～ 67 は北東部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第 16 図　第８号竪穴建物跡出土遺物実測図

第８号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
56	縄文土器	深鉢	－	(4.4)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→コンパス文→瘤状貼付文	北東部覆土中	関山Ⅰ式
57	縄文土器	深鉢	－	(7.0)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	口縁部半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→コンパス文→瘤状貼付文　胴部ループ文	北東部覆土中	関山Ⅰ式

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
58	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→コンパス文→瘤状貼付文	北東部覆土中	関山Ⅰ式
59	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・繊維	外橙／内灰褐	普通	半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→コンパス文→瘤状貼付文	北東部覆土中	関山Ⅰ式
60	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	上位半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→瘤状貼付文　下位結束縄文第１種	北東部覆土中	関山Ⅰ式
61	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文→縦長のコンパス文	北西部床面	関山Ⅱ式
62	縄文土器	深鉢	－	(5.9)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	結束縄文第１種	北東部覆土中	関山Ⅱ式
63	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	単節羽状縄文→コンパス文	北東部覆土中	関山Ⅰ式
64	縄文土器	深鉢	－	(5.1)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	前々段合撚縄文→コンパス文	北西部床面	関山Ⅰ式
65	縄文土器	深鉢	－	(10.1)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい赤褐	普通	０段多条による羽状縄文→結束縄文第２種→コンパス文	北東部覆土中	関山Ⅰ式
66	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・繊維	外明赤褐／内黒褐	普通	直前段合撚（正反合）縄文による羽状構成	北東部覆土中	関山式
67	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	結束縄文第１種	北東部覆土中	関山式
68	縄文土器	深鉢	－	(7.8)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	直前段合撚（正反合）縄文による羽状構成	北西部床面	関山式 ＰＬ 17

第９号竪穴建物跡（第 17・18 図　PL ５）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２h6 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

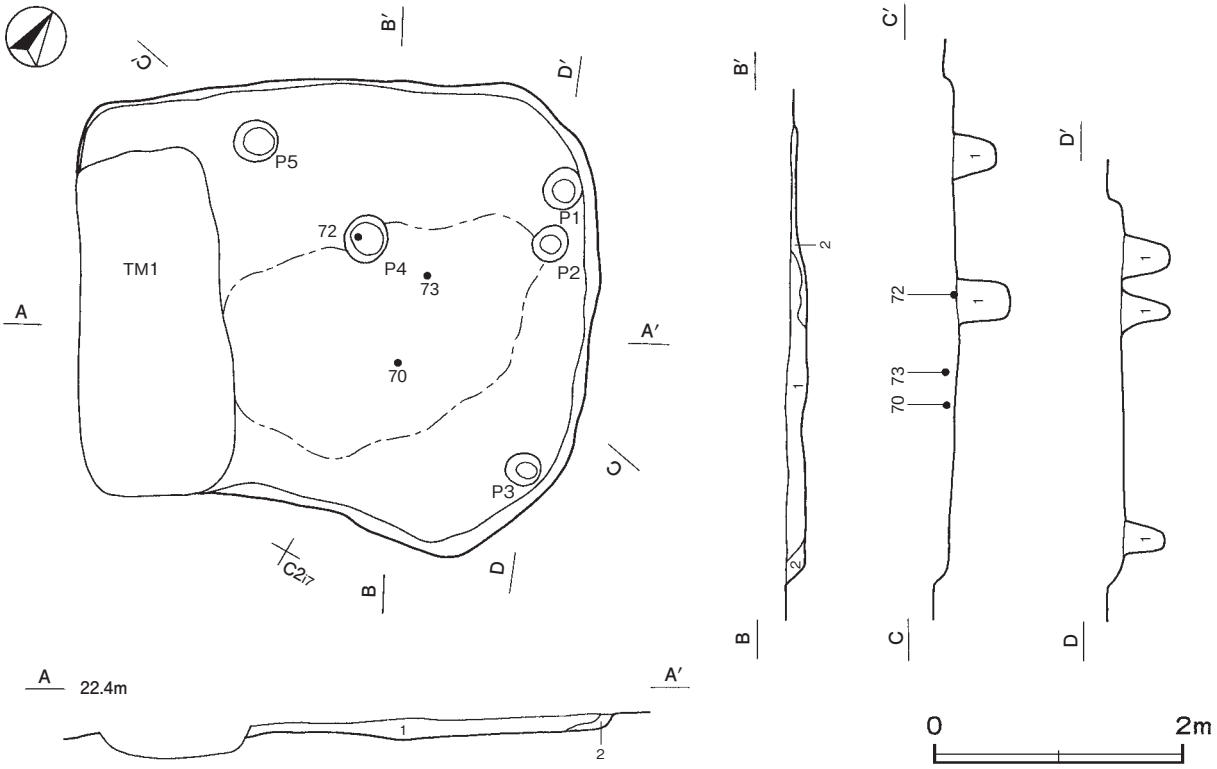
重複関係　第１号方形周溝墓に掘り込まれている。

規模と形状　第１号方形周溝墓の埋葬施設に掘り込まれているが，北西・南東軸 3.72 ｍ，北東・南西軸は 4.04 ｍの長方形と推測できる。北東･南西軸方向はＮ－ 60°－ Ｅである。壁は高さ３～ 12㎝で，外傾している。

床　平坦で，中央部から北東壁寄りにかけて踏み固められている。

ピット　５か所。Ｐ４は深さ 42㎝で，ほぼ中央に位置する配置状況から主柱穴と考えられる。Ｐ１～Ｐ３・Ｐ５は深さ 32 ～ 38㎝で，壁際に配置されている状況から，補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説（各ピット共通）
１　暗　褐　色　ロームブロック多量，炭化粒子微量



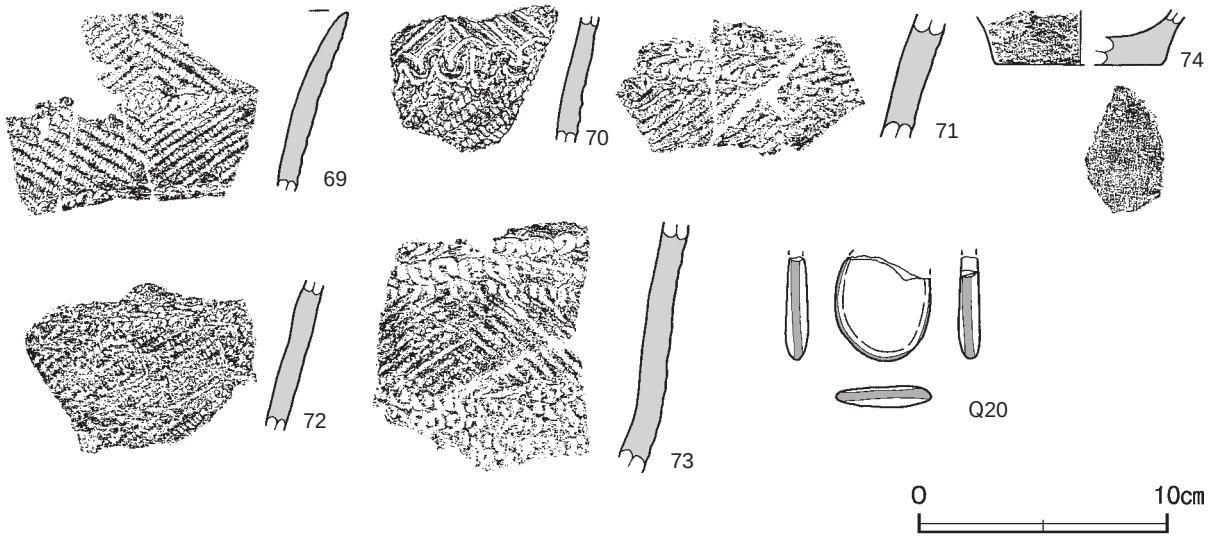
第 17 図　第９号竪穴建物跡実測図

覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量　　2　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 43 点（深鉢），石器１点（磨石），自然礫１点（安山岩）が，覆土中から散在した状態で出土している。70 は南東部，72・73 は中央部の覆土下層，Q20 は南東部の覆土上層，69 は北東部，71・74 は北西部の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第 18 図　第９号竪穴建物跡出土遺物実測図

第９号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 18 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
69	縄文土器	深鉢	－	(7.1)	－	長石･石英･雲母･赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	結束縄文第１種	北東部覆土中	関山Ⅰ式
70	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＬＲ→半截竹管による沈線文→コンパス文	南東部覆土下層	関山Ⅰ式
71	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	結束縄文第２種	北西部覆土中	関山Ⅰ式
72	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	長石・石英・繊維	橙	普通	結束縄文第１種	中央部覆土下層	関山Ⅰ式
73	縄文土器	深鉢	－	(9.8)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	結束縄文第１種→ループ文	中央部覆土下層	関山Ⅰ式
74	縄文土器	深鉢	－	(2.2)	[6.6]	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	外・内面ナデ	北西部覆土中	５％ 関山Ⅰ式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 20	磨石	(4.1)	3.8	0.8	(16.0)	砂岩	一部欠損　側縁部使用痕	南東部覆土上層	－

第 10 号竪穴建物跡（第 19・20 図　PL ５）

位置　調査Ａ区南部のＣ２a8 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　東部が調査区域外に延びているため，南北軸は 6.70 ｍで，東西軸は 2.40 ｍしか確認できなかった。残存部分の形状から方形または長方形と推測できる。南北軸方向はＮ－ 12°－Ｗである。壁は高さ７～ 11cmで，外傾している。

床　平坦で，北西部コーナー部と南壁際を除いて踏み固められている。

ピット　７か所。調査区域外に延びていることから不明な点が多いが，Ｐ１・Ｐ２は深さが42・27㎝で，配置状況から主柱穴と推測できる。Ｐ５は深さ44㎝で南壁際の配置状況と床面が硬化しているところから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。底面には柱のあたりが認められる。Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７は深さ10～40㎝で，配置状況が不揃いなため，性格は不明である。

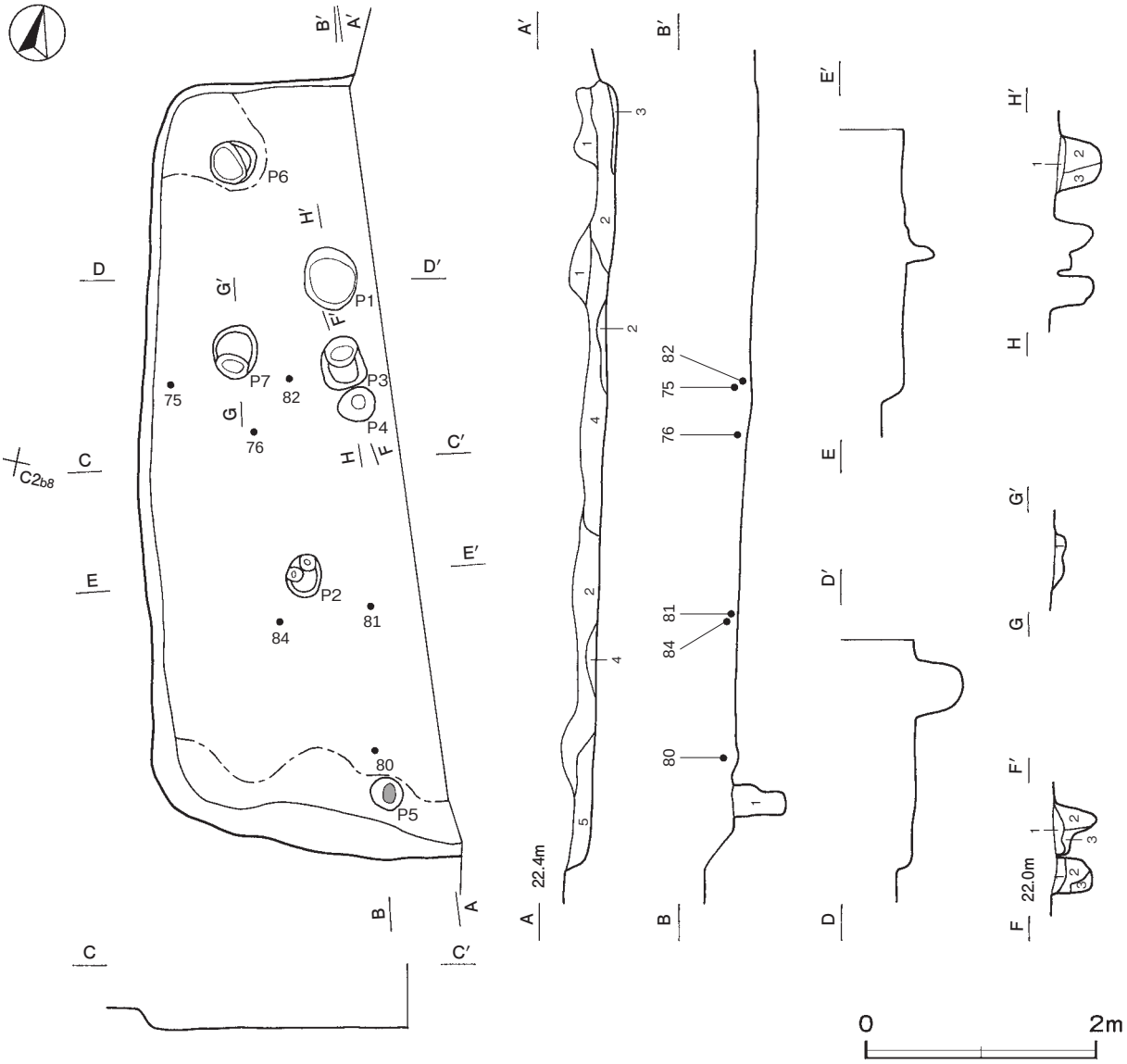
ピット土層解説（Ｐ１・Ｐ３）
1　黒　褐　色　ロームブロック多量，炭化粒子微量
2　黒　　色　ロームブロック少量
3　黄　褐　色　ロームブロック多量

ピット土層解説（Ｐ４）
1　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黄　褐　色　ロームブロック多量

ピット土層解説（Ｐ５・Ｐ７）
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　５層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれ，不規則な堆積状況から埋め戻されている。

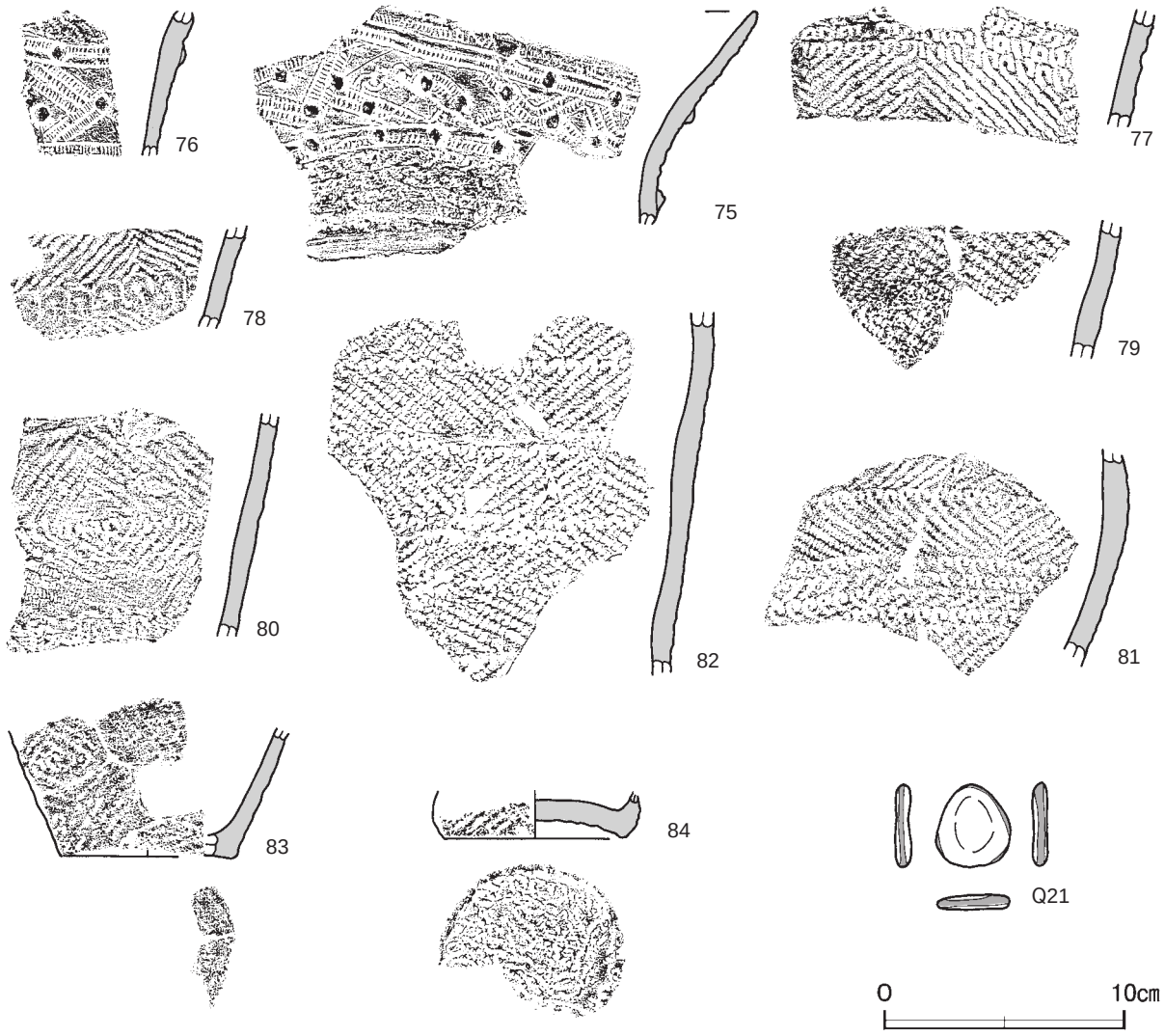
土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量
3　褐　　色　ロームブロック多量
4　明　褐　色　ロームブロック多量
5　褐　　色　ロームブロック少量



第19図　第10号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況　縄文土器片 76 点（深鉢），石器１点（磨石），剥片 10 点（砂岩３，チャート２，礫岩２，雲母片岩１，緑色片岩１，石灰岩１）が，覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。75・76・82 は西部，77 は北部，78・80・81・84 は南部の覆土下層，83 は北部，79・Q 21 は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第 20 図　第 10 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 10 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 20 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
75	縄文土器	深鉢	－	(9.2)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	上位半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→瘤状貼付文　下位ループ文	西部覆土下層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
76	縄文土器	深鉢	－	(6.9)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填→瘤状貼付文	西部覆土下層	関山Ⅰ式
77	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	上位多段ループ文　下位単節羽状縄文	北部覆土下層	関山Ⅰ式
78	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	単節羽状縄文→コンパス文	南部覆土下層	関山Ⅰ式
79	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	単節羽状縄文	南部覆土上層	関山式
80	縄文土器	深鉢	－	(9.3)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	結束羽状縄文第２種	南部覆土下層	関山Ⅰ式
81	縄文土器	深鉢	－	(7.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	上位結束縄文第１種　多段ループ文	南部覆土下層	関山Ⅰ式
82	縄文土器	深鉢	－	(14.8)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	結束縄文第１種	西部覆土下層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
83	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	[7.2]	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	結束縄文第１種	北部覆土上層	5％　関山式
84	縄文土器	深鉢	－	(1.9)	7.3	長石・石英・繊維	外にぶい赤褐／内橙	普通	単節羽状縄文	南部覆土下層	5％　関山式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 21	磨石	3.4	3.0	0.6	8.35	砂岩	側縁部使用痕	南部覆土上層	－

第 12 号竪穴建物跡（第 21・22 図）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２f7 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 16 号竪穴建物跡を掘り込み，第 11 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状　第 11 号竪穴建物に掘り込まれているため，東西軸は 3.10 ｍで，南北軸は 1.10 ｍしか確認できなかった。残存部分の形状から台形と推測でき，東西軸方向はＮ－ 90 °－Ｗである。壁は高さ 17 ～ 38㎝で，ほぼ直立している。

床　平坦である。特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

ピット　３か所。Ｐ１は深さ 20㎝，Ｐ２は深さ 17㎝，Ｐ３は深さ 19㎝である。全体の配置状況が確認できないため，性格は不明である。

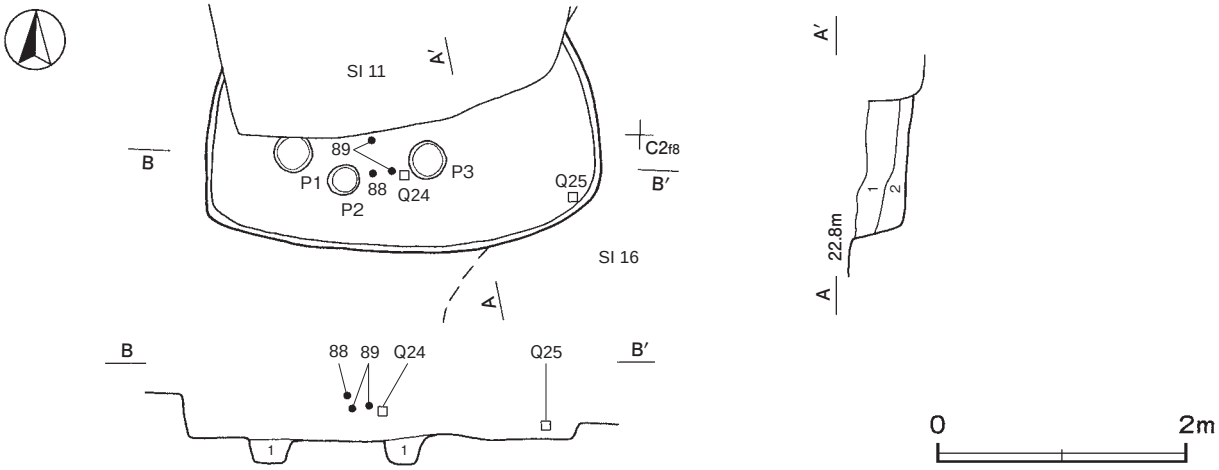
ピット土層解説（各ピット共通）
1　暗　褐　色　ロームブロック多量，炭化粒子微量

覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

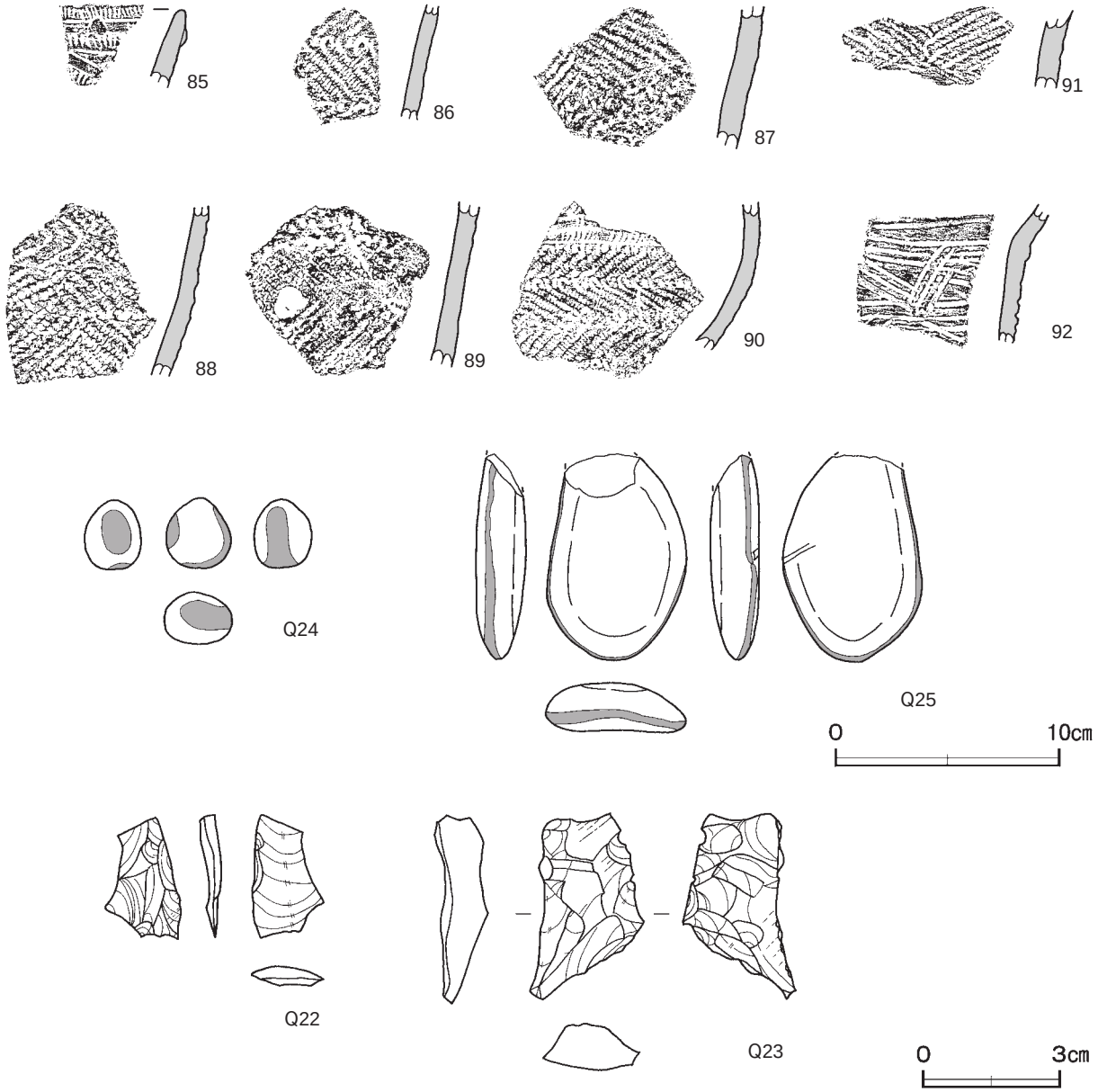
土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量　　2　褐　　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片 81 点（深鉢），石器４点（掻器２，磨石２），剥片４点（砂岩３，安山岩１）が，覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。特に南壁寄りの中央部分に集中している。Q 25 は南東部の覆土下層，85・86・90 は東部，87・91・92 は西部，88・89・Q 24 は南部の覆土上層，Q 22・Q 23 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第 21 図　第 12 号竪穴建物跡実測図



第 22 図　第 12 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 22 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
85	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	東部覆土上層	関山Ⅰ式
86	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・繊維	明褐	普通	結束縄文第１種	東部覆土上層	関山Ⅰ式
87	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい赤褐	普通	結束縄文第１種	西部覆土上層	関山Ⅰ式
88	縄文土器	深鉢	－	(7.4)	－	長石・石英・雲母・繊維	明赤褐	普通	結束縄文第１種	南部覆土上層	関山Ⅰ式
89	縄文土器	深鉢	－	(7.3)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	補修孔　多段ループ文→単節羽状縄文	南部覆土上層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
90	縄文土器	深鉢	－	(6.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	上位梯子状沈線文　下位結束縄文第１種	東部覆土上層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
91	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・繊維	橙	普通	単節羽状縄文	西部覆土上層	前期前半
92	縄文土器	深鉢	－	(5.9)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	半截竹管による沈線文	西部覆土上層	前期前半

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 22	掻器	2.7	1.6	0.4	1.48	黒曜石	刃部片面調整	覆土中	ＰＬ 18
Q 23	掻器	4.1	2.5	1.1	9.66	チャート	刃部片面調整	覆土中	ＰＬ 18
Q 24	磨石	3.0	3.0	2.4	28.8	安山岩	３か所使用痕	南部覆土上層	－
Q 25	磨石	(9.1)	6.2	2.2	(167.3)	砂岩	側縁部両面使用痕	南東部覆土下層	－

第 14 号竪穴建物跡（第 23 図　PL ５）

位置　調査Ａ区北部のＣ２a7 区，標高 18 ～ 19 mほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状　西部が調査区域外に延びているため，南北軸は 4.10 mで，東西軸は 3.06 mしか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測できる。南北軸方向はＮ－０°である。壁は高さ 10 ～ 26cmで，外傾している。

床　平坦である。特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

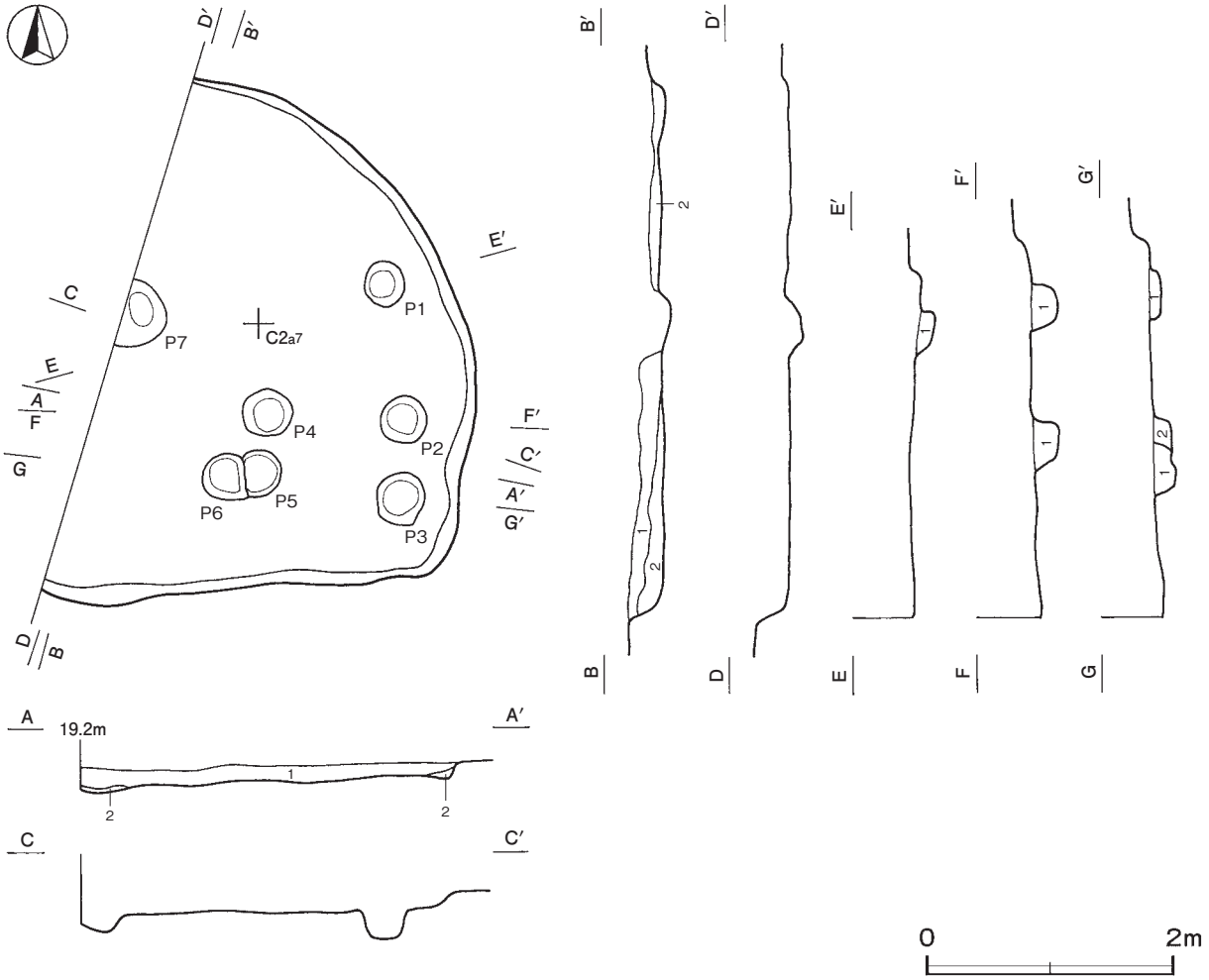
ピット　７か所。Ｐ１～Ｐ７は深さ 10 ～ 22cmである。配置状況の全容がつかめないため，性格は不明である。

ピット土層解説（各ピット共通）
１　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　２　褐　　色　ロームブロック多量

覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
１　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　２　明　褐　色　ロームブロック多量

所見　時期は，出土遺物がないが，遺構の形状や覆土の状況から縄文時代と考えられる。



第 23 図　第 14 号竪穴建物跡実測図

第 15 号竪穴建物跡（第 24 図　PL ６）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２h5 区，標高 21 ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　第１号方形周溝墓に掘り込まれている。

規模と形状　第１号方形周溝墓に掘り込まれているため，東西軸は 3.68 ｍで，南北軸は 2.40 ｍしか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測でき，東西軸方向はＮ－ 55 °－Ｅである。壁は高さ６～ 18cmで，ほぼ直立している。

床　平坦で，特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

炉　南壁寄りに付設されている。長径 90cm，短径 74cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面とほぼ同じ高さで，火熱を受けて赤変硬化している。床面から深さ 16cmほど掘り込み，焼土ブロックやロームブロックを多量に含んだ第３～８層を埋め戻して構築されている。

炉土層解説

１	褐　　色	ローム粒子中量	
２	暗赤褐色	焼土ブロック多量，ロームブロック少量	
３	明赤褐色	焼土ブロック多量，炭化粒子微量	
４	暗　褐　色	ローム粒子少量	
５	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量，ローム粒子微量	
６	褐　　色	ロームブロック中量	
７	明　褐　色	焼土ブロック少量，炭化粒子微量	
８	黄　褐　色	ロームブロック多量，焼土粒子微量	

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ 13 ～ 25cmで，壁際の配置状況から主柱穴，または補助柱穴と推測できる。Ｐ４は深さ 22cmで，性格は不明である。

ピット土層解説（各ピット共通）

１　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれ，不規則な堆積状況から，埋め戻されている。

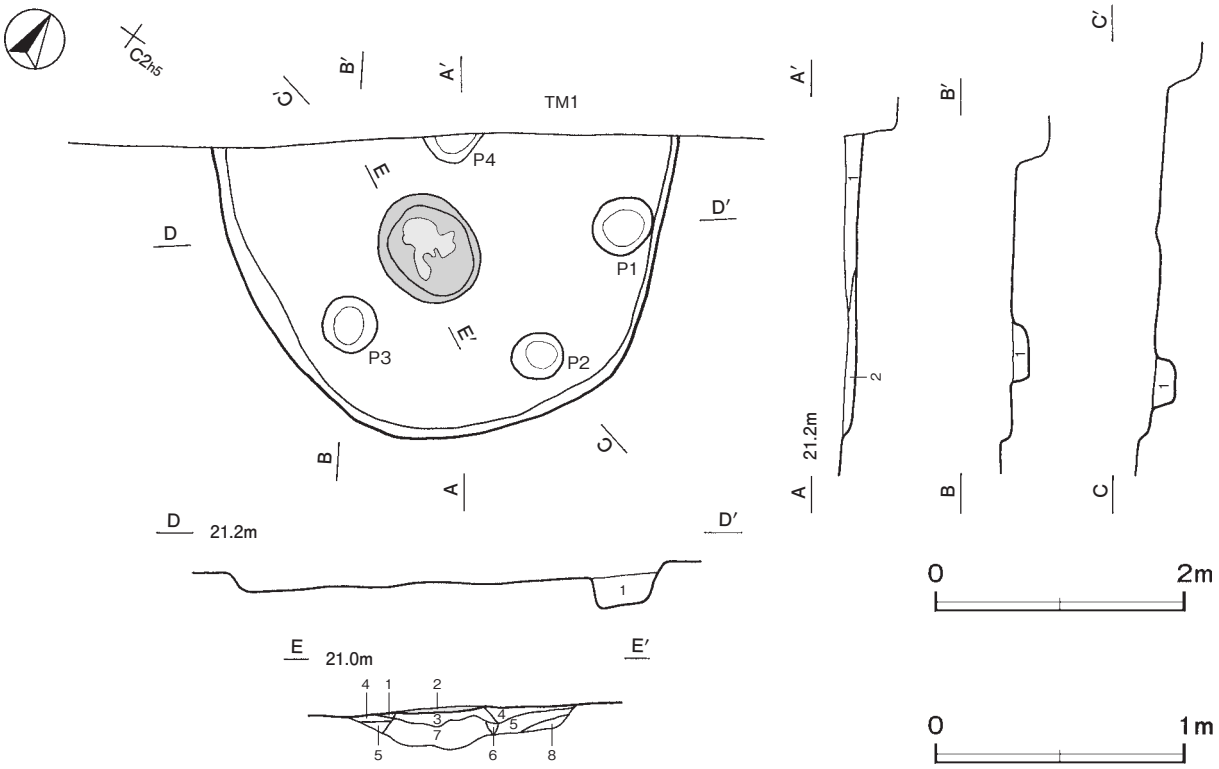
土層解説

１　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

２　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　剥片１点（凝灰岩）が覆土中から出土している。

所見　出土土器がないため，詳細な時期は不明であるが，遺構の形状や覆土の状況から縄文時代と考えられる。



第 24 図　第 15 号竪穴建物跡実測図

第 16 号竪穴建物跡（第 25・26 図　PL 6）

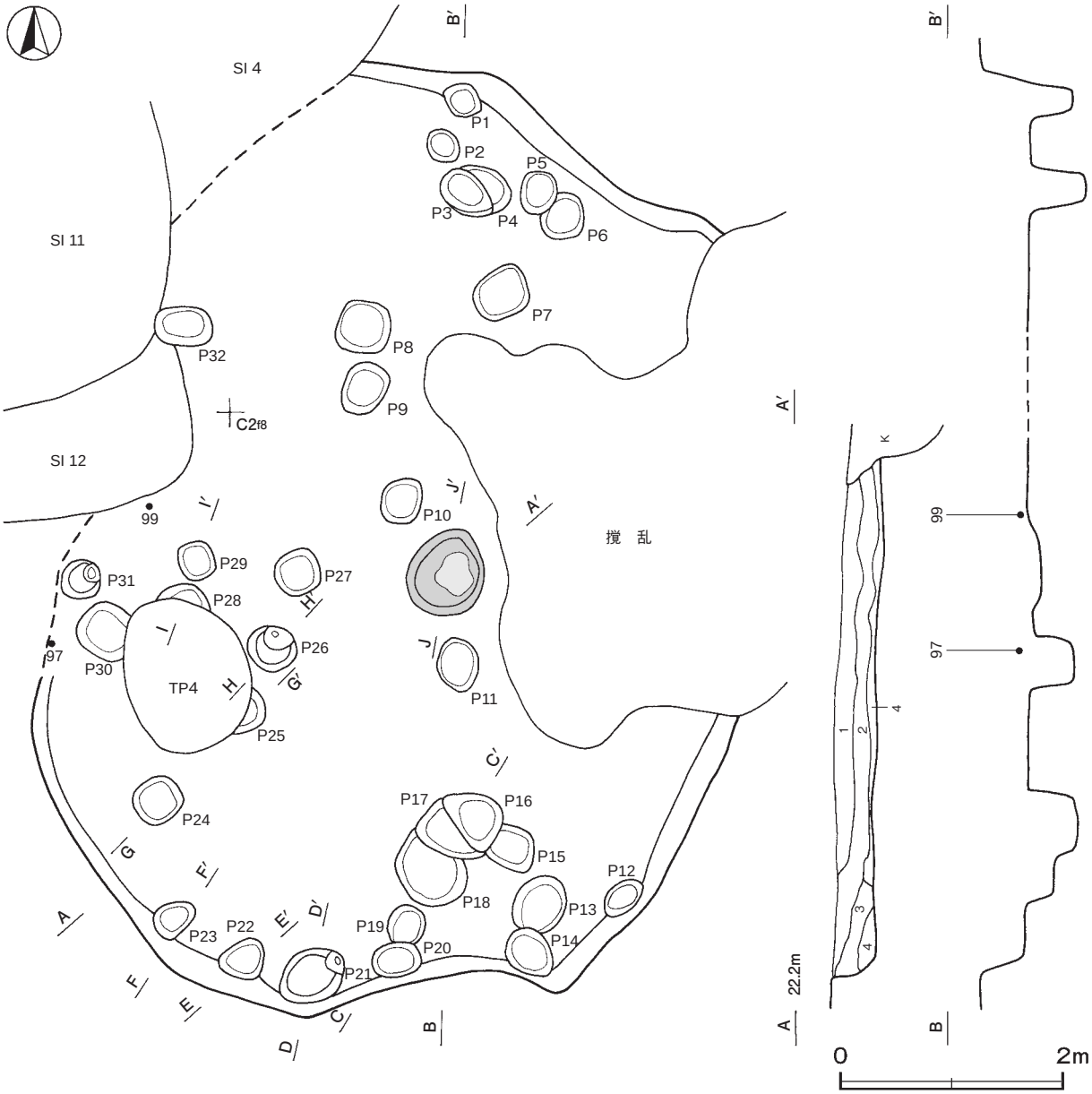
位置　調査 A 区中央部のＣ２f8 区，標高 22 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第４・11・12 号竪穴建物，第４号陥し穴，第９号土坑に掘り込まれている。さらに東部は，風倒木痕で壊されている。

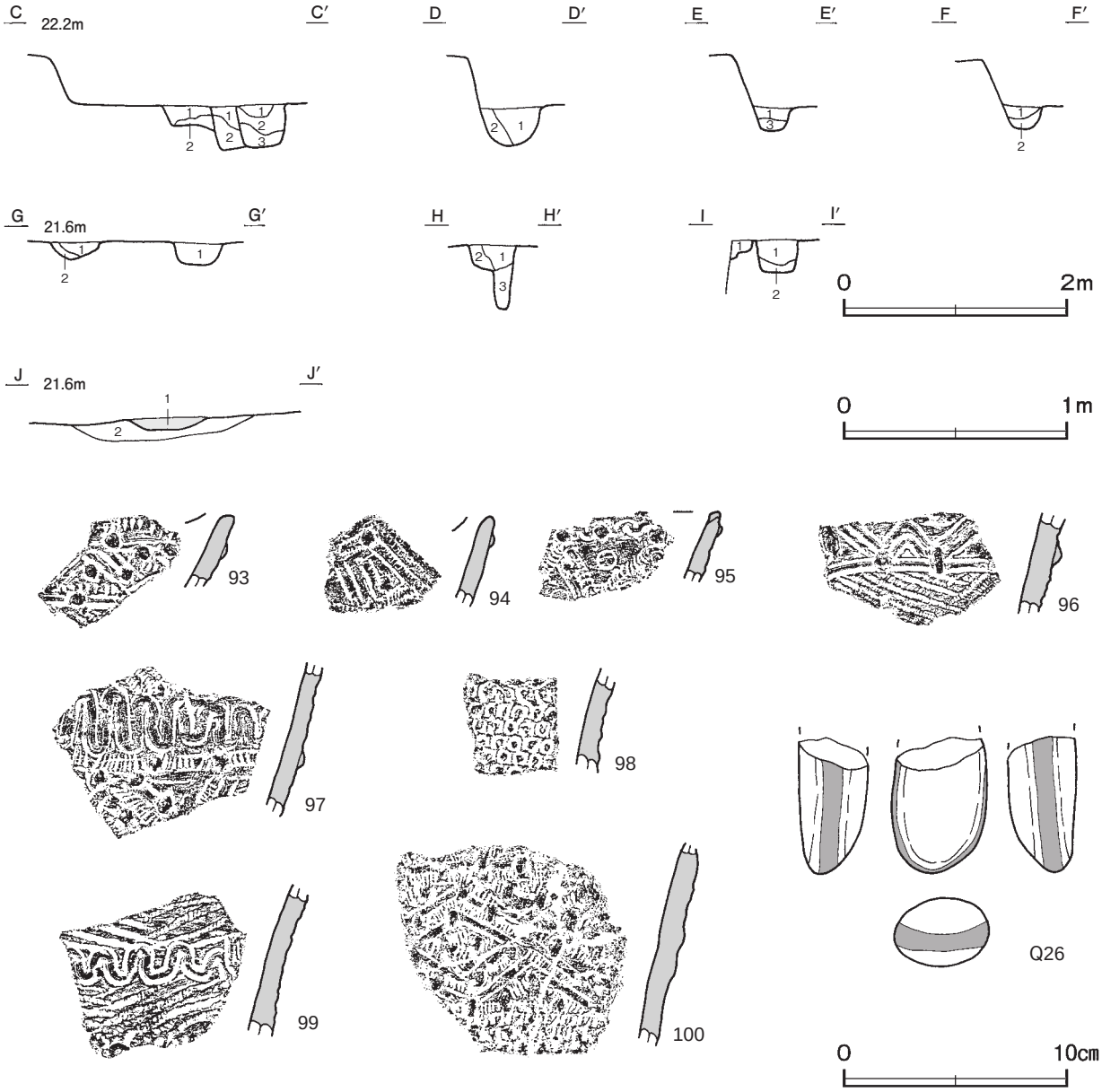
規模と形状　ほかの遺構に掘り込まれ，東部を風倒木痕で壊されているため，北東･南西軸は 8.20 mで，北西･南東軸は 6.08 mしか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測できる。北西・南東軸方向はＮ－23゜－Ｅである。壁は高さ 22 ～ 30cmで，ほぼ直立している。

床　平坦で，特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

炉　残存部分からほぼ中央部に付設されていると推測できる。長径 80cm，短径 70cmの楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さで，火熱を受け赤変硬化している。床面から 10cmほど掘り込み，焼土ブロックとロームブロックを含んだ第２層を埋め戻して構築されている。



第 25 図　第 16 号竪穴建物跡実測図



第 26 図　第 16 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

炉土層解説

1　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量

ピット　32 か所。Ｐ１～Ｐ 32 は深さ９～ 61cmである。主柱穴は配置状況や深さが不揃いであることから不明である。補助柱穴は壁際に位置するＰ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ 12・P14・Ｐ 20 ～Ｐ 23 が該当し，そのほかのピットは性格不明である。

ピット土層解説（P16・P18・P22）

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量
3　明　褐　色　ロームブロック多量

ピット土層解説（そのほか）

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　明　褐　色　ロームブロック多量
3　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　４層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片 162 点（深鉢），石器１点（磨石），剥片 44 点（砂岩 20，安山岩 10，チャート９，石英岩３，雲母片岩２）が，北部と東部の覆土中層から下層にかけて出土している。特に北部に集中している。97・99 は西部，100 は北部の覆土下層，93 ～ 96・98・Q 26 は北部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。

第 16 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 26 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
93	縄文土器	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	北部覆土中層	関山Ⅰ式
94	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	波状口縁　梯子状沈線文→瘤状貼付文	北部覆土中層	関山Ⅰ式
95	縄文土器	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	円形竹管による刺突文　半截竹管による爪形文→コンパス文→瘤状貼付文	北部覆土中層	関山Ⅰ式
96	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	0段多条縄文→半截竹管による平行沈線文→縦長のコンパス文→瘤状貼付文	北部覆土中層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
97	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	梯子状沈線文→コンパス文→瘤状貼付文	西部覆土下層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
98	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	多段ループ文	北部覆土中層	関山式
99	縄文土器	深鉢	－	(6.6)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文→縦長のコンパス文	西部覆土下層	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
100	縄文土器	深鉢	－	(8.7)	－	長石・石英・繊維	橙	普通	梯子状沈線文→多段ループ文→瘤状貼付文	北部覆土下層	関山Ⅰ式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 26	磨石	(6.1)	(4.3)	(3.0)	(105.1)	砂岩	側縁部両面使用痕	北部覆土中層	－

第 17 号竪穴建物跡（第 27 図　PL ６）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２i8 区，標高 23 ｍほどの平坦部に位置している。

重複関係　第６号竪穴建物，第１号方形周溝墓に掘り込まれている。

規模と形状　ほかの遺構に掘り込まれているため，北西・南東軸は 4.16 ｍで，北東・南西軸は 2.40 ｍしか確認できなかった。残存部分の形状から楕円形と推測できる。北西・南東軸方向はＮ－ 43°－Ｗである。壁は高さ８～ 20㎝で，ほぼ直立している。

床　平坦である。特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

炉　南東コーナー部に付設されている。長径 62㎝，短径 48㎝の楕円形の地床炉である。炉床は床面と同じ高さで，火熱を受け赤変硬化している。掘方は床面から 12㎝まで掘り込み，ロームブロックを含んだ２層を埋め戻して構築されている。

炉土層解説
１　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子微量
２　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　７か所。Ｐ１～Ｐ７は深さ 12 ～ 37㎝で，ほかの遺構に掘り込まれているため，不明な点もあるが，壁際の配置状況から主柱穴に対する補助柱穴と推測できる。

ピット土層解説（各ピット共通）
１　暗　褐　色　ロームブロック中量

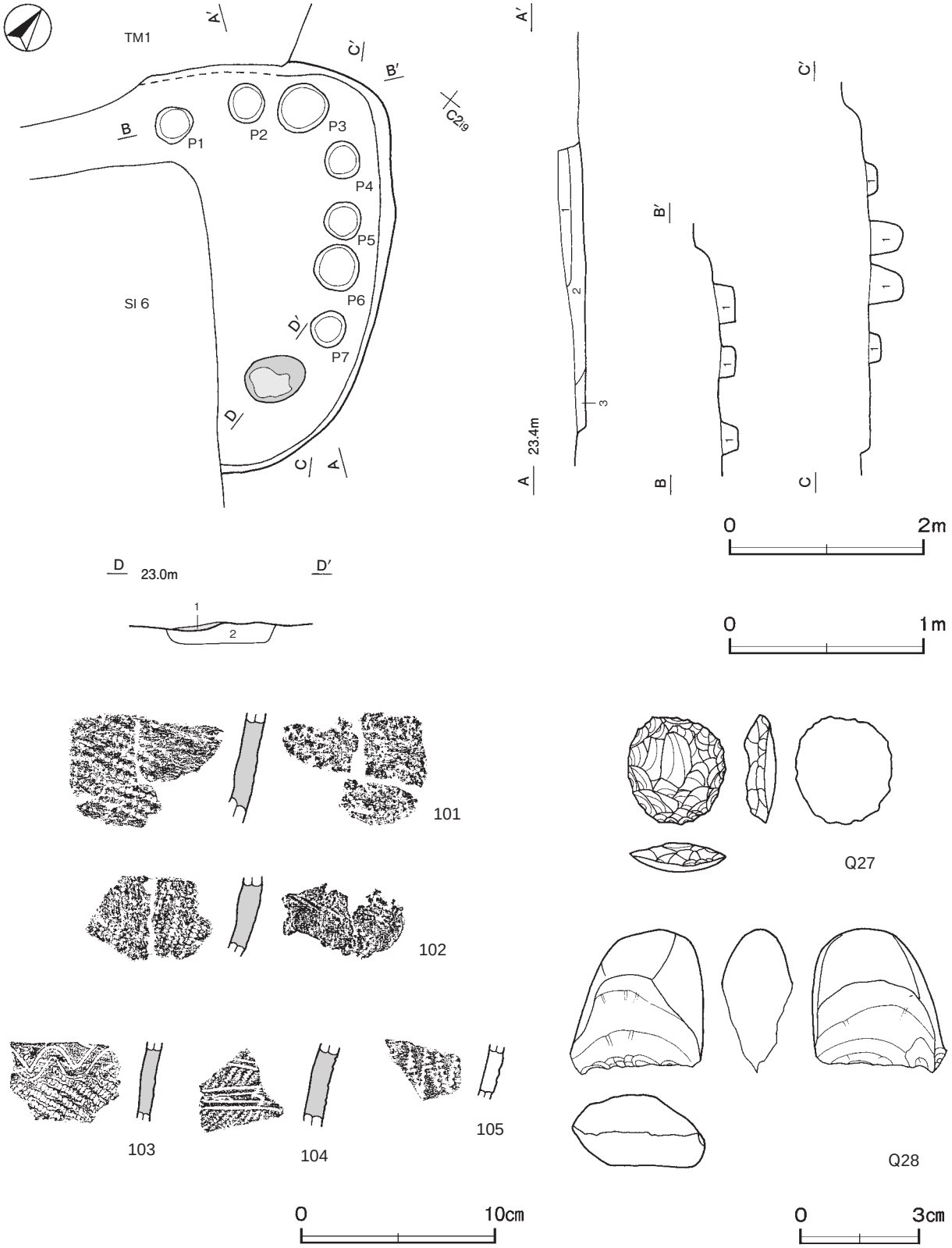
覆土　３層に分層できる。第１層は含有物がきわめて少ない自然堆積で，２層以下はロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
１　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
２　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
３　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 21 点（深鉢），石器２点（円形掻器・掻器），剥片 11 点（安山岩３，頁岩２，砂岩２，チャート２，石英岩１，石灰岩１）が東部と西部に散在して覆土中から出土している。101 は東部，102

～105・Q 27 は西部，Q 28 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見　時期は，出土土器から前期後半（浮島Ⅲ式期）と考えられる。



第 27 図　第 17 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 17 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 27 図）

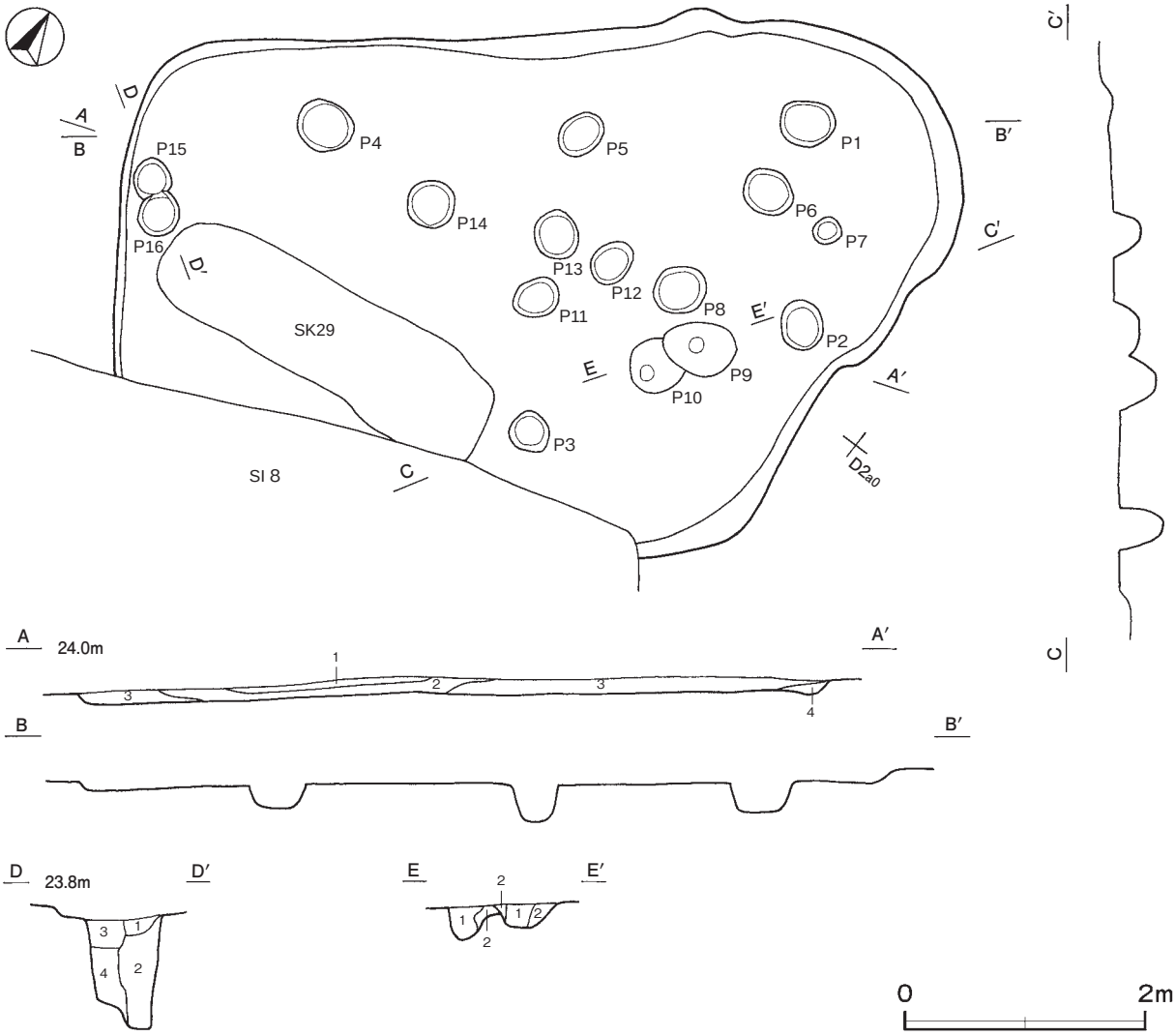
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
101	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	外面単節縄文ＲＬ　内面条痕文	東部覆土中	早期末葉
102	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・繊維	明褐	普通	外面単節縄文ＲＬ　内面条痕文	西部覆土中	早期末葉
103	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	単節縄文ＲＬ→コンパス文	西部覆土中	関山Ⅰ式
104	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	単節縄文ＬＲ→半截竹管による沈線文	西部覆土中	関山Ⅱ式
105	縄文土器	深鉢	－	(2.9)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	外面貝殻復縁文　内面磨き	西部覆土中	浮島Ⅲ式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 27	円形掻器	2.7	2.5	0.7	5.65	チャート	側縁部使用痕	西部覆土中	ＰＬ 18
Q 28	掻器	3.7	3.4	1.8	24.0	泥岩	先端部押圧剥離刃部調整	覆土中	ＰＬ 18

第 18 号竪穴建物跡（第 28・29 図　PL 7）

位置　調査Ａ区南部のＤ２a8 区，標高 23 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第８号竪穴建物，第 29 号土坑に掘り込まれている。



第 28 図　第 18 号竪穴建物跡実測図

規模と形状　ほかの遺構に掘り込まれているため，北東・南西軸は7.10ｍで，北西・南東軸は4.20ｍしか確認できなかった。残存部分の形状から不整長方形と推測できる。北東・南西軸方向はＮ－52°－Ｅである。壁は高さ５～８㎝で，緩やかに立ち上っている。

床　平坦で，特に顕著な踏み固めは確認できなかった。

ピット　16か所。ほかの遺構に掘り込まれているため，不明な点もあるが，Ｐ１～Ｐ５は深さ23～36㎝で，配置状況から主柱穴と推測できる。そのほかのピットは深さ21～88㎝で，配置状況や深さがまばらで性格は不明である。

ピット土層解説（Ｐ９・P10）
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黄　褐　色　ロームブロック多量

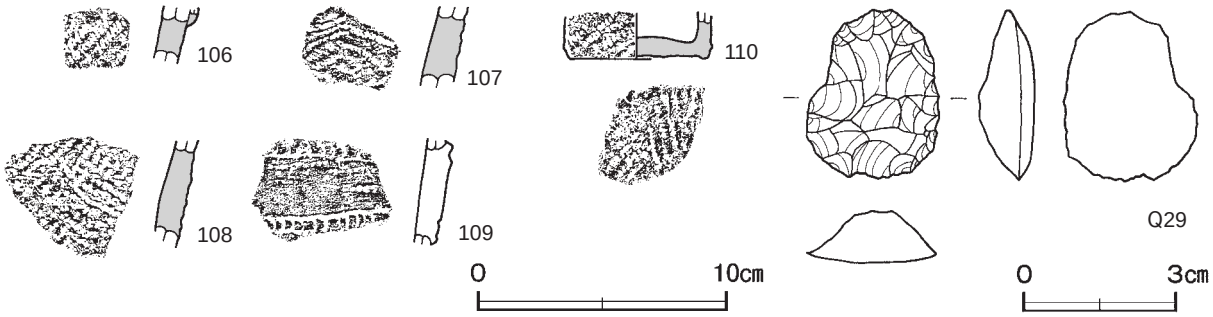
ピット土層解説（Ｐ15・Ｐ16）
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量（粘性弱・締まり普通）
3　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック多量（粘性・締まり強）

覆土　４層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片20点（深鉢），石器１点（掻器），剥片９点（砂岩４，頁岩３，安山岩１，石英岩１）が，覆土中から散在した状態で出土している。

所見　時期は，前期後半（浮島式期）の土器の混入がみられるが遺構の新旧関係や，出土土器の状況から前期前半（関山Ⅰ式期）と考えられる。



第29図　第18号竪穴建物跡出土遺物実測図

第18号竪穴建物跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
106	縄文土器	深鉢	－	(2.2)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	単節縄文ＬＲ→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式
107	縄文土器	深鉢	－	(3.2)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	０段多条縄文による羽状構成	覆土中	前期前半
108	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	単節羽状縄文	覆土中	前期前半
109	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	半截竹管による爪形文	覆土中	浮島式
110	縄文土器	深鉢	－	(1.9)	[5.4]	長石・石英・繊維	明褐	普通	下端・底部外面縄文ＲＬ　内面ナデ	覆土中	５％ 関山Ⅰ式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ29	掻器	3.4	2.6	1.1	10.1	チャート	側縁部刃部調整	覆土中	ＰＬ18

表２　縄文時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	(cm)			主柱穴	出入口	補助柱穴	ピット	炉				
1	D2e0	N－22°－W	長方形	6.00 × 5.30	10～23	平坦	－	－	－	－	9	2	人為	縄文土器，石器	関山Ⅰ式	本跡→SK13・14→SI 3
2	D2c9	－	円形	5.40 × 5.22	6～28	平坦	－	5	－	－	1	1	人為	縄文土器，石器，剥片，粘土塊	関山Ⅰ式	SI 8, SK19→本跡
4	C2d7	N－45°－W	[楕円形]	8.72 ×(6.68)	18～22	平坦	－	－	－	－	38	－	人為	縄文土器，石器，剥片，火熱礫	関山Ⅰ式	本跡→SI 5・7・11・13・16
5	C2d8	N－8°－W	[方形／長方形]	5.25 ×(3.70)	15～20	平坦	－	1	－	－	3	－	自然	縄文土器, 石器, 剥片	黒浜式	SI 4→本跡
7	C2d6	N－51°－E	長方形	5.38 × 4.16	18～22	平坦	－	6	1	2	－	1	人為	縄文土器, 石器, 剥片	関山Ⅰ式	SI 4→本跡→SI 11, SK15, SD 4
8	D2b9	N－15°－W	[長方形]	(7.10)× 6.60	8～10	平坦	－	4	－	－	14	2	人為	縄文土器，剥片	関山Ⅰ式	SI 18, SK29 →本跡→SI 2,TP2, SK5・19
9	C2h6	N－60°－E	[長方形]	4.04 ×(3.72)	3～12	平坦	－	1	－	4	－	－	人為	縄文土器，石器，自然礫	関山Ⅰ式	本跡→TM 1
10	C2a8	N－12°－W	[方形／長方形]	6.70 ×(2.40)	7～11	平坦	－	2	1	－	4	－	人為	縄文土器, 石器, 剥片	関山Ⅰ式	－
12	C2f7	N－90°－W	[台形]	3.10 ×(1.10)	17～38	平坦	－	－	－	－	3	－	人為	縄文土器, 石器, 剥片	関山Ⅰ式	SI 16→本跡→SI 11
14	C2a7	N－0°	[楕円形]	4.10 ×(3.06)	10～26	平坦	－	－	－	－	7	－	人為	－	縄文	－
15	C2h5	N－55°－E	[楕円形]	3.68 ×(2.40)	6～18	平坦	－	3	－	－	1	1	人為	剥片	縄文	本跡→TM1
16	C2f8	N－23°－E	[楕円形]	8.20 ×(6.08)	22～30	平坦	－	－	－	10	22	1	人為	縄文土器, 石器, 剥片	関山Ⅰ式	本跡→SI 4・11・12, TP 4, SK 9
17	C2i8	N－43°－W	[楕円形]	4.16 ×(2.40)	8～20	平坦	－	－	－	7	－	1	自然／人為	縄文土器, 石器, 剥片	浮島Ⅲ式	本跡→SI 6, TM1
18	D2a8	N－52°－E	[不整長方形]	7.10 ×(4.20)	5～8	平坦	－	5	－	－	11	－	人為	縄文土器, 石器, 剥片	関山Ⅰ式	本跡→SI 8, SK 29

(2)　陥し穴

陥し穴４基は，調査Ａ区の中央部から南部にかけて点在している。

第１号陥し穴（第 30・31 図　PL12）

位置　調査Ａ区南部のＤ３h2 区，標高 22 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径 3.25 m，短径 2.00 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 48°－Ｗである。深さは 90cmで，底面は長径 1.80m，短径 0.30 mと幅狭で，平坦である。壁は外傾している。

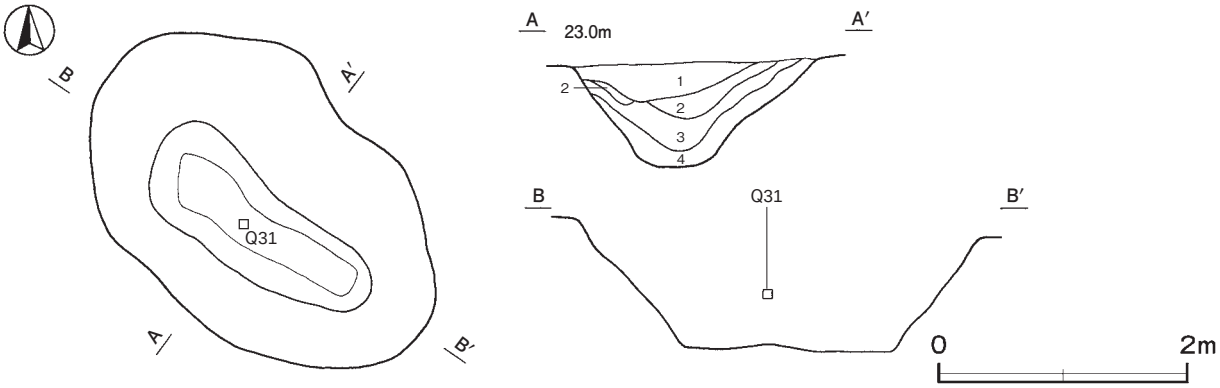
覆土　４層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

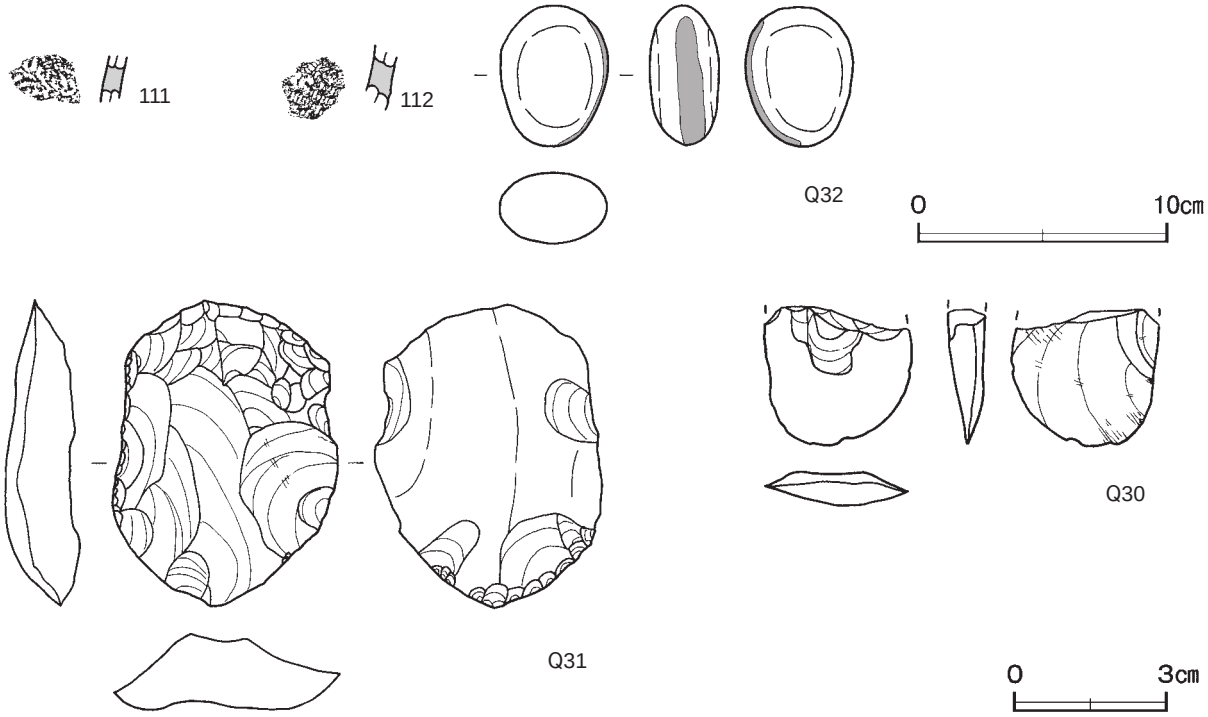
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック多量
4　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 14 点（深鉢），石器３点（掻器２，磨石１），剥片５点（砂岩３，安山岩１，ホルンフェルス１）が出土している。Ｑ 31 は中央部の覆土第３層，111・112・Ｑ 30・Ｑ 32 は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山式期）と考えられる。



第 30 図　第１号陥し穴実測図



第31図　第１号陥し穴出土遺物実測図

第１号陥し穴出土遺物観察表（第31図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
111	縄文土器	深鉢	－	(1.8)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	結束縄文第１種	覆土中	関山式
112	縄文土器	深鉢	－	(2.7)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	結束縄文第１種	覆土中	関山式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 30	掻器	(2.7)	2.9	0.8	(5.65)	ホルンフェルス	側面刃部調整	覆土中	－
Q 31	掻器	6.0	4.5	1.5	42.8	チャート	側面刃部調整	中央部覆土第３層	ＰＬ 18
Q 32	磨石	5.6	4.4	2.8	99.4	チャート	側縁部使用痕	覆土中	－

第２号陥し穴（第32・33図　PL12）

位置　調査Ａ区南部のＤ２c8区，標高21ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第８号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径2.57ｍ，短径2.27ｍの楕円形で，長径方向はＮ－60°－Ｗである。深さは288㎝で，底面は長径0.91ｍ，短径0.47ｍで，平坦である。壁はほぼ直立している。また，底面から高さ70㎝ほどの位置に緩やかな傾斜面がある。

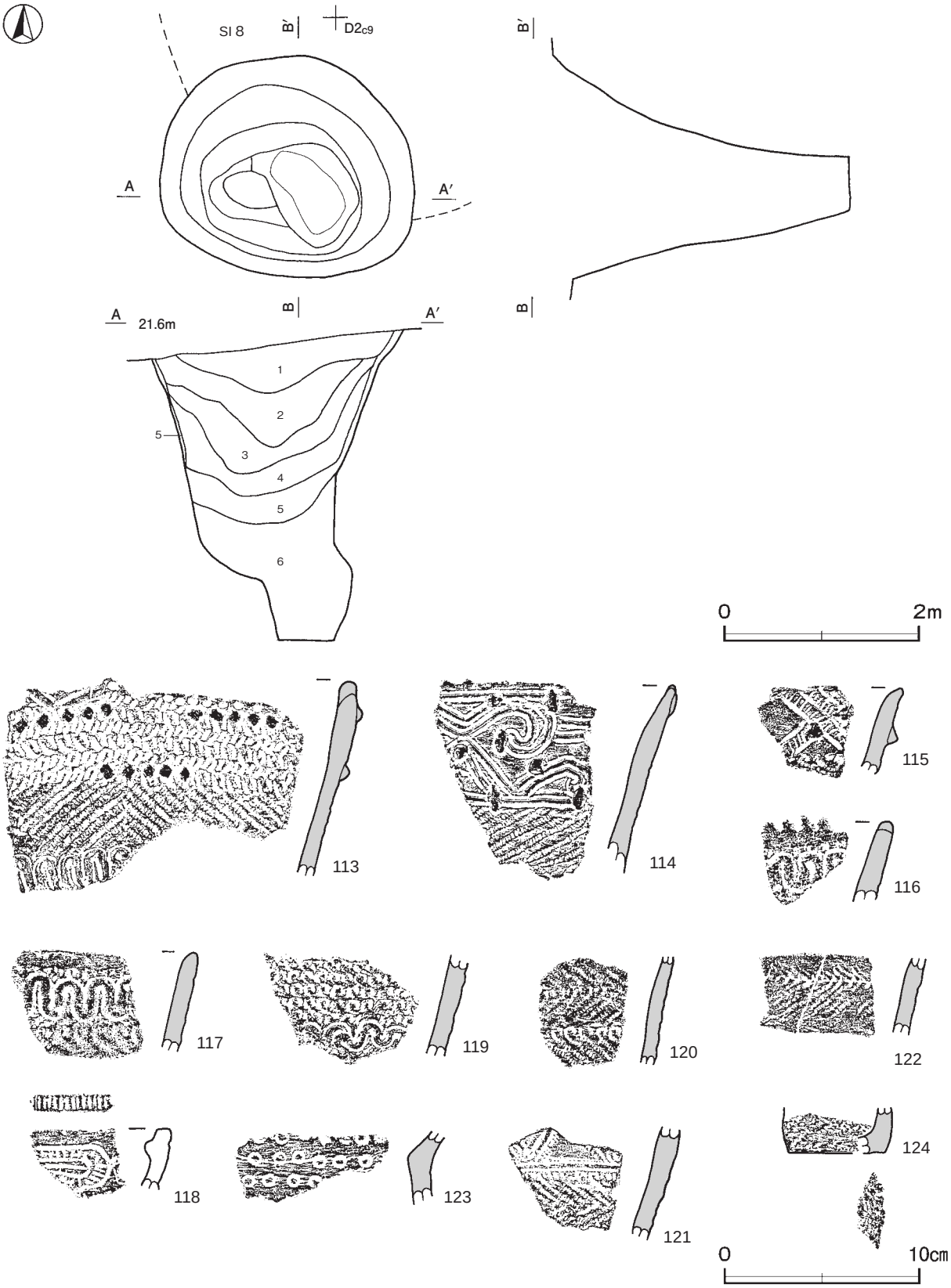
覆土　６層に分層できる。第１層は周囲からの流れ込みの状況から，自然堆積で，第２～６層はロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

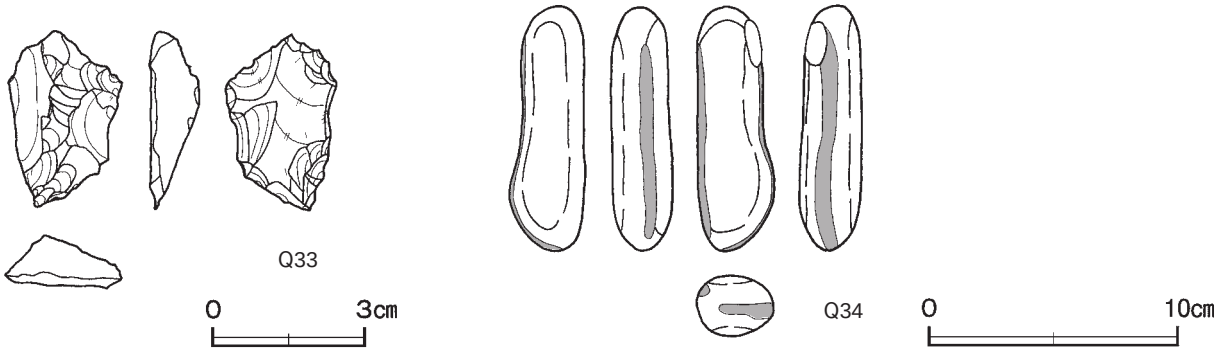
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量，白色粘土ブロック少量
5　黄　褐　色　ロームブロック多量
6　暗　褐　色　ロームブロック多量，白色粘土ブロック中量

遺物出土状況　縄文土器片 253 点（深鉢），石器 4 点（掻器 1，磨石 3），剥片 30 点（砂岩 15，礫岩 10，チャート 3，雲母片岩 1，石英岩 1）が，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から前期前半（関山式期）と考えられる。



第 32 図　第 2 号陥し穴・出土遺物実測図



第 33 図　第２号陥し穴出土遺物実測図

第２号陥し穴出土遺物観察表（第 32・33 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
113	縄文土器	深鉢	－	(9.9)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	口縁部山形の突起　単節羽状縄文→多段ループ文・コンパス文→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
114	縄文土器	深鉢	－	(9.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	口縁部山形の突起　半截竹管による沈線文・単節縄文ＬＲ→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
115	縄文土器	深鉢	－	(4.4)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式
116	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	口唇部山形の刻み目文　口縁部単節縄文→コンパス文	覆土中	関山Ⅰ式 ＰＬ 17
117	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	単節縄文ＬＲ→コンパス文	覆土中	関山Ⅰ式
118	縄文土器	深鉢	－	(3.1)	－	長石・石英	灰褐	普通	口唇部刻み目　梯子状沈線文	覆土中	関山Ⅰ式
119	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	多段ループ文→コンパス文	覆土中	関山Ⅰ式
120	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	長石・石英・ 赤色粒子・繊維	明赤褐	普通	結束縄文第１種	覆土中	関山Ⅰ式
121	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	長石・石英・繊維	褐	普通	単節羽状縄文→梯子状沈線文	覆土中	関山Ⅰ式
122	縄文土器	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文	覆土中	前期前半
123	縄文土器	深鉢	－	(3.7)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	竹管による連続円形刺突文	覆土中	花積下層
124	縄文土器	深鉢	－	(2.3)	[5.0]	長石・石英・繊維	橙	普通	胴部下端単節縄文　内面ナデ	覆土中	５％　関山式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 33	掻器	3.5	2.3	1.0	6.4	瑪瑙	側面片面	覆土中	ＰＬ 18
Q 34	磨石	9.7	3.1	2.9	(109.6)	泥岩	側縁部使用痕	覆土中	－

第３号陥し穴（第 34 図　PL13）

位置　調査Ａ区南部のＤ２b7 区，標高 21 ｍほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径 1.62 ｍ，短径 1.48 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 81°－Ｅである。深さは 186㎝，底面は径 0.8 ｍで，平坦である。壁はほぼ直立している。

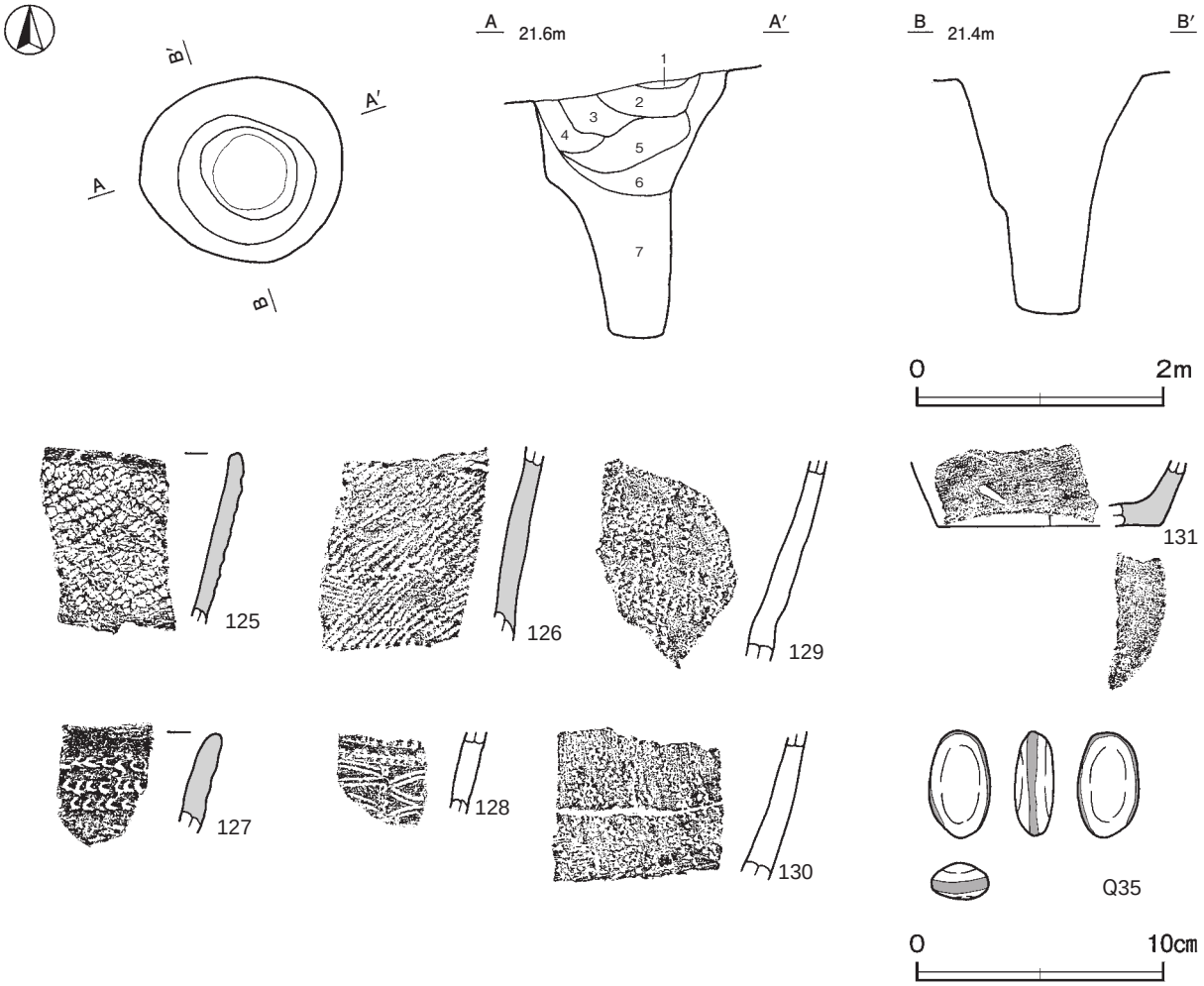
覆土　７層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　褐　　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　黒　褐　色　ロームブロック多量
5　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　褐　　色　ロームブロック多量
7　明　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片 149 点（深鉢），石器１点（磨石），剥片 53 点（砂岩 28，礫岩 12，チャート６，雲母片岩３，石英岩２，玄武岩１，泥岩１）が，覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から前期後半（浮島式期）と考えられる。



第 34 図　第３号陥し穴・出土遺物実測図

第３号陥し穴出土遺物観察表（第 34 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
125	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石･石英･繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文	覆土中	前期 ＰＬ 17
126	縄文土器	深鉢	－	(7.9)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	結束縄文第１種	覆土中	関山Ｉ式
127	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石･石英･繊維	橙	普通	半截竹管による連続刺突文（爪形文）	覆土中	浮島Ｉａ式
128	縄文土器	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英	橙	普通	棒状工具による連続刺突文・竹管による連続刺突文・半截竹管による沈線文	覆土中	浮島Ｉａ式
129	縄文土器	深鉢	－	(8.1)	－	長石・石英	橙	普通	貝殻腹縁による波状貝殻文	覆土中	浮島Ⅲ式
130	縄文土器	深鉢	－	(5.9)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	貝殻腹縁文	覆土中	浮島式
131	縄文土器	深鉢	－	(2.6)	[9.0]	長石･石英･繊維	にぶい褐	普通	下端・外面削り後磨き　内面ナデ	覆土中	５％　前期

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Ｑ 35	磨石	4.2	2.5	1.5	20.6	チャート	側縁部使用痕	覆土中	－

第４号陥し穴（第 35 図　PL13）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２f7 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 16 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 1.40 ｍ，短径 1.08 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 24 °－Ｗである。深さは 90㎝で，底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

ピット　底面のほぼ中央部に掘り込まれている。径 32cmの円形で，底面からの深さは 28cmである。逆茂木のピットと考えられる。

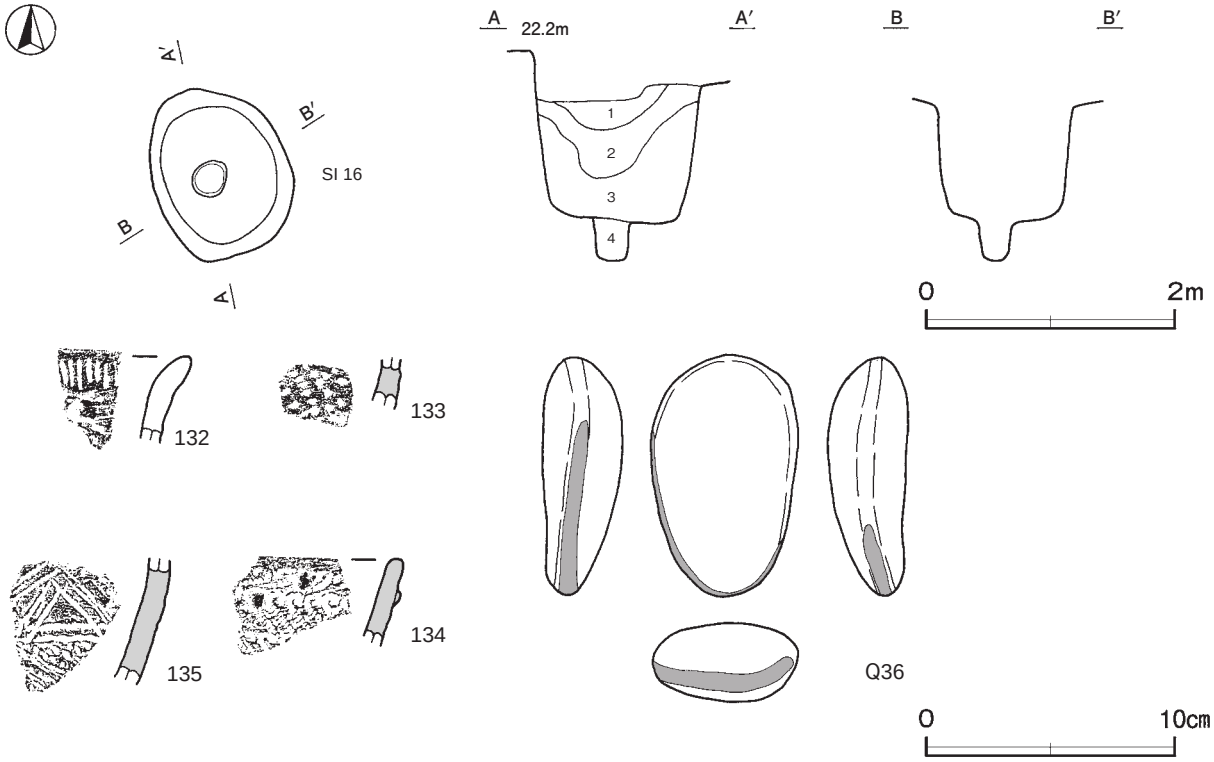
覆土　４層に分層できる。第２～４層はロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第１層は含有物が微量で，周囲からの流れ込んだ状況から自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック多量
4　黒　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　縄文土器片 32 点（深鉢），石器１点（磨石），剥片 15 点（砂岩４，安山岩４，玄武岩４，チャート３）が，覆土中から出土している。

所見　遺物は, 前期前半（関山式期）と前期後半（浮島式期）の土器片が混在して出土している。前期前半（関山式期）の土器片は重複している第 16 号竪穴建物跡の出土土器と同時期であるため，当遺構への流れ込みと考えられる。このことから当遺構の時期は，前期後半（浮島式期）と考えられる。



第 35 図　第４号陥し穴・出土遺物実測図

第４号陥し穴出土遺物観察表（第 35 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
132	縄文土器	深鉢	－	(3.4)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部刻み目文（半截竹管による条線文）・三角文	覆土中	浮島Ⅲ式
133	縄文土器	深鉢	－	(2.0)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	貝殻腹縁文	覆土中	浮島式
134	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	外にぶい褐／内灰褐	普通	結束縄文第１種→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式
135	縄文土器	深鉢	－	(4.9)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	褐	普通	半截竹管による沈線文　結束縄文第１種	覆土中	関山Ⅰ式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 36	磨石	9.5	5.9	3.2	243.7	礫岩	側縁部使用痕	覆土中	－

表３　縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
1	D３h2	N－48°－W	楕円形	3.25 × 2.00	90	外傾	平坦	人為	縄文土器，石器，剥片	－
2	D２c8	N－60°－W	楕円形	2.57 × 2.27	288	直立	平坦	自然／人為	縄文土器，石器，剥片	SI８→本跡
3	D２b7	N－81°－E	楕円形	1.62 × 1.48	186	直立	平坦	人為	縄文土器，石器，剥片	－
4	C２f7	N－24°－W	楕円形	1.40 × 1.08	90	直立	平坦	自然／人為	縄文土器，石器，剥片	SI16→本跡

(3)　炉穴

第１号炉穴（第36・37図　PL13）

位置　調査Ａ区南部のＤ３g1区，標高21ｍほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状　長径2.69ｍ，短径2.35ｍの楕円形で，長径方向はＮ－70°－Ｗである。深さは24cmで，底面は平坦である。火焚部は，中央部に位置し，径60cmの円形で，深さ20cmの皿状に掘りくぼめ，第６・７層を埋め戻して炉床が構築されている。火熱を受けて赤変しているが硬化はしていない。

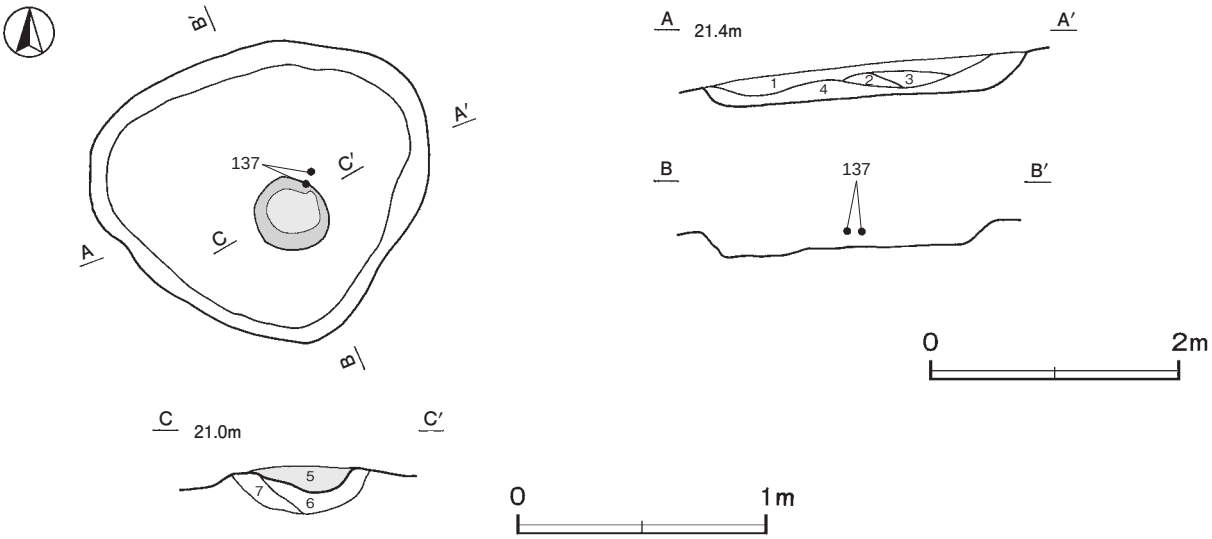
覆土　４層に分層できる。ロームブロック，焼土ブロックが含まれていることから，埋め戻されている。第６・７層が掘方への埋土で，第５層上面が火床面である。

土層解説

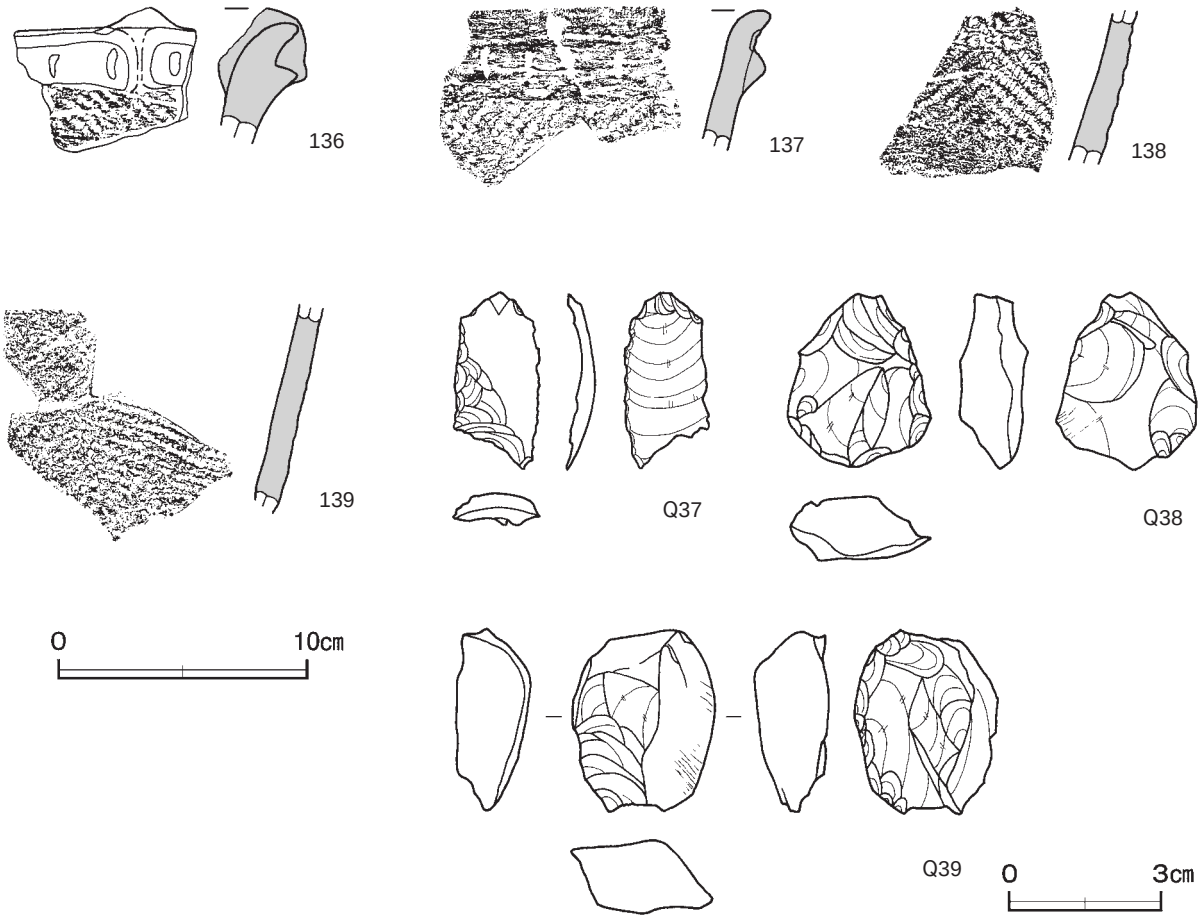
1　黒褐色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量
3　褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　赤褐色　焼土ブロック多量，炭化粒子微量
6　明褐色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　褐色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片39点（深鉢），石器３点（掻器），剥片７点（チャート４，砂岩１，安山岩１，石灰岩１）が，覆土中から出土している。137は，ほぼ中央部の覆土中層から出土している。

所見　前期前半（関山式期）の土器片が覆土上層から出土しているが，時期は土器の出土状況から前期初頭（遠下式期）と考えられる。



第36図　第１号炉穴実測図



第 37 図　第 1 号炉穴出土遺物実測図

第 1 号炉穴出土遺物観察表（第 37 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
136	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	口縁部隆帯貼付→半截竹管文（爪形文）　胴部単節縄文ＲＬ　内面磨き	覆土中	遠下式 ＰＬ 17
137	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい赤褐	普通	口縁部隆帯貼付→半截竹管文（爪形文）　胴部単節羽状縄文　内面磨き	覆土中層	遠下式 ＰＬ 17
138	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・繊維	明褐	普通	結束第一種縄文→ループ文	覆土中	関山Ｉ式
139	縄文土器	深鉢	－	(8.3)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文	覆土中	関山式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 37	掻器	3.5	1.7	0.6	2.02	チャート	側面刃部調整	覆土中	－
Q 38	掻器	3.5	2.9	1.3	10.21	石英	側面刃部調整	覆土中	－
Q 39	掻器	3.6	2.8	1.6	15.08	チャート	側面刃部調整	覆土中	－

(4)　土坑

土坑 19 基は，調査Ａ区の全域にわたり分布している。うち特徴のある５基については文章で記述し，ほかは一覧表で掲載する。

第７号土坑（第 38 図　PL13）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２h9 区，標高 23 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状　長径 1.88 m，短径 1.66 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 80 ゜－Ｅである。深さは 20cmで，底面は

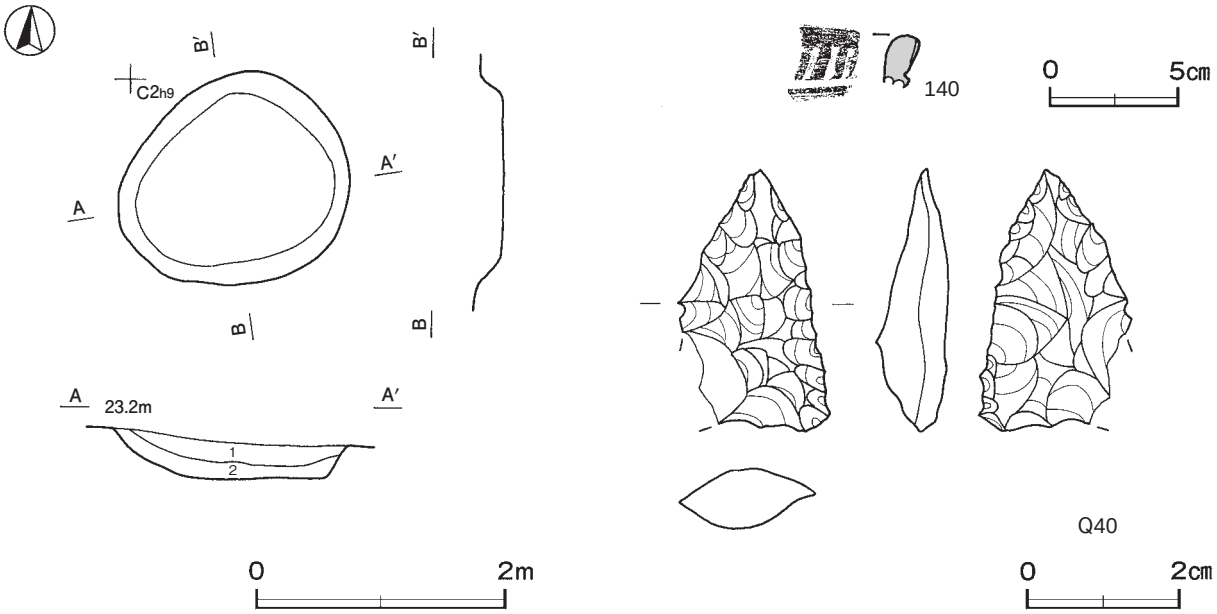
平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量　　2　褐　　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　縄文土器片８点（深鉢），石器１点（鏃），剥片４点（チャート２，安山岩１，デイサイト１）が出土している。Q 40 は北東部の底面，140 は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から前期と考えられる。骨などの出土は見られなかったが，遺構の形状や覆土が人為堆積であることから，墓坑の可能性がある。



第 38 図　第７号土坑・出土遺物実測図

第７号土坑出土遺物観察表（第 38 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
140	縄文土器	深鉢	－	(2.0)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	半截竹管による連続沈線文	覆土中	前期

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 40	鏃	3.5	(2.0)	1.0	(5.13)	石英	平基無茎鏃　両面押圧剥離　端部一部欠損	北東部底面	－

第９号土坑（第 39 図・PL13）

位置　調査 A 区中央部のＣ２f8 区，標高 22 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第 16 号竪穴建物跡を掘り込み，北部を倒木による攪乱を受けている。

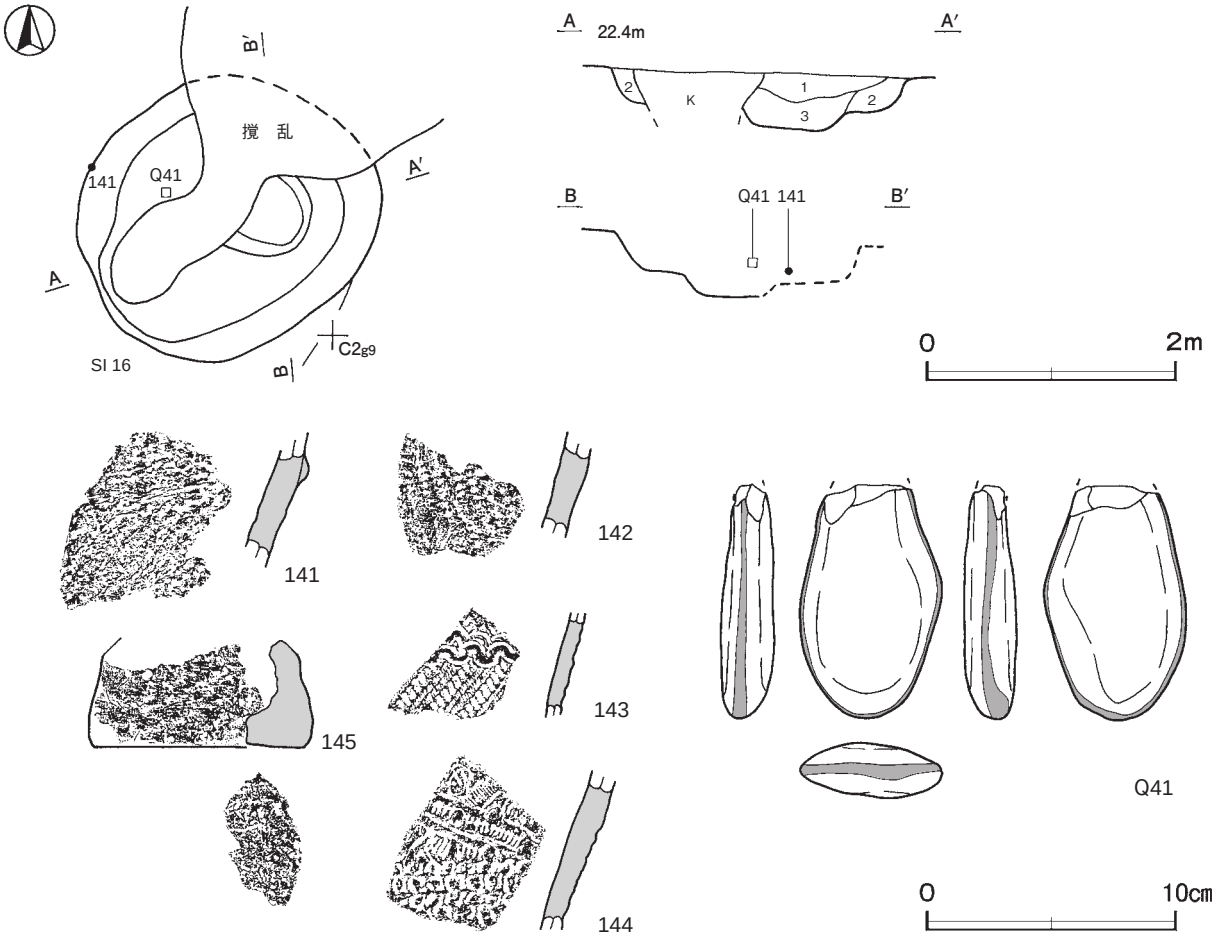
規模と形状　長径 2.22 m，短径 2.05 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 72°－Ｅである。深さは 28cmで，底面は有段である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　３層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量　　3　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 74 点（深鉢），石器１点（磨石），剥片 18 点（砂岩７，安山岩４，チャート３，石英岩２，雲母片岩１，石英閃緑岩１），自然礫２点（安山岩）が，散在して覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から前期中葉（黒浜式期）と考えられる。骨などの出土は見られなかったが，遺構の形状や覆土が人為堆積であることから，墓坑の可能性がある。



第 39 図　第９号土坑・出土遺物実測図

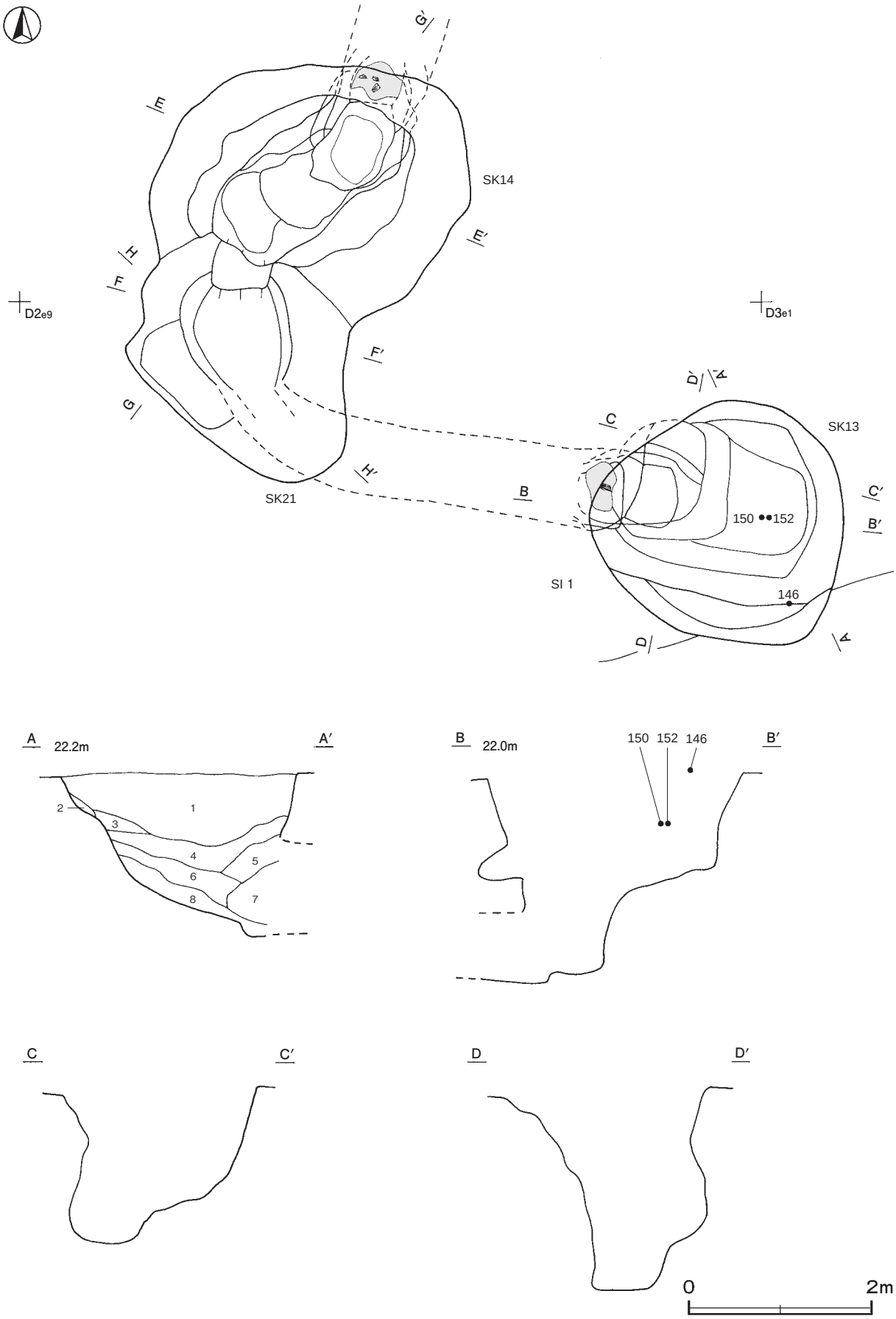
第９号土坑出土遺物観察表（第 39 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
141	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	隆帯貼付文　単節縄文ＬＲ	西部覆土下層	遠下式
142	縄文土器	深鉢	－	(4.2)	－	長石・石英・繊維	明赤褐	普通	単節縄文ＲＬ	覆土中	遠下式
143	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・繊維	灰褐	普通	附加条１種縄文→コンパス文	覆土中	黒浜式 ＰＬ 17
144	縄文土器	深鉢	－	(6.5)	－	長石・石英・繊維	橙	普通	半截竹管による沈線文の中に刻み目を充填・多段ループ文→瘤状貼付文	覆土中	黒浜式
145	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	[8.4]	長石・石英・ 赤色粒子・繊維	明褐	普通	台付鉢脚部　底部外面単節縄文　下端部ナデ	覆土中	５％

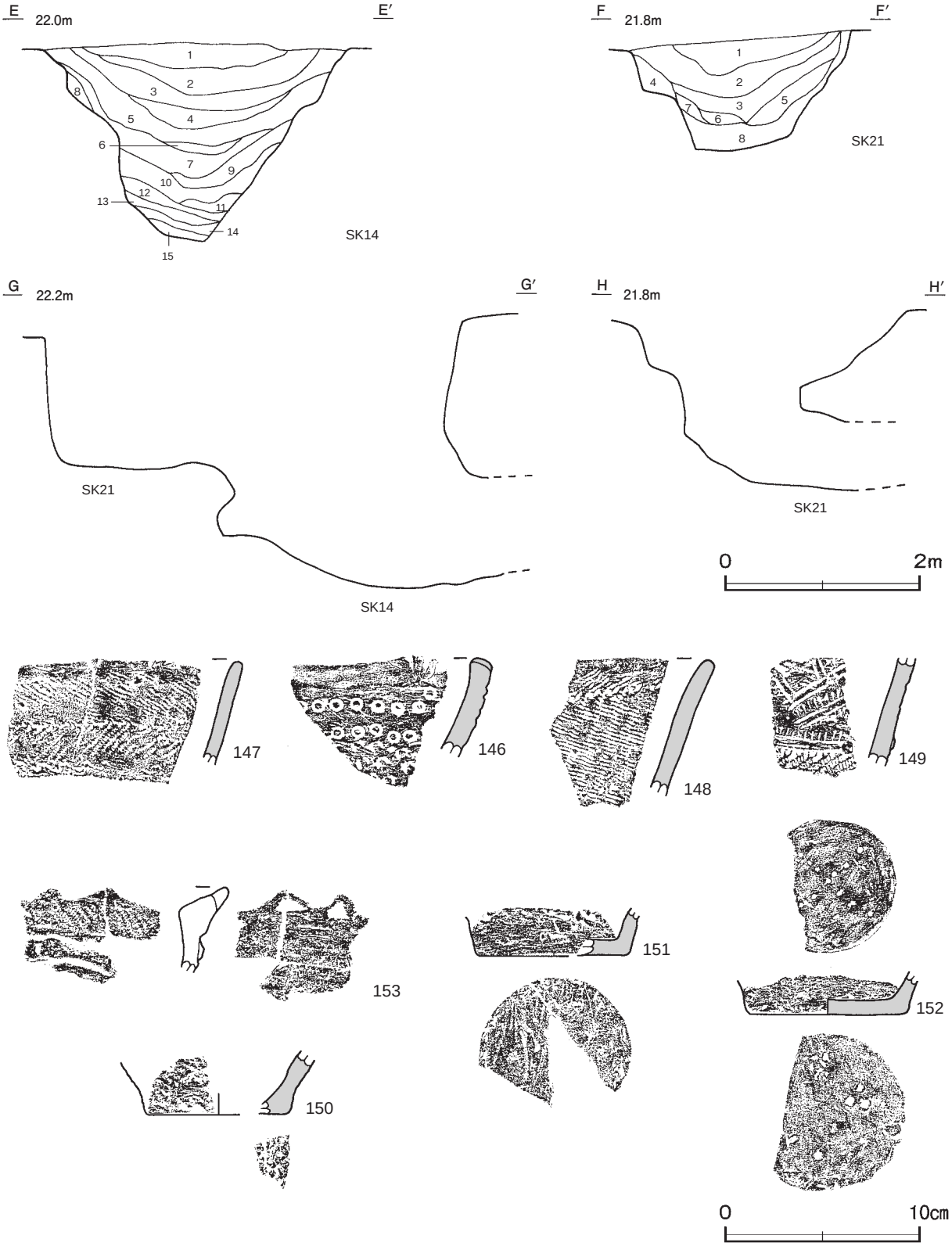
番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 41	磨石	(9.3)	5.7	2.1	(155.9)	砂岩	側縁部使用痕	北西部覆土下層	－

第 13 号土坑（第 40・41 図　PL14）

位置　調査Ａ区南部のＤ２e0 区，標高 22 ｍほどの台地平坦部に位置している。



第 40 図　第 13・14・21 号土坑実測図



第 41 図　第 13・14・21 号土坑・第 13 号土坑出土遺物実測図

重複関係　第 1 号竪穴建物跡を掘り込み，第 21 号土坑と連結していると推測できる。

規模と形状　長径 2.74 m，短径 2.62 mの楕円形で，長径方向はN－83°－Wである。深さは 120 ～ 210㎝で，東壁側には底面から高さ 1.0 mほどの中位に段を有し，出入りする施設と考えられる。底面は平坦である。西

部にはトンネル状の入り口がある。その入り口付近の底面からは，長径 48cm，短径 28cmの楕円形の範囲で焼土と炭化材が出土している。焚火のような痕跡である。壁は外傾している。崩落の恐れがあることから，完掘はできなかったが，西部はさらに第 21 号土坑の方向にトンネル状に延びており，第 21 号土坑と連結していると推測できる。

覆土　８層に分層できる。第２～８層は，ロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。第１層は黒色を基調とし，含有物が微量であることから自然堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　黄　褐　色　ロームブロック多量
6　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　明 黄 褐 色　ロームブロック多量
8　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片 117 点（深鉢），剥片 45 点（砂岩 17，チャート９，安山岩７，石英岩６，玄武岩３，雲母片岩１，デイサイト１，ラピリストーン１）が覆土中から，炭化材２点が底面からそれぞれ出土している。153 は西部の覆土第６層，146 は南東部，150・152 は東部の覆土第１層からそれぞれ出土している。そのほかの土器片，剥片は覆土第１層から出土している。

所見　遺物は，前期初頭（花積下層式），前期前半（関山式）の土器片が覆土第１層，中期初頭（五領ヶ台式）の土器片が覆土第６層からそれぞれ出土している。時期は土器の出土状況から中期初頭（五領ヶ台式期）と考えられる。底面から出土している炭化材についてＣ 14 年代測定を行ったところ，中期頃との結果がでている。詳細は付章を参照されたい。

第 13 号土坑出土遺物観察表（第 41 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
146	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石･石英･繊維	橙	普通	竹管による円形刺突文　棒状工具による連続刺突文	南東部覆土第１層	花積下層式 ＰＬ 17
147	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石･石英･繊維	にぶい褐	普通	結束縄文第１種	覆土第１層	黒浜式
148	縄文土器	深鉢	－	(7.0)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	無節羽状縄文　撚糸文	覆土第１層	関山Ｉ式 ＰＬ 17
149	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	口縁部梯子状沈線文→瘤状貼付文　胴部単節縄文ＬＲ	覆土第１層	関山Ｉ式
150	縄文土器	深鉢	－	(3.2)	[7.4]	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	下端外面単節縄文ＬＲ　底部外面単節縄文　内面ナデ	東部覆土第１層	５％　関山式
151	縄文土器	深鉢	－	(2.4)	[7.6]	長石･石英･繊維	橙	普通	外・内面ナデ	覆土第１層	５％　前期
152	縄文土器	深鉢	－	(2.2)	8.0	長石･石英･繊維	にぶい橙	普通	下端・底部外面ナデ　内面棒状工具による十字状の連続刺突文	東部覆土第１層	10%　前期 ＰＬ 17
153	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部山形の突起　内面三角印刻文　細縄文ＲＬ半截竹管による沈線文	西部覆土第６層	五領ヶ台式 ＰＬ 17

第 14 号土坑（第 40 ～ 42 図　PL14）

位置　調査Ａ区南部のＤ２d9 区，標高 21 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号竪穴建物跡を掘り込み，第 21 号土坑と連結している。

規模と形状　長径 3.40 m，短径 3.20 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 68 ゜－Ｅである。深さは 250 ～ 268cmで，底面は平坦である。南部はスロープ状に上がり第 21 号土坑へ連結している。北部のトンネル状の入り口付近の底面からは，長径 52cm，短径 38cmの楕円形の範囲で焼土と炭化材が出土している。第 13 号土坑同様，焚火のような痕跡である。壁は外傾している。トンネル部分は崩落の恐れがあることから完掘できなかったが，第２号竪穴建物跡の方向に横穴状に延びている。当遺構の北側には，連結しそうな土坑は調査区域内では確認できなかった。トンネル状の横穴は，調査区域外の北東方向へ延びていくものと考えられる。

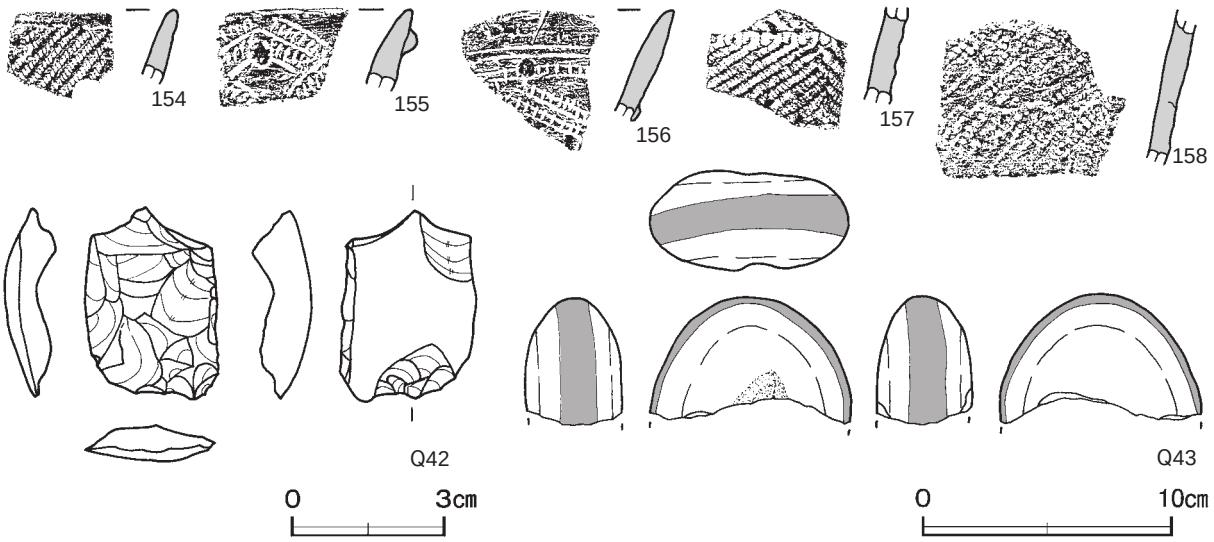
覆土　15 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　にぶい褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　黄　褐　色　ロームブロック多量
9　黄　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
10　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
11　にぶい黄橙色　ロームブロック多量
12　明　褐　色　ロームブロック中量
13　灰　白　色　灰白色粘土ブロック多量，ロームブロック中量
14　明　褐　色　ロームブロック多量
15　にぶい橙色　ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片 46 点（深鉢），石器２点（掻器，凹石），剥片 32 点（砂岩 13，安山岩９，石灰岩３，チャート２，デイサイト２，雲母片岩１，黒色片岩１，玄武岩１）が覆土中から，炭化材３点が底面からそれぞれ出土している。

所見　遺物は，前期前半（関山式）の土器片が覆土中から出土しているが，当遺構が掘り込んでいる第１号竪穴建物跡（関山Ⅰ式期）からの混入遺物と考えられる。当遺構は，第 13 号土坑とトンネル状の横穴で連結していることから関連する遺構で，時期は中期初頭（五領ヶ台式期）と考えられる。底面から出土している炭化材についてＣ 14 年代測定を行ったところ，中期頃との結果がでている。詳細は付章を参照されたい。



第 42 図　第 14 号土坑出土遺物実測図

第 14 号土坑出土遺物観察表（第 42 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
154	縄文土器	深鉢	－	(3.0)	－	長石・石英・繊維	外橙／内にぶい褐	普通	補修孔あり　単節縄文ＬＲ	覆土中	前期
155	縄文土器	深鉢	－	(3.3)	－	長石・石英・繊維	明褐	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式
156	縄文土器	深鉢	－	(4.4)	－	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	梯子状沈線文→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式
157	縄文土器	深鉢	－	(3.9)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	単節羽状縄文→ループ文	覆土中	関山式
158	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母・繊維	にぶい橙	普通	結節縄文	覆土中	関山式

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ 42	掻器	3.8	2.7	1.2	9.48	チャート	側縁部刃部調整	覆土中	－
Ｑ 43	凹石	(5.1)	8.0	3.9	(182.3)	砂岩	磨石兼用　側縁部使用痕	覆土中	－

第21号土坑（第40・41・43図　PL14・15）

位置　調査A区南部のD２e9区，標高21ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第14号土坑及び第13号土坑と連結していると推測できる。

規模と形状　長径2.88ｍ，短径2.10ｍの楕円形で，長径方向はN－44°－Wである。深さは42～174㎝で，底面は平坦である。南部には階段状の段を有する。西部と東部の壁は外傾して立ち上がっている。北部は第14号土坑と連結し，東部はトンネル状に横穴が延びている。崩落の恐れがあることから完掘できなかったが，南東部は第13号土坑の方向にトンネル状に延びており，第13号土坑のトンネル状の横穴と方向が合致することから，連結していると推測できる。

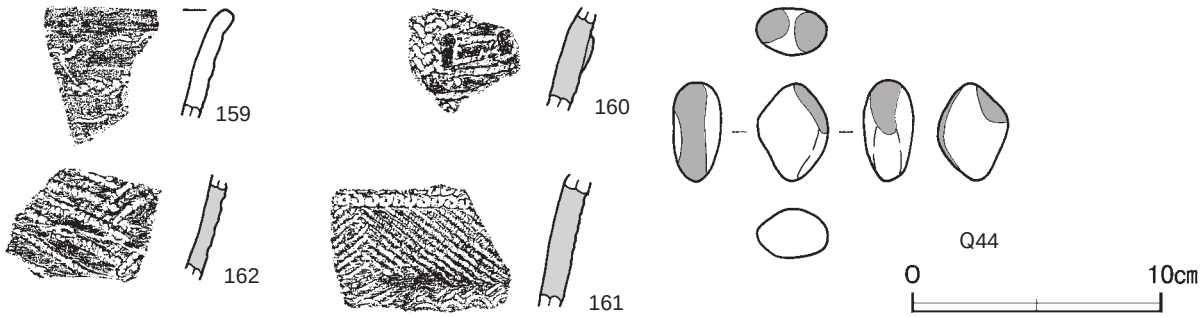
覆土　８層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック多量
5　黒　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　灰　白　色　灰白色粘土ブロック・ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片14点（深鉢），石器１点（磨石），剥片２点（砂岩・安山岩）が，覆土中から出土している。

所見　遺物は，前期（関山式・粟島台式・黒浜式）の土器片が覆土中から出土しているが，混入遺物と考えられる。当遺構は第13号土坑と関連する遺構と考えられることから，時期は中期初頭（五領ヶ台式期）と考えられる。性格については，第４節まとめで検証する。



第43図　第21号土坑出土遺物実測図

第21号土坑出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
159	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	結節縄文	覆土中	粟島台式
160	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	にぶい橙	普通	撚糸文→平組紐縄文→刺突文→瘤状貼付文	覆土中	関山Ⅰ式
161	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	単節羽状縄文→コンパス文・多段ループ文	覆土中	関山Ⅰ式
162	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	撚糸文羽状構成	覆土中	黒浜式

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 44	磨石	4.0	2.9	2.0	26.6	チャート	側縁部３か所使用痕	覆土中	－

表４　縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
5	D２b9	－	円形	1.15 × 1.05	36	外傾／有段	平坦	人為	縄文土器，石器，剥片	SI８→本跡
7	C２h9	N－80°－E	楕円形	1.88 × 1.66	20	外傾	平坦	人為	縄文土器，石器，剥片	－
8	C２g9	N－30°－W	楕円形	2.96 × 2.08	18	外傾	平坦	人為	縄文土器，剥片	本跡→SD５
9	C２f8	N－72°－E	楕円形	2.22 × 2.05	28	外傾	有段	人為	縄文土器，石器，剥片，自然礫	SI16→本跡
13	D２e0	N－83°－W	楕円形	2.74 × 2.62	120～210	外傾	平坦	自然／人為	縄文土器，剥片	SI1→本跡･SK21
14	D２d9	N－68°－E	楕円形	3.40 × 3.20	250～268	外傾	平坦	人為	縄文土器，石器，剥片	SI1→本跡･SK21
15	C２e6	－	円形	2.23 × 2.23	18	緩斜	平坦	人為	縄文土器，剥片	SI７→本跡
19	D２c9	N－51°－E	長方形	3.04 × 1.60	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	本跡→SI２
20	C２a7	N－71°－W	楕円形	1.58 × 1.01	18	外傾	平坦	人為	縄文土器	－
21	D２e9	N－44°－W	楕円形	2.88 × 2.10	42～174	外傾	平坦	人為	縄文土器，石器，剥片	本跡･SK13･14
22	C２b7	N－65°－W	楕円形	1.93 × 1.67	16	外傾	平坦	人為	－	－
23	B２j7	N－25°－E	楕円形	1.38 × 1.18	10～18	外傾	平坦	自然	－	－
24	B２h7	N－16°－W	［楕円形］	(1.54 × 1.06)	82	外傾	平坦	自然	縄文土器，剥片	本跡→SK28
25	B２f6	N－37°－W	楕円形	1.16 × 0.92	23	直立	平坦	自然	縄文土器	－
26	B２e6	N－15°－W	楕円形	0.98 × 0.82	68	直立	平坦	人為	－	－
27	C２i7	N－34°－W	楕円形	1.80 × 1.58	28	外傾	平坦	自然	－	本跡→TM１
28	B２h7	N－17°－W	［楕円形］	(2.92 × 1.90)	28	外傾	平坦	自然	縄文土器	SK24→本跡
29	D２a8	N－81°－E	隅丸長方形	3.00 × 0.82	62	直立	平坦	人為	縄文土器，剥片	SI８･18→本跡
30	C２f6	N－82°－W	楕円形	1.50 × 1.29	50	外傾	皿状	人為	－	本跡→SD４

２　古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，調査区域内のほぼ中央部に集中して分布している。竪穴建物跡２棟，方形周溝墓１基，溝跡２条を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　竪穴建物跡

第６号竪穴建物跡（第44～46図　PL７・８）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２j8区，標高23ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第17号竪穴建物跡，第１号方形周溝墓を掘り込み，第１号溝に掘り込まれている。

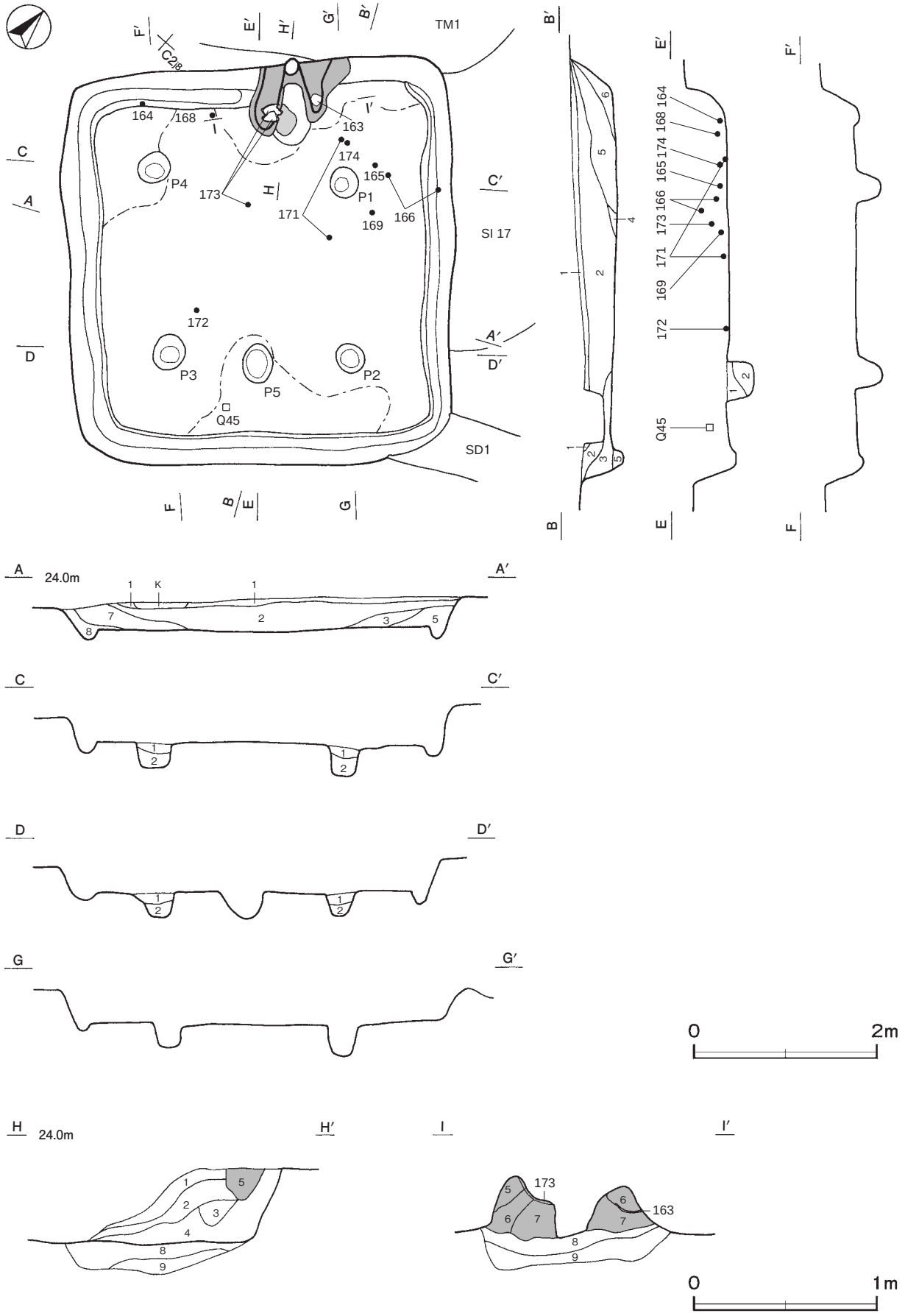
規模と形状　長軸4.30ｍ，短軸4.24ｍの方形で，主軸方向はＮ－43°－Ｗである。壁は高さ22～38cmで，外傾している。

床　平坦である。竈の手前と，西コーナー部，南東部を除き踏み固められている。壁下には，壁溝が巡っている。

竈　北西壁中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで92cmで，燃焼部幅は24cmである。燃焼部は，床面を18cm掘りくぼめた部分に，ロームブロックや焼土ブロックを含んだ第８・９層を埋土している。煙道部は壁外に10cmほど掘り込まれ，火床部から外傾している。袖部は，地山の上に５～７層を積み上げて構築されている。天井部はわずかに残存している。火床面は第８層の上面で火熱を受け赤変硬化している。

竈土層解説

１　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量
２　暗　褐　色　焼土粒子微量
３　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
４　明　褐　色　焼土粒子微量
５　灰　褐　色　粘土ブロック・ロームブロック・山砂多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
６　明　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
７　明　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック中量
８　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
９　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子微量



第 44 図　第６号竪穴建物跡実測図

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ25～35cmで，配置状況から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ29cmで，配置状況から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説（Ｐ１～Ｐ４）
1　褐　　色　ローム粒子中量
2　褐　　色　ローム粒子多量

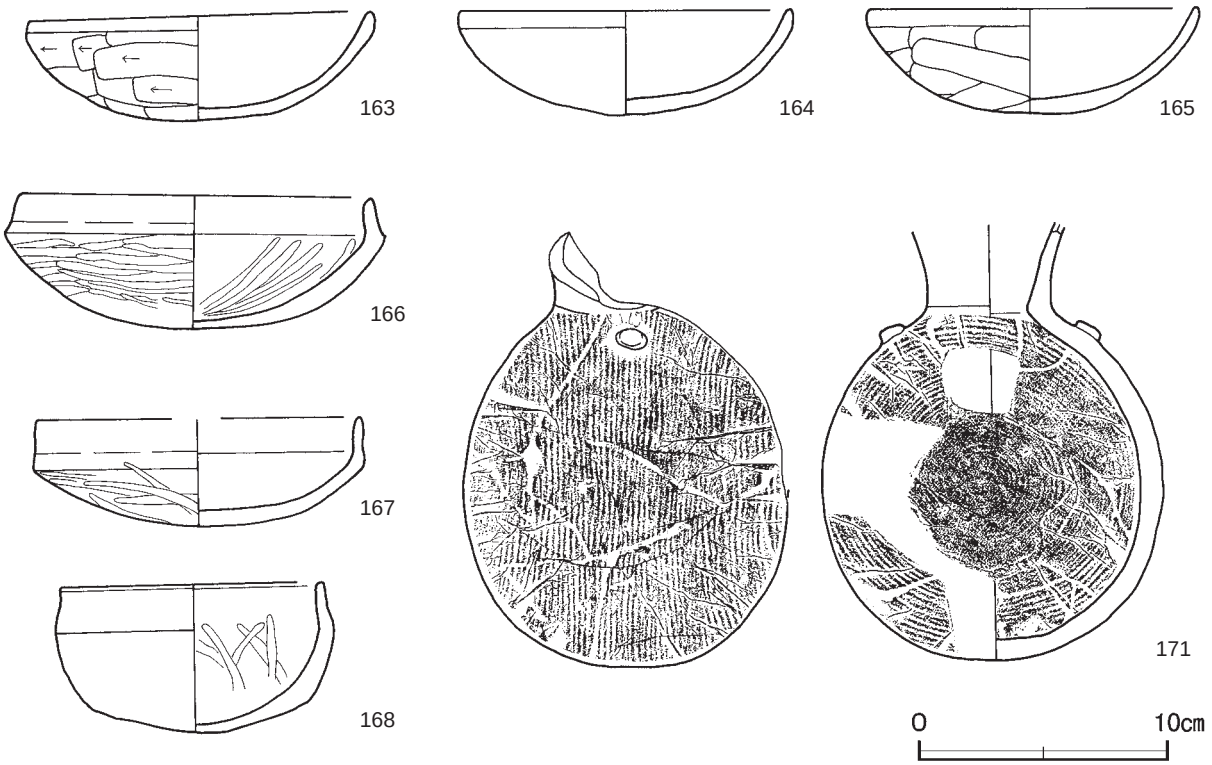
ピット土層解説（Ｐ５）
1　暗　褐　色　ローム粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量

覆土　８層に分層できる。第１・２層は黒色土を基調とし，周囲からの流れ込みの状況や含有物が少ないことから自然堆積である。第８層はロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

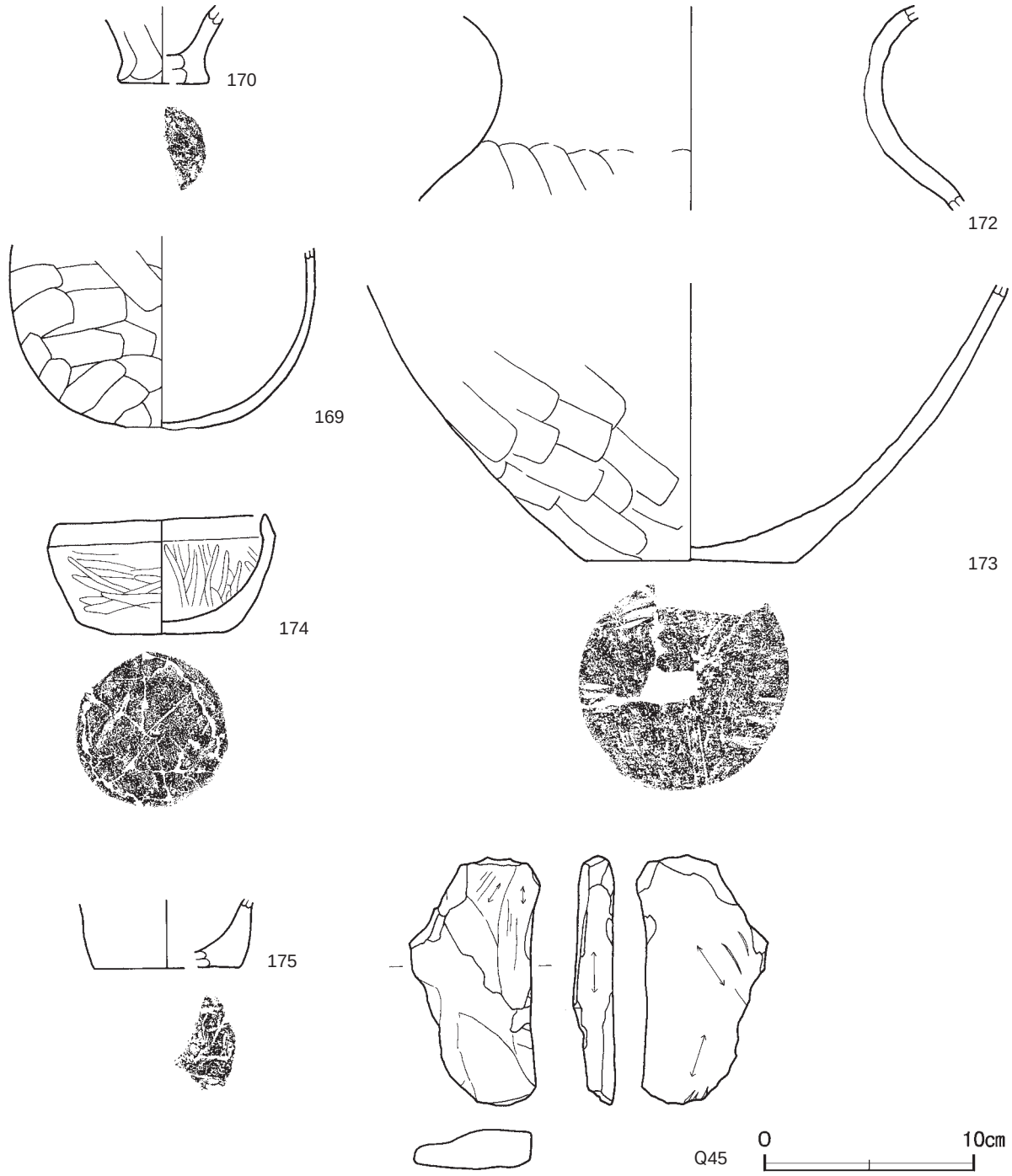
土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　褐　　色　ローム粒子中量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量
6　褐　　色　ロームブロック多量
7　明　褐　色　ロームブロック多量
8　黄　褐　色　ロームブロック多量

遺物出土状況　土師器片97点（坏27，鉢１，壺１，提瓶２，甕64，手捏土器２），須恵器片１点（甕），土製品１点（支脚），石器１点（砥石）が，覆土中層から床面にかけて散在して出土している。164は西コーナー部から正位の状態で床面に置かれたような状態で出土している。163・173は竈袖部の補強材として，165・169・174は北部の，168は竈の西部付近から正位の状態で，172は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。また，166は北部の覆土下層と北東壁際の覆土中層から出土したもの，171は北部と北東部寄りの覆土下層から出土したものがそれぞれ接合できたものである。さらにＱ45は，南東壁際の覆土中層から出土している。覆土中層から下層にかけてのものは，廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は出土土器から６世紀前葉と考えられる。



第45図　第６号竪穴建物跡出土遺物実測図（１）



第46図　第６号竪穴建物跡出土遺物実測図（２）

第６号竪穴建物跡出土遺物観察表（第45・46図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
163	土師器	坏	13.6	4.4	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	外面ヘラ削り　内面横位のヘラナデ	竈袖部	90% ＰＬ 19
164	土師器	坏	13.1	4.2	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面横位のヘラナデ	床面	95% ＰＬ 19
165	土師器	坏	13.0	4.3	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ削り　内面横位のヘラナデ	覆土下層	70% ＰＬ 19
166	土師器	坏	13.8	5.3	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横位のナデ　体部外面ヘラ削り後磨き　内面ヘラ磨き	覆土中層／覆土下層	70% ＰＬ 19
167	土師器	坏	[12.8]	4.3	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	外面ヘラ削り後磨き　内面横位のヘラナデ	覆土下層	60% ＰＬ 19

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
168	土師器	坏	10.3	5.9	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横位のヘラナデ　体部外面ヘラ削り後磨き　内面ヘラナデ後磨き	覆土下層	80% ＰＬ 19
169	土師器	鉢	－	(8.9)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	覆土下層	40% ＰＬ 19
170	土師器	壺	－	(3.7)	[4.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	外面縦位のヘラナデ　内面横位のヘラナデ	覆土下層	10%
171	土師器	提瓶	－	(17.4)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	酸化/還元	頸部外・内面ナデ　肩部ボタン状の把手　体部外面回転カキ目調整　内面ナデ	覆土下層	60% ＰＬ 20
172	土師器	甕	－	(9.6)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	頸部外・内面ヘラナデ　体部外面斜位のヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ	覆土下層	10% ＰＬ 19
173	土師器	甕	－	(13.2)	9.8	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面斜位のヘラ削り　内面ヘラナデ　底部外面ヘラ削り	竈袖部	30% ＰＬ 19
174	土師器	手捏土器	9.9	5.7	6.8	長石・石英・赤色粒子	褐灰	普通	口縁部外・内面ヘラナデ　体部外面縦位のヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	覆土下層	95% ＰＬ 19
175	土師器	手捏土器	－	(3.2)	[7.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端ヘラナデ　底部外面木葉痕　内面ヘラナデ	覆土下層	15%

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｑ 45	砥石	11.8	6.2	2.0	153.3	砂岩	砥面３面	覆土中層	－

第 13 号竪穴建物跡（第 47・48 図　PL ９）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２c6 区，標高 20 ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第４号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　北西コーナー部と竈の一部が調査区域外へ延びているが，一辺 5.02 ｍの方形で，主軸方向はＮ－ 24°－Ｗであることが確認できた。壁は高さ 40 ～ 60㎝で，ほぼ直立している。

床　平坦である。南東端部と，東部の一部を除き踏み固められている。壁下には，北コーナー部を除いて壁溝が巡っている。

竈　北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで 128㎝で，燃焼部幅は 48㎝である。燃焼部袖部は，床面を 12㎝ほど掘りくぼめた部分に，ロームブロックを含んだ第 11・12 層が埋め戻して構築されている。袖部は，地山の上に６～ 10 層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に 40㎝ほど掘り込まれ火床部からやや外傾している。火床部は火熱を受けて赤変しているが硬化はしていない。

竈土層解説

1　褐　灰　色　ローム粒子微量
2　灰　褐　色　焼土ブロック少量
3　褐　灰　色　焼土粒子微量
4　灰　褐　色　焼土粒子少量
5　灰　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
6　灰　褐　色　ロームブロック多量，黄褐色山砂中量
7　赤　褐　色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量
8　灰　白　色　灰白色粘土ブロック・ロームブロック多量
9　褐　　色　ロームブロック多量，灰白色粘土ブロック少量
10　明　褐　色　ロームブロック多量
11　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化粒子微量
12　明　褐　色　ロームブロック多量，灰白色粘土ブロック少量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ 34 ～ 63㎝で，配置状況から主柱穴と考えられる。底面には柱のあたりが認められる。Ｐ５は深さ 29㎝で，配置状況から出入り口施設に伴うピットと考えられる。底面には柱状のあたりが認められる。

ピット土層解説（Ｐ１～Ｐ４）

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　明　褐　色　ロームブロック多量
4　黄　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量

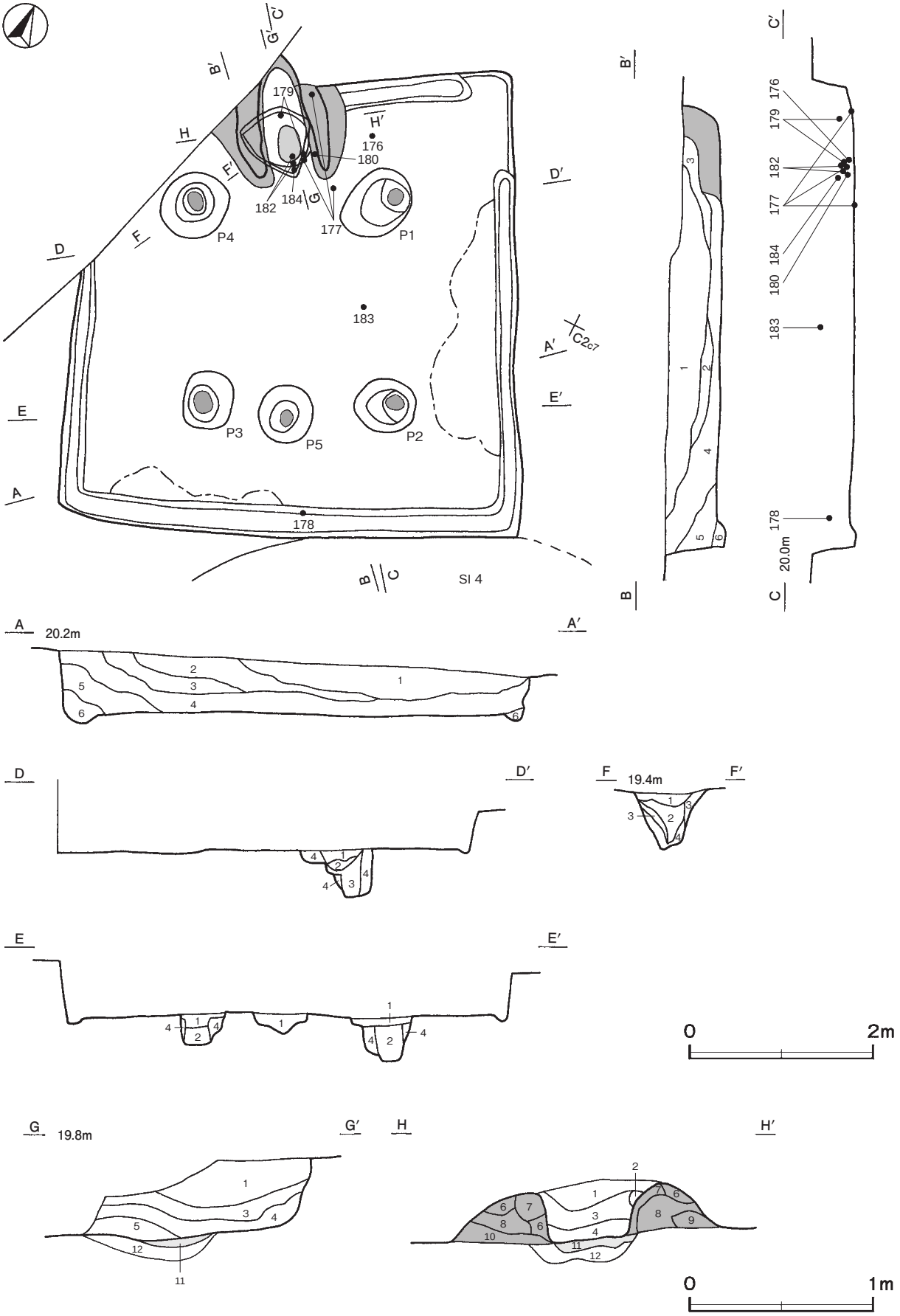
ピット土層解説（Ｐ５）

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　６層に分層できる。第２～６層はロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。第１層は，黒色を基調とし，周囲からの流れ込みの状況や含有物が少ないことから自然堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック多量



第 47 図　第 13 号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況　土師器片 114 点（坏 17，甕 94，手捏土器３），須恵器片２点（坏），石器２点（紡錘車）が，覆土上層から下層にかけて散在し，竈内からは集中して破片が出土している。179・180・182・184 は竈内，177 は竈付近の床面と竈内から出土した破片が接合したものである。176 は北部，178 は南東壁際の覆土下層，183 は中央部からやや東部寄りの覆土中層，Q 46・Q 47 は北西部の覆土中層からそれぞれ出土している。いずれも廃絶後間もなく廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は出土土器から６世紀中葉と考えられる。

第 48 図　第 13 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 13 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 48 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
176	土師器	坏	10.0	3.3	－	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横位のヘラナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	覆土下層	95% ＰＬ 20
177	土師器	坏	13.9	4.2	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ後ヘラ磨き	床面／竈内	80% ＰＬ 20
178	土師器	坏	［13.0］	4.6	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	口縁部横位のヘラナデ　体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　外・内面黒色処理	覆土下層	80% ＰＬ 20
179	土師器	坏	［13.4］	4.2	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横位のヘラナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ	竈内	45% ＰＬ 20
180	土師器	甕	［19.0］	（5.0）	－	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	竈内	10%
181	土師器	甕	－	（4.2）	7.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　底部外面ヘラ削り	覆土下層	10%

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
182	土師器	甕	－	(1.9)	7.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端ヘラ削り　底部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	竈内	5％
183	土師器	手捏土器	[7.8]	5.4	[5.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面指頭によるナデ　内面ヘラナデ後黒色処理　底部木葉痕	覆土中層	50% ＰＬ 20
184	土師器	手捏土器	－	(3.0)	7.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面指頭によるナデ　内面ヘラナデ後黒色処理　底部木葉痕	竈内	10%
185	土師器	手捏土器	－	(2.4)	[5.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外・内面指頭によるナデ　内面黒色処理　底部木葉痕	覆土上層	20%

番号	器　種	径	孔径	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 46	紡錘車	(3.7)	(0.6)	(0.5)	(4.05)	粘板岩	上面から下面への片面穿孔ヵ	覆土中層	ＰＬ 20
Q 47	紡錘車	(4.5)	(0.6)	(0.7)	(9.29)	粘板岩	上面から下面への片面穿孔ヵ	覆土中層	－

表５　古墳時代竪穴建物跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規　模	壁 高	床面	壁溝	内　部　施　設					覆土	主な出土遺物	時　期	備　考
				長軸×短軸（m）	(cm)			主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
6	Ｃ2j8	Ｎ－43°－Ｗ	方　形	4.30 × 4.24	22 ～ 38	平坦	ほぼ全周	4	1	－	北西壁	－	自然／人為	土師器，須恵器，土製品，石器	６Ｃ前葉	ＳＩ 17・ＴＭ１→本跡→ＳＤ１
13	Ｃ2c6	Ｎ－24°－Ｗ	方　形	5.02 × 5.02	40 ～ 60	平坦	ほぼ全周	4	1	－	北西壁	－	自然／人為	土師器，須恵器，石器	６Ｃ中葉	ＳＩ４→本跡

(2)　方形周溝墓

第１号方形周溝墓（第 49 ～ 51 図　PL11）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２g5 区，標高 21 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第９・15 号竪穴建物跡・第 27 号土坑を掘り込み，第６号竪穴建物，第２号溝に掘り込まれている。

規模と形状　西部は，後世の撹乱に掘り込まれているため，内法が南北軸 10.70 m，東西軸は 8.50 m，外法が南北軸 15.20 m，東西軸は 12.40 mしか確認できなかった。軸方向はＮ－ 35 ゜－Ｗで，平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形と推測できる。方台部は上部が削平されており，盛土は不明である。ほぼ中央部と考えられる位置から埋葬施設が確認できた。

周溝　西部が撹乱されているため，全周するか否かは不明である。規模は，上幅 2.72 ～ 3.02 m，下幅 0.62 ～ 1.02 m，深さは 34 ～ 82㎝で，壁は一様でなく，南部は直立し，北部から南東部にかけては方台部側，外縁部側は共に外傾し，外縁部側にテラス状の段を有している。

覆土　３層に分層できる。盛土及び壁面の崩落土が流入した堆積状況を呈している。

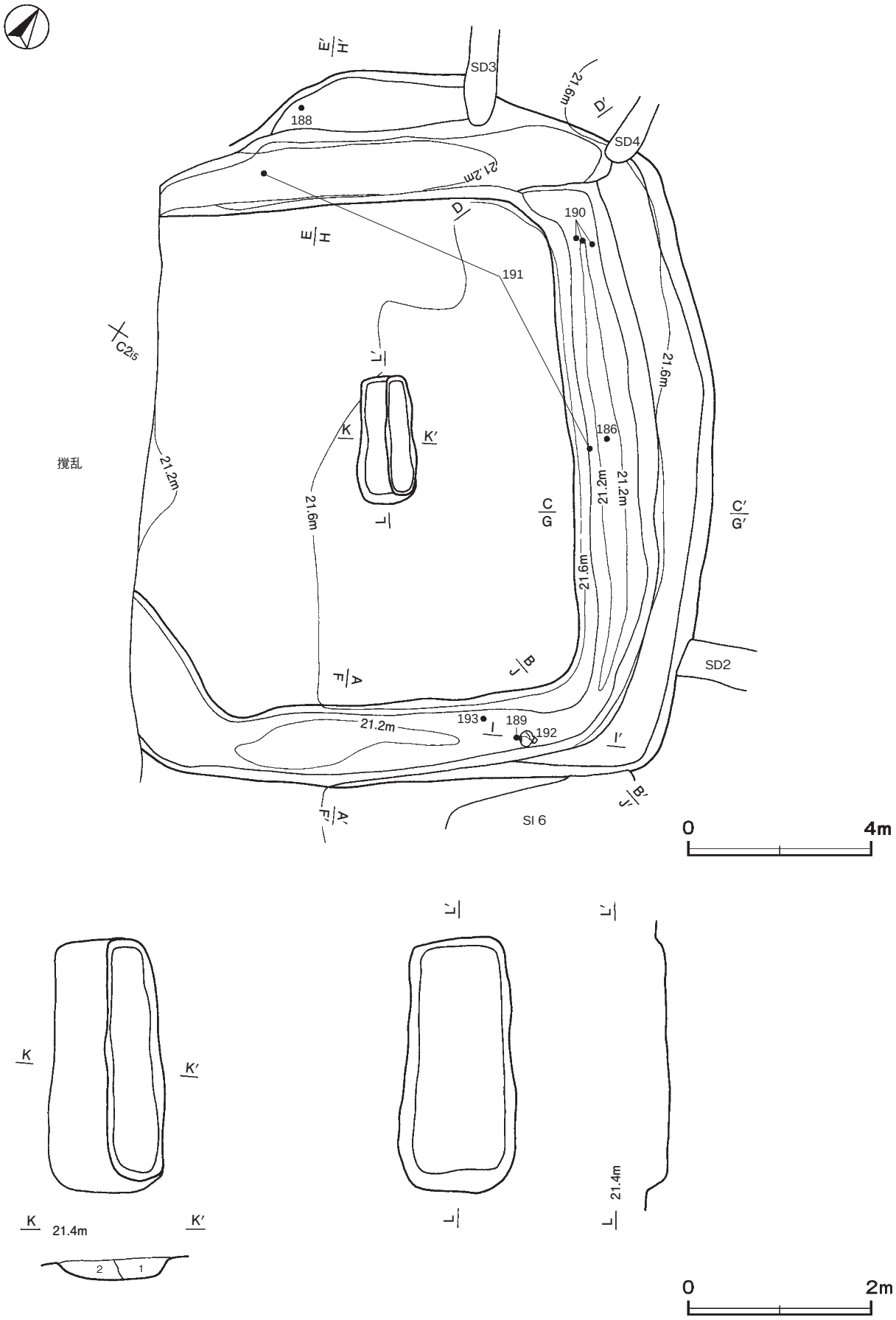
土層解説

１　黒　褐　色　ロームブロック少量
２　暗　褐　色　ロームブロック中量
３　黄　褐　色　ロームブロック多量

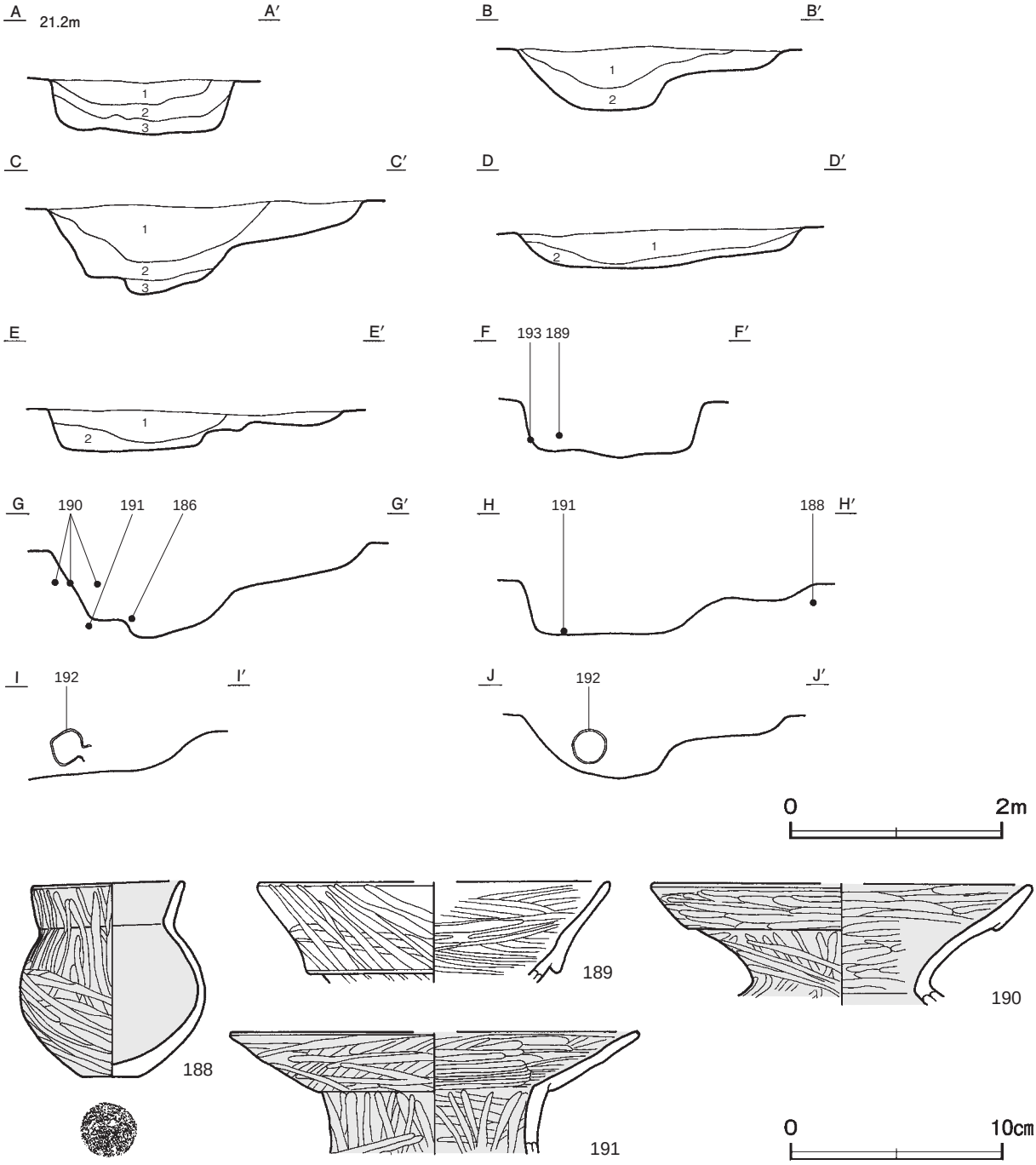
埋葬施設・掘方　西部が撹乱を受けているため不明な部分もあるが，遺存している部分からほぼ中央部に構築されていると推測できる。覆土の断面や平面形状から木棺直葬と考えられる。長軸 2.60 m，短軸 0.60 mの長方形で，長軸方向はＮ－ 36 ゜－Ｗである。確認面から底面までの深さは 20㎝で，底面は平坦である。壁は外傾している。掘方は南北軸 2.70 m，東西軸 1,18 mの長方形に掘りくぼめ，埋葬施設の構築材と考えられる位置までロームブロックを多量に混入した第２層で埋め戻している。埋葬施設内には人骨や出土遺物がなく，第１層はロームブロックが多量に含まれている。

埋葬施設・掘方土層解説

１　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
２　明　褐　色　ロームブロック多量



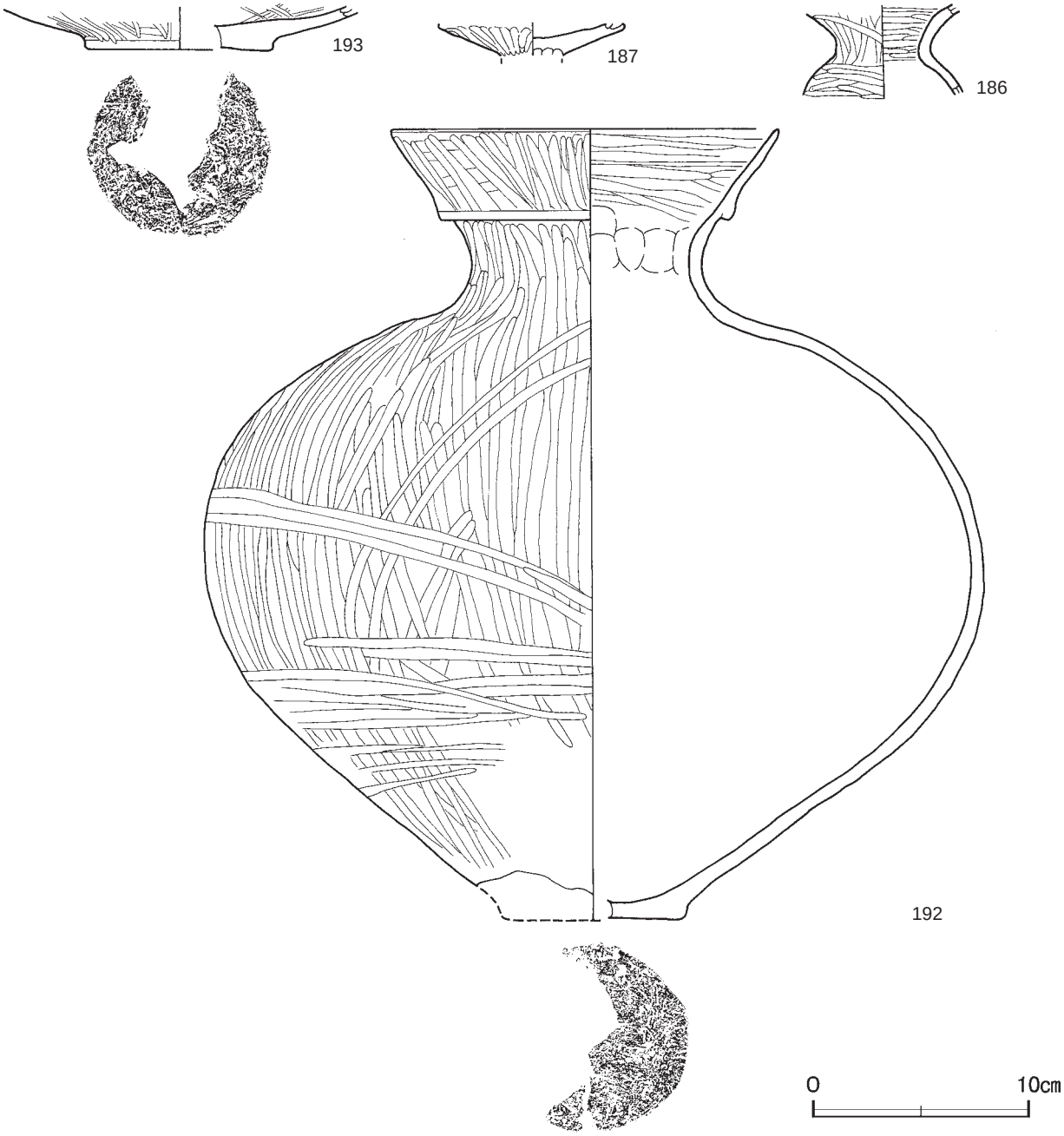
第 49 図　第 1 号方形周溝墓実測図（1）



第 50 図　第 1 号方形周溝墓・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片 198 点（坏 27，坩 4，高坏 1，壺 116，小形壺 1，甕 47，手捏土器 2），粘土塊 2 点が，周溝の覆土中から出土している。188 は完形で正位の状態で北部のテラス状の平坦部の覆土下層から出土している。190 は北部コーナー部の覆土中層，186･191 は東部，189 は南東コーナー部からバラバラの破片の状態で，192 は南東コーナー部から口縁部が東を向いた横位の状態で覆土中層からそれぞれ出土している。188 以外は，いずれも方台部側から周溝へ転落したものと考えられる。

所見　時期は出土土器から 4 世紀中葉と考えられる。



第 51 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図

第 1 号方形周溝墓出土遺物観察表（第 50・51 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
186	土師器	坩	－	(4.1)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面ヘラ磨き　体部外面ヘラ磨き　内面ヘラナデ	覆土中層	20%　ＰＬ 20
187	土師器	高坏	－	(1.4)	－	長石・石英	浅黄橙	普通	坏部下半外面縦位のヘラ磨き　内面ヘラナデ	覆土中層	10%
188	土師器	小形壺	6.9	9.2	2.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラ磨き　内面ヘラナデ　赤彩	覆土下層	100%　ＰＬ 20
189	土師器	壺	[16.4]	(4.7)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	複合口縁　外面横位のヘラ磨き→斜位のヘラ磨き　内面横位のヘラ磨き	覆土中層	10%
190	土師器	壺	[17.8]	(5.6)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	複合口縁　外・内面ヘラ磨き　赤彩	覆土中層	15%
191	土師器	壺	[19.0]	(5.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	複合口縁　外・内面ヘラ磨き　赤彩	覆土中層	10%
192	土師器	壺	17.7	36.2	[8.3]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	複合口縁　口縁部外・内面ヘラ磨き　頸部外面ヘラ磨き　内面指頭によるナデ　体部外面ヘラ磨き　内面ヘラナデ　底部焼成後穿孔	覆土中層	90%　ＰＬ 21
193	土師器	壺	－	(2.0)	8.6	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部下端ヘラ磨き　底部外面ヘラナデ　内面ヘラ磨き　底部焼成後穿孔	覆土中層	10%

(3) 溝跡

第３号溝跡（第 52・53 図　PL12）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２e5 ～Ｃ２f6 区，標高 21 mほどの台地縁辺部に位置している。

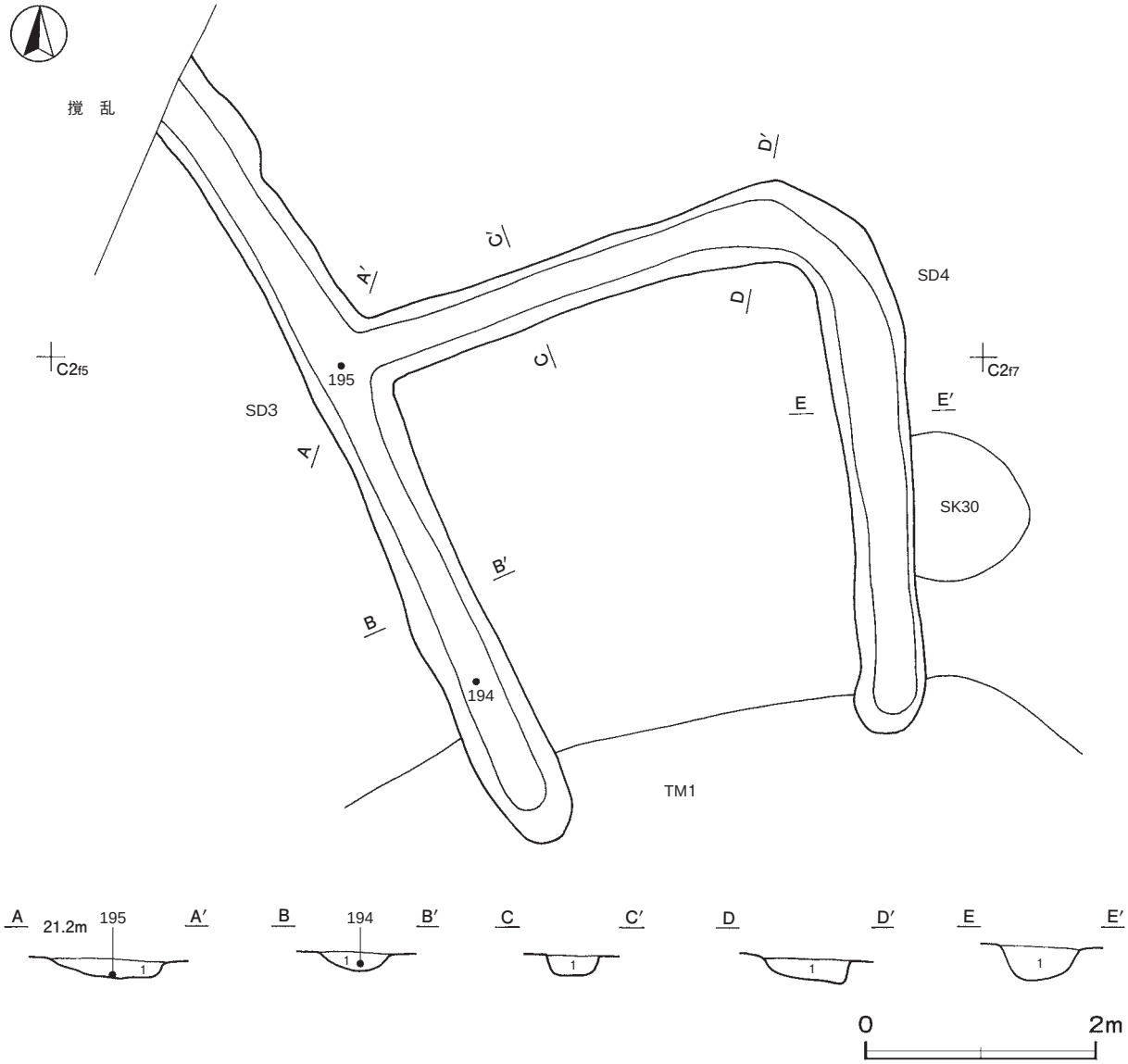
重複関係　第１号方形周溝墓，第４号溝に接続している。

規模と形状　Ｃ２e5 区から南方向（Ｎ－ 27°－Ｗ）に延び，第１号方形周溝墓の周溝に合流している。北部は調査区域外北側に延びているため，確認できた長さは 7.20 mで，上幅 0.50 ～ 0.70 m，下幅 0.22 ～ 0.42 mである。深さは 16 ～ 23cmで北部の斜面部に向かって７cmほど深くなっている。断面形は浅いＵ字状で，底面はほぼ平坦である。

覆土　単一層である。ロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

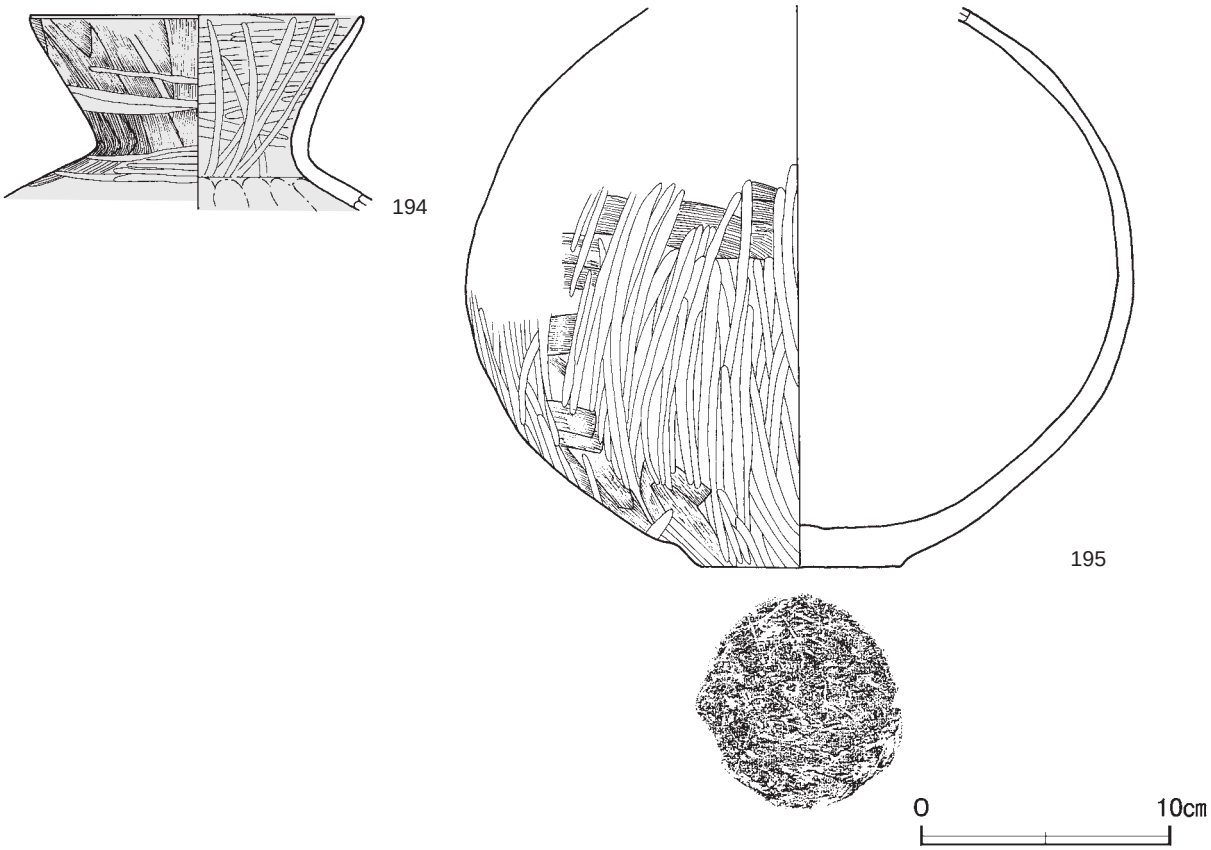
１　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量



第 52 図　第３・４号溝跡実測図

遺物出土状況　土師器片 10 点（壺）が覆土中から出土している。194 は口縁部の破片が正位の状態で覆土下層から出土している。また，195 は第４号溝と合流地点の覆土下層から散在して出土している破片が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から４世紀中葉と考えられる。第１号方形周溝墓と同時期であることから，周溝の排水施設あるいは，葬送儀礼に伴う付属施設の可能性があるが詳細は不明である。



第 53 図　第３号溝跡出土遺物実測図

第３号溝跡出土遺物観察表（第 53 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
194	土師器	壺	13.1	(7.8)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部～頸部外面縦位の刷毛目→ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　頸部内面指頭によるナデ　赤彩	覆土下層	30%　ＰＬ 21
195	土師器	壺	－	(22.3)	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	外面刷毛目→ヘラ磨き　内面ヘラナデ　底部ヘラナデ	覆土下層	50%　ＰＬ 21

第４号溝跡（第 52 図　PL12）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２e5 ～Ｃ２f6 区，標高 22 ｍほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係　第１号方形周溝墓，第３号溝に接続している。第 30 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　第１号方形周溝墓の周溝北壁から北方向（Ｎ－８°－Ｗ）に直線状に延び，逆Ｌ字状に屈曲し，西方向（Ｎ－ 108°－Ｗ）に直線状に延びＣ２f5 区で第３号溝と合流している。長さは 8.40 ｍで，上幅 0.54 ～ 0.70 ｍ，下幅 0.22 ～ 0.45 ｍである。深さは 16 ～ 26㎝で，北部から南西部に向かって 10㎝ほど深くなっている。断面形は浅いＵ字状で，底面はほぼ平坦である。

覆土　単一層である。ロームブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック多量

所見　時期は，遺物の出土はないが，形状から第３号溝と一連の遺構と考えられることから，４世紀中葉と考えられる。

表６　古墳時代溝跡一覧表

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考
				長さ(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)					
3	C2e5～C2f6	N－27°－W	直線状	7.20	0.50～0.70	0.22～0.42	16～23	浅い U字状	ほぼ 直立	人為	土師器	TM1・SD4
4	C2e5～C2f6	N－8°－W N－108°－W	逆L字状	8.40	0.54～0.70	0.22～0.45	16～26	浅い U字状	ほぼ 直立	人為	－	TM1・SD3 SK30→本跡

３　平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，竪穴建物跡２棟を確認した。調査区域内のほぼ中央部と南部に散在して分布している。以下，遺構及び遺物について記述する。

竪穴建物跡

第３号竪穴建物跡（第54図　PL10）

位置　調査Ａ区南部のＤ２d0区，標高23ｍほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸2.72ｍ，短軸2.60ｍの方形で，主軸方向はＮ－16°－Ｗである。壁は高さ32～44cmで，ほぼ直立している。

床　平坦である。北西コーナー部と，南東コーナー部を除き踏み固められている。

竈　北西壁中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで124cmで，燃焼部幅は66cmである。燃焼部は床面を12cmほど掘りくぼめ，ロームブロック，焼土ブロックを含んだ第１・２層を埋め戻している。煙道部は，壁外に20cmほど掘り込まれ火床部からやや外傾している。袖部は，地山を削りだして基部とし，ロームブロック，焼土ブロックを含んだ暗褐色土を積み上げて構築されている。袖の内壁は火熱を受けて赤変しているが，火床面は赤変していないことや灰層がみられないことから，火床部を清掃した後に，第１・２層は，埋め戻したものと考えられる。

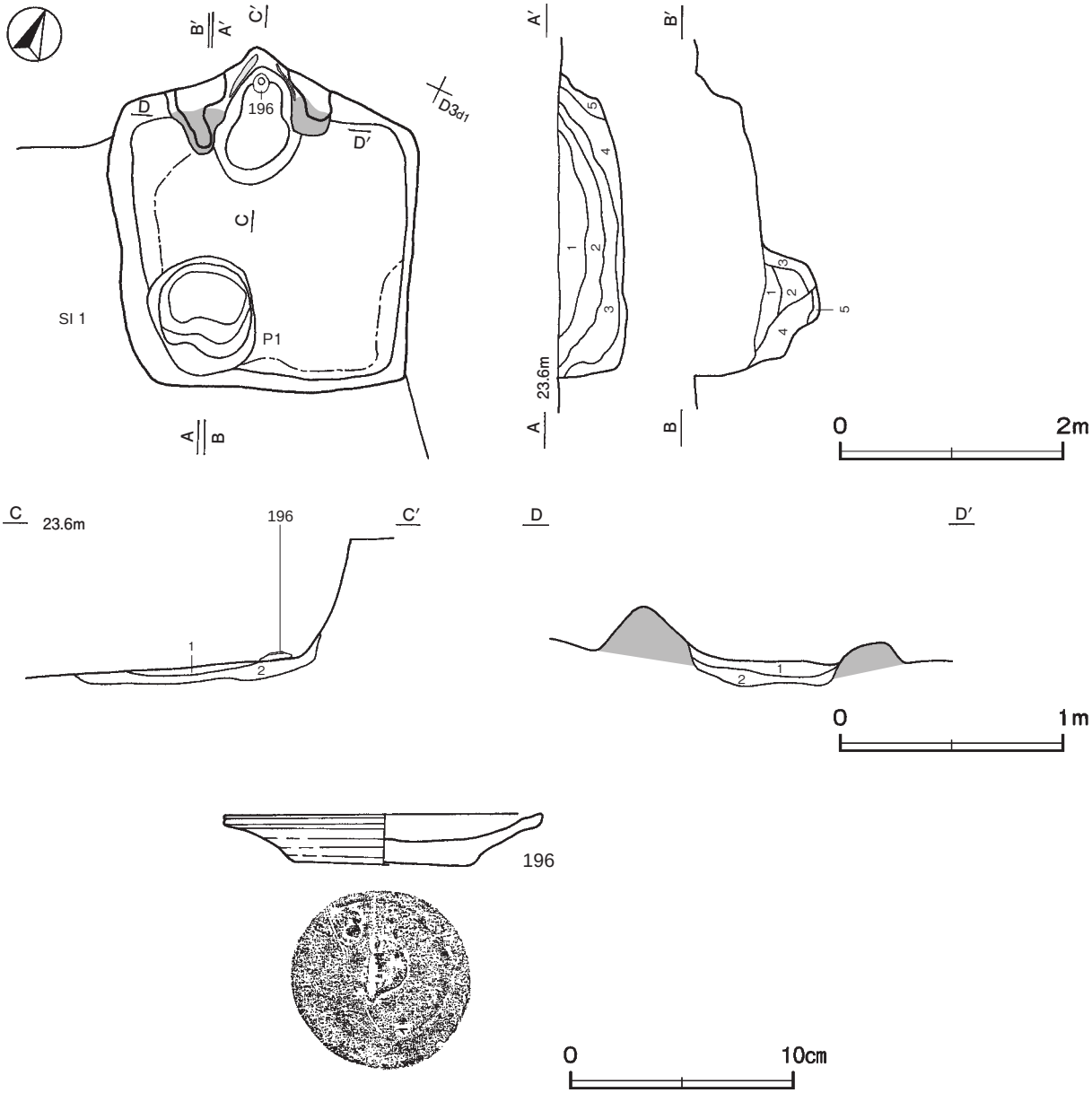
竈土層解説
1　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
2　褐　色　ロームブロック･焼土ブロック中量，炭化粒子微量

ピット　Ｐ１は長径102cm，短径92cmの楕円形である。深さ52cmで，配置状況や形状から貯蔵を目的としたピットと考えられる。底面ほぼ平坦である。

ピット土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　５層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック多量
5　明　褐　色　ロームブロック多量



第 54 図　第３号竪穴建物跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片 18 点（坏２，甕 16），須恵器１点（皿）が出土している。196 は竈の火床部覆土上面に，逆位で置かれたような状態で出土している。また，覆土中から出土している土師器片は細片のため，図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から９世紀中葉と考えられる。

第３号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 54 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
196	須恵器	皿	14.0	2.4	7.8	長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り	火床部覆土上面	100% 新治窯外・内面の一部に煤付着 ＰＬ 21

第 11 号竪穴建物跡（第 55・56 図　PL10）

位置　調査 A 区中央部のＣ２e7 区，標高 22 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第４・７・12・16 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸 2.96 m，短軸 2.84m の方形で，主軸方向はＮ－３°－Ｗである。壁は高さ 66cmで，ほぼ直立している。

床　平坦である。竈付近から中央部にかけて踏み固められている。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は焚口から煙道部まで 78cmで，燃焼部幅は 38cmである。燃焼部は床面を５cmほど掘りくぼめている。煙道部は，壁外に 10cmほど掘り込まれ火床部からやや外傾している。袖部は，地山の上に第２層から第６層を積み上げて構築されている。袖の内壁は第３号竪穴建物跡同様，火熱を受けて赤変しているが，火床面は赤変していないことから，火床面を清掃した後に，第１層を埋め戻したものと考えられる。また，川原石を利用した支脚が煙道部際の高い位置の第１層に突き刺したかのようにたてられている。

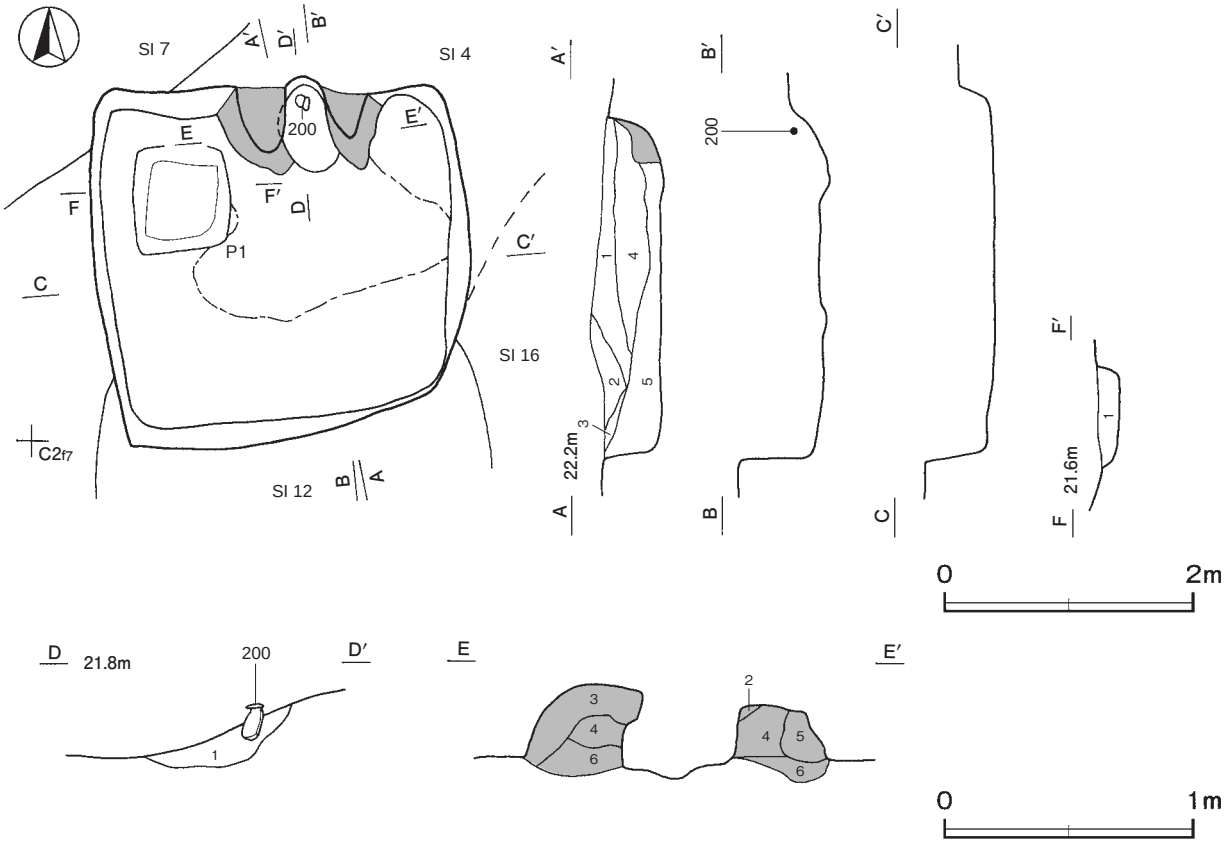
竈土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ロームブロック・炭化粒子多量，焼土ブロック中量
3　褐　　色　ロームブロック多量，黄褐色山砂中量
4　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　明　褐　色　ロームブロック多量，黄褐色山砂少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック多量，黄褐色山砂少量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　Ｐ１は長軸 84cm，短軸 78cmの方形である。深さ 18cmで，底面ほぼ平坦である。配置状況や形状から貯蔵穴のようにみえるが，掘り込みが浅いため，不明である。

ピット土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量



第 55 図　第 11 号竪穴建物跡実測図

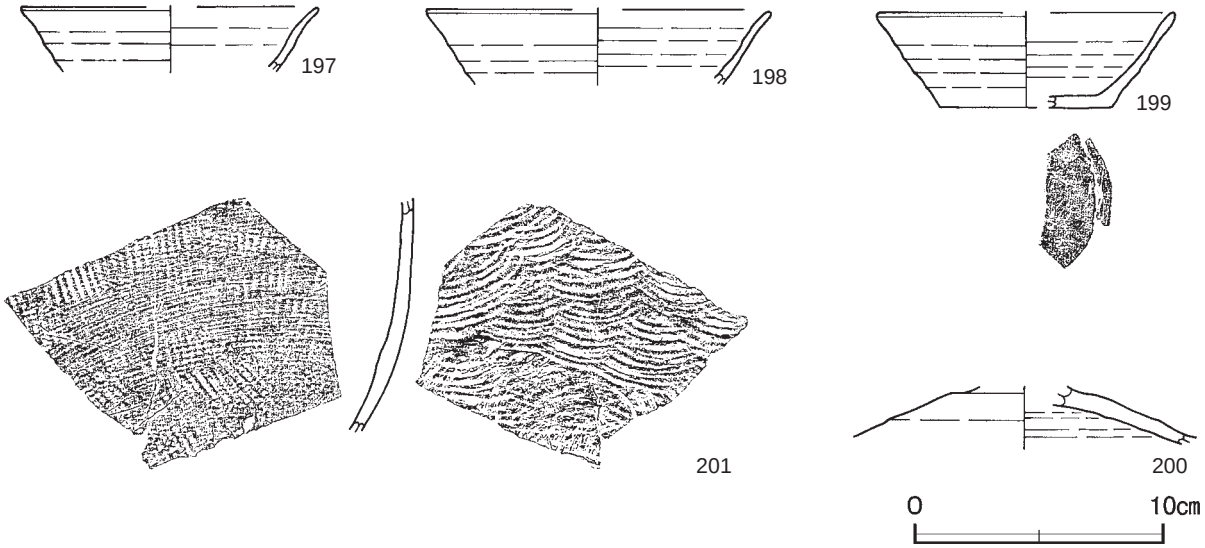
覆土　５層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれ，不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　明　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片 12 点（坏３，甕９），須恵器片 15 点（坏 11，蓋３，甕１）自然礫１点（支脚に使用）が，出土している。200 は，支脚の上に正位の状態で，置かれた状態で出土している。197 ～ 199 は南東部の覆土下層，201 は覆土中からそれぞれ出土している。そのほかの土器片は細片のため，図示できなかった。

所見　時期は，出土土器から９世紀前葉と考えられる。また，竈の支脚が，煙道部をふさぐように立てられていることから，竈祭祀に関係する行為の可能性が考えられる。



第 56 図　第 11 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 11 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 56 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
197	須恵器	坏	［11.8］	(2.6)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部ロクロナデ	覆土下層	５％　新治窯 内面煤付着
198	須恵器	坏	［13.6］	(3.0)	－	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部ロクロナデ	覆土下層	20%　新治窯
199	須恵器	坏	［11.6］	3.8	［6.9］	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土下層	20%　新治窯 ＰＬ 22
200	須恵器	蓋	－	(2.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面回転ヘラ削り　内面ロクロナデ	竈内	15%　新治窯 内面煤付着
201	須恵器	甕	－	(9.2)	－	長石・石英	黄灰	普通	外面格子目の叩き→カキ目　内面同心円状の当て具痕	覆土中	５％　新治窯 ＰＬ 22

表７　平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位 置	主軸方向	平面形	規　模	壁 高	床面	壁溝	内　部　施　設					覆土	主な出土遺物	時　期	備　考
				長軸×短軸（m）	(cm)			主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
3	D2d0	N－16°－W	方　形	2.72 × 2.60	32 ～ 44	平坦	－	－	－	－	北西壁	1	人為	土師器，須恵器	９Ｃ中葉	ＳＩ１→本跡
11	C2e7	N－３°－W	方　形	2.96 × 2.84	66	平坦	－	－	－	1	北壁	－	人為	土師器，須恵器， 自然礫（支脚）	９Ｃ前葉	ＳＩ４→ＳＩ16 →ＳＩ12→本跡 ＳＩ７→本跡

４　その他の遺構と遺物

今回の調査で，時期や性格が明確でない溝跡５条を確認した。その中で，特徴のある３条については文章で記述し，その他は一覧表で掲載する。また，遺構に伴わない遺物については，実測図と観察表を掲載する。

(1) 溝跡

第５・７号溝跡（第 57 図，付図　PL15）

位置　調査Ａ区中央部のＣ２f9 ～Ｃ２h9 区，標高 23 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係　第５号溝は，第８号土坑を掘り込んでいる。第７号溝跡は第２号溝に掘り込まれている。

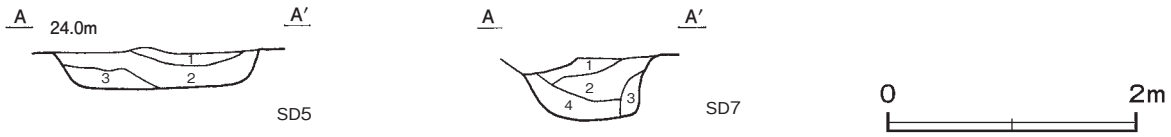
規模と形状　第５溝跡は，Ｃ２f9 区から南西方向（Ｎ－ 155°－Ｗ）に直線状に延びＣ２g9 区で途切れている。北東方向は調査区域外の北東側へ延びるため，確認できた長さは 3.22 mで，上幅 0.70 ～ 1.44m，下幅 0.46 ～ 1.10m である。深さは 21 ～ 25cmで北部から南西部に向かって４cmほど深くなっている。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。第７号溝跡は，Ｃ２h9 区から北西方向に（Ｎ－ 56°－Ｗ）に直線状に延び 1.30m ほどで途切れている。南東方向は調査区域外の南東側へ延びている。上幅 0.76 ～ 0.94 m，下幅 0.40 ～ 0.50 mで深さは 41 ～ 43cm，南東部から北西部に向かって２cmほど深くなっている。断面形は逆台形で，底面はほぼ平坦である。

覆土　４層に分層できる。ロームブロックが多量に含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説（第５・７号溝跡共通）

1	黒褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量	
2	褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量	
3	暗褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量	
4	黒褐色	ロームブロック多量	

所見　時期は，出土遺物がないため不明であるが，第７号溝跡が第２号溝に掘り込まれていることから，第２号溝より古い。性格は，調査区域外に延びているため不明な部分もあるが，両溝跡は，覆土の状況が同一で，形状や方形周溝墓が近接する位置に立地することから，方形周溝墓あるいは，古墳の周溝の可能性がある。



第 57 図　第５・７号溝跡実測図

第６号溝跡（第 58 図，付図　PL15）

位置　調査Ａ区北部のＢ２b4 ～Ｂ２c5 区，標高 17 ～ 19 mほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状　Ｂ２b5 区から南西方向（Ｎ－ 155°－Ｗ）に直線状に延びている。北東部に進むに従い急斜面になることから，安全のため，長さは 4.60 mしか調査できなかった。上幅 2.20 ～ 4.30m，下幅 0.40 ～ 0.80 mである。深さは 90 ～ 208cmで北東部から南西部に向かって 120cmほど深くなっている。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で西側の斜面に沿って急激に下がっている。

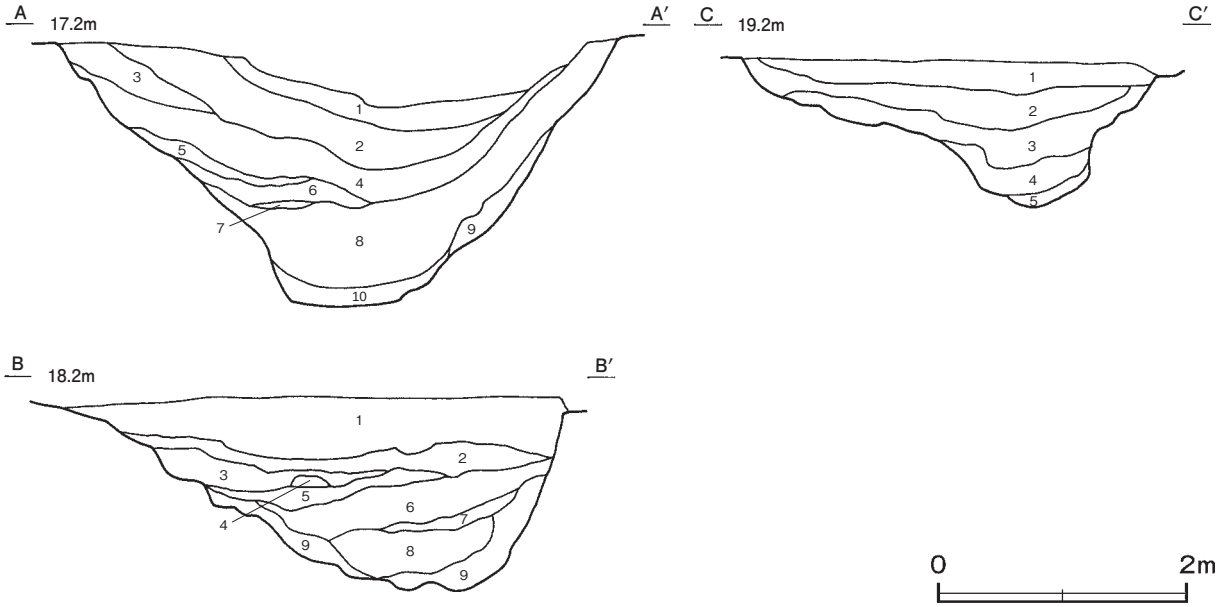
覆土　10 層に分層できる。ロームブロックが多く含まれ，時代の異なる遺物が混在して出土していることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック多量，炭化物少量，焼土粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4	明褐灰色	ロームブロック・灰白色粘土ブロック多量
5	黒褐色	ロームブロック多量，炭化物少量，焼土粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック多量，炭化物・焼土粒子微量
7	褐色	ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック中量，炭化物・焼土粒子微量
9	褐色	灰白色粘土ブロック多量，ローム粒子･焼土粒子･炭化粒子微量
10	明褐灰色	灰白色粘土ロームブロック多量，ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片 31 点（深鉢），土師器片 31 点（坏６，甕 25），須恵器片１点（坏），陶器片９点（碗８，擂鉢１），磁器片 10 点（碗），土製品７点（埴輪），瓦片３点（平瓦）が覆土中から出土している。遺構の形状や覆土の状況から，これらは，埋め戻しの際の混入遺物で当遺構には伴わない遺物と考えられ，遺構外出土遺物の頁で主なものを掲載した。

所見　伴う遺物がないために，詳細な時期は不明であるが，形状から中世城郭に伴う竪堀と考えられ，宮田館に関係する防御施設の可能性がある。陶磁器の出土から，18 世紀前半には廃絶したものと考えられる。



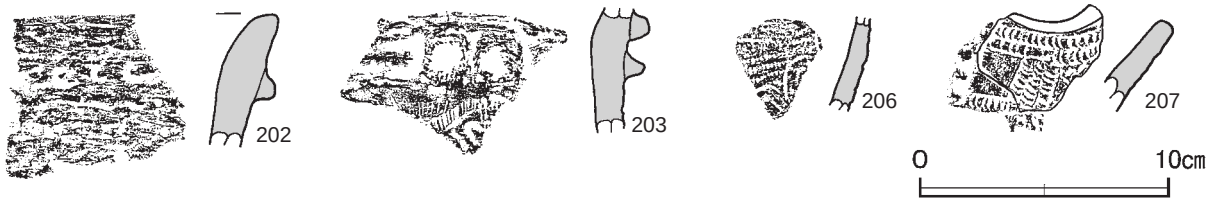
第 58 図　第６号溝跡実測図

表８　その他の溝跡一覧表

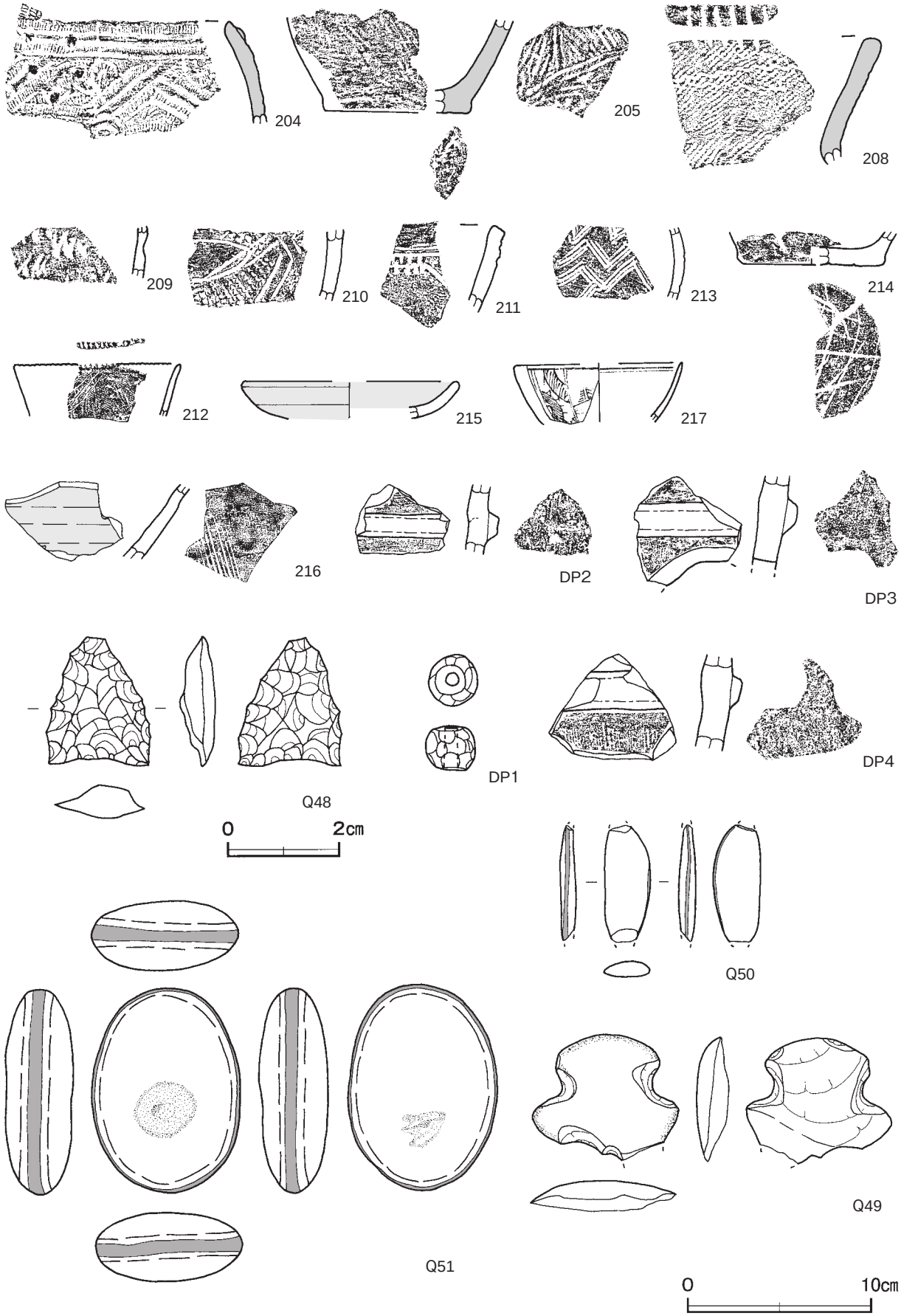
番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考
				長さ(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)					
1	C2j8～C2i0	N－108°－W	直線状	(8.06)	0.54～0.70	0.22～0.58	7～26	浅いU字状	外傾	人為	－	SI 6→本跡
2	C2h8～C2h9	N－108°－W	直線状	(7.10)	0.68～0.70	0.22～0.52	10～28	浅いU字状	外傾	人為	－	TM 1，SD 7 →本跡
5	C2f9～C2g9	N－155°－W	やや曲線状	(3.22)	0.70～1.44	0.46～1.10	21～25	逆台形	外傾	人為	－	SK 8→本跡
6	B2b4～B2c5	N－155°－W	直線状	(4.60)	2.20～4.30	0.40～0.80	90～208	逆台形	外傾	人為	縄文土器，土師器，須恵器，陶器，磁器，土製品	－
7	C2h9	N－56°－W	直線状	(1.30)	0.76～0.94	0.40～0.50	41～43	逆台形	外傾	人為	－	本跡→SD 2

(2)　遺構外出土遺物（第 59 ～ 61 図）

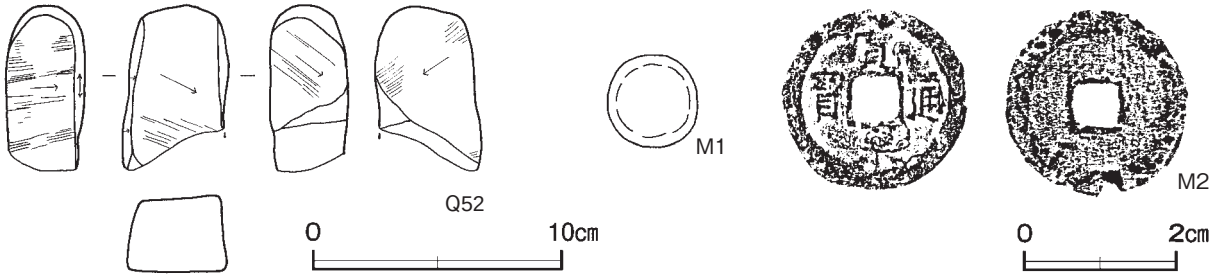
今回の調査で，出土した遺構に伴わない遺物について，実測図と観察表を掲載する。



第 59 図　遺構外出土遺物実測図（１）



第 60 図　遺構外出土遺物実測図（2）



第 61 図　遺構外出土遺物実測図（３）

遺構外出土遺物観察表（第 59 ～ 61 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
202	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・雲母・繊維	橙	普通	口縁部に隆帯文　半截竹管による爪形文	表土	遠下式 ＰＬ 22
203	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子・繊維	橙	普通	ボタン状貼付文　ループ文→梯子状沈線文	表土	花積下層式 ＰＬ 22
204	縄文土器	深鉢	－	(5.5)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	梯子状沈線文→コンパス文→瘤状貼付文	Ｓ１11	関山Ｉ式
205	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	[7.8]	長石・石英・雲母・繊維	外橙／内黒	普通	外・内面条痕文	表土	5% 早期後半
206	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・雲母・繊維	橙	普通	単節縄文ＬＲ→コンパス文	表土	前期前半
207	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	長石・石英・繊維	にぶい褐	普通	注口部の破片　半截竹管による爪形文→瘤状貼付文	Ｓ１11	関山Ｉ式
208	縄文土器	深鉢	－	(6.9)	－	長石・石英・赤色粒子・繊維	橙	普通	口唇部山形の刻目文　単節縄文ＬＲ→結節縄文	表土	黒浜式 ＰＬ 22
209	縄文土器	深鉢	－	(2.8)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	外面波状貝殻文　内面ナデ	表土	浮島式
210	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	外面沈線間に貝殻復縁文を充填　内面丁寧な磨き	表土	興津Ⅱ式
211	縄文土器	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	半截竹管による沈線文→刺突文	表土	阿玉台式 ＰＬ 22
212	弥生土器	壺	[9.0]	(2.8)	－	長石・石英	褐灰	普通	口唇部連続刺突文　口縁部単節磨消細縄文ＲＬ→櫛歯状工具による沈線文	表土	10% 弥生中期後半
213	弥生土器	壺	－	(3.8)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	３本の櫛歯原体による連続山形沈線文　内面ヘラナデ	表土	東中根式
214	弥生土器	壺	－	(1.9)	[7.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面撚糸文　内面ヘラナデ　底部木葉痕	ＳＩ 13	10% 弥生後期

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
215	陶器	皿	[11.4]	(2.0)	－	精緻・褐・灰白	外・内面貫入	白濁釉	志野	表土	10% 17Ｃ後半 ＰＬ 22
216	陶器	擂鉢	－	(4.2)	－	精緻（石英）・にぶい赤褐	12 本の擂目ヵ	鉄釉	瀬戸・美濃	ＳＤ６	5% 18Ｃ前半 ＰＬ 22
217	磁器	染付碗	[9.0]	(3.2)	－	緻密・灰白	筆描き　口縁部外面圏線文　内面二重圏線文　体部区画文内に唐草文	透明釉	肥前	ＳＤ６	10% 大橋編年Ⅴ期18Ｃ前半 ＰＬ 22

番号	器　種	長さ・径	幅・孔径	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 1	土玉	2.7	0.7	2.3	17.63	長石・石英・雲母	にぶい橙	指頭によるナデ　一方向からの穿孔	表土	ＰＬ 22
DP 2	円筒埴輪	(3.8)	－	－	(27.74)	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	台形状の凸帯　外面横位の刷毛目　内面ヘラナデ	ＳＤ６	ＰＬ 22
DP 3	円筒埴輪	(5.0)	－	－	(52.18)	長石・石英・雲母	橙	台形状の凸帯　透かし穴円形ヵ　内面ヘラナデ	ＳＤ６	－
DP 4	円筒埴輪	(5.2)	－	－	(68.68)	長石・石英・雲母	橙	台形状の凸帯　外面縦位の刷毛目　内面ヘラナデ	ＳＤ６	ＰＬ 22

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 48	鏃	2.3	1.9	0.6	2.05	砂岩	平基無茎鏃　両面押圧剥離	ＴＭ１	－
Q 49	打製石斧	(6.8)	6.9	1.6	(86.8)	砂岩	一部欠損　分銅形　両面調整	表土	－
Q 50	磨石	(8.3)	2.5	0.9	(23.1)	緑色岩	側縁部使用痕	表土	－
Q 51	凹石	11.0	8.0	3.7	488.1	安山岩	凹部２か所　磨石兼用側縁部使用痕	表土	－
Q 52	砥石	(6.6)	4.2	3.2	(124.7)	砂岩	砥面４面	ＴＰ２	－

番号	器種・銭名	径	幅・孔経	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Ｍ１	鉛玉	1.2	1.2	－	11.18	鉛	火縄銃の玉　鋳造（鉛を鋳皿という鉄製で木の柄のついた玉杓子状の容器で溶かし，玉型という鋏状の鋳型に入れて作る。）	表土	ＰＬ 22
Ｍ２	寛永通寶	2.4	0.6	0.2	3.31	銅	背面無文	表土	３期初鋳年（1697） ＰＬ 22

第４節 ま　　と　　め

1　はじめに

今回の調査で，殿畠遺跡では，縄文時代，古墳時代，平安時代と断続的に土地利用されてきたことが明らかとなった。縄文時代では竪穴建物跡 14 棟，陥し穴４基，炉穴１基，土坑 19 基，古墳時代では竪穴建物跡２棟，方形周溝墓１基，溝跡２条，平安時代では竪穴建物跡２棟を確認した。ここでは，各時代の様相について概観し，遺構及び遺物について所見を述べ，若干の考察をする。

2　縄文時代

今回の調査区は，台地の西側の縁辺部にあたる。当時代の遺構は，北部と南部の緩斜面部を除き，台地部のほぼ全域に分布している。

遺構は，竪穴建物跡が，台地の縁辺部に沿って分布し，陥し穴や土坑は，それらの竪穴建物跡に沿って，重複して分布している。出土遺物は，早期後半（貝殻条痕文期），前期初頭（遠下式期），前期前半（花積下層式期，関山式期），前期中葉（黒浜式期），前期後半（浮島式期，興津式期），中期前半（五領ヶ台式期・阿玉台Ⅰ式期）の縄文土器（深鉢），石器（掻器・鏃・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石）などが出土している。早期後半の縄文土器は，遺構に伴わないものである。当時代では，前期初頭から中期前半にかけて集落が営まれていたことがわかる。

⑴　竪穴建物跡について（第４～29 図　付図）

竪穴建物跡は，台地の縁辺部に沿って確認できた。時期は，出土土器の文様の特徴から前期前半（関山式期），前期中葉（黒浜式期），前期後半（浮島式期）の３時期に分けられる。前期前半（関山式期）は，第１・２・４・７・８・９・10・12・16・18 号竪穴建物跡，前期中葉（黒浜式期）は第５号竪穴建物跡，前期後半（浮島式期）は，第 17 号竪穴建物跡が該当する。ほかに，第 14・15 号竪穴建物跡が遺構の形状から縄文時代と考えられるが，出土遺物がないため，詳細な時期は不明であるが，前期前半（関山式期）のものが圧倒的に多いことが判明している。さらに関山式期のものは，瘤状貼付文が特徴の関山Ⅰ式の一時期に収まる。

次に平面形状をみていくと，関山Ⅰ式期では，不整長方形，長方形，円形，楕円形の４タイプに分けられる。不整長方形のものは，第 18 号竪穴建物跡，長方形のものは，第１・７・８・９・10 号竪穴建物跡，円形のものは，第２号竪穴建物跡，楕円形のものは，第４・16 号竪穴建物跡がそれぞれ該当する。

出土土器では，時期差を確認することはできないが，第２号竪穴建物は第８号竪穴建物跡を掘り込み，第７号竪穴建物は第４号竪穴建物跡を，第８号竪穴建物跡は第 18 号竪穴建物跡をそれぞれ掘り込んでいることから，楕円形→不整長方形→長方形→円形の順で新しくなることが考えられる。また，分布状況は，狭長の調査区のため，不明な点が多いが，数の多い長方形のものは，台地の縁辺部を沿うような形で分布していることがわかる。

前期中葉（黒浜式期）では，第５号竪穴建物跡一棟のみで，遺構は，調査区域外に延びるため，不明な点が多いが，平面形は方形ないし長方形である。

前期後半（浮島式期）は，第17号竪穴建物跡は楕円形の１例しかわからないが，関山式期から遡ると，楕円形→不整長方形→長方形→円形→方形・長方形→楕円形と移り変わっており，当遺跡の前期の竪穴建物跡ついては，方形基調と円形基調が繰り返し，変遷していったことが考えられる。

⑵　陥し穴について（第30～35図　付図）

陥し穴は，調査区南部から中央部にかけて，点在して確認できた。出土土器の文様の特徴から，前期前半（関山式期）と前期後半（浮島式期）の２時期に分かれる。前期前半（関山式期）のものは第１・２号陥し穴，前期後半（浮島式期）のものは第３・４号陥し穴が該当する。

関山式期のものは，調査区の南部寄りに２基確認できた。第２号陥し穴は，第８号竪穴建物跡を掘り込んでいるが，出土土器に時期差がないことから，第２号陥し穴の出土土器は，第８号竪穴建物跡の土器が流れ込んだ可能性がある。いずれにしても，第８号竪穴建物跡の廃絶後に掘り込まれた遺構と考えられる。

形状をみていくと，第１号陥し穴は平面形が楕円形で，掘り込みは浅い。底面も楕円形で狭くなる。第２号陥し穴は平面形が楕円形で，壁の途中に段を有し，掘り込みが深い。底部は楕円形で狭くなる。以上のようにタイプの異なる陥し穴であることから，鹿や猪などの獣の種類によって，使い分けて構築されたものと考えられる。

浮島式期のものは，調査区中央部に点在して２基確認できた。第４号陥し穴は，関山式期の第16号竪穴建物跡を掘り込んでいることから，関山式期の集落が廃絶後に陥し穴を掘り込んでいることが考えられる。形状をみていくと，第３号陥し穴は，平面形が楕円形，壁の途中に段を有し，底面が円形で狭くなる。第４号陥し穴は楕円形の筒形で，底面に逆茂木のピットを有する。２基の陥し穴は同時期であるが，形状が異なることから，関山式期のものと同様，鹿や猪等の捕獲に使い分けをしていた可能性がある。

さらに，関山式期，浮島式期ともに，立地的な観点から台地平坦部から，台地縁辺部に追い込むように設置されていたと推測できる。また，浮島式期の陥し穴と竪穴建物跡との関係であるが，位置的に近接していることから，出土土器が細片のため不明な部分があるが，浮島式期の新しい様相を示す口線直下に縦位の条線文と波状貝殻文の土器が出土している陥し穴と第17号竪穴建物跡はほぼ同時期と考えられる。

⑶　炉穴について（第36・37図　付図）

炉穴は，調査区南部の台地緩斜面部から１基確認できた。出土土器は，器壁が厚く，胎土に繊維を含み，口縁部には隆帯を貼付する。口縁部の文様帯は，半截竹管による刺突文の特徴から，前期初頭（遠下式）に比定できる。県内で遠下式土器の出土例は，標識遺跡である日立市遠下遺跡[1]を筆頭に，那珂市森戸遺跡[2]，同市伊達遺跡[3]，茨城町奥谷遺跡[4]，常陸太田市瑞龍古墳群[5]と少なく，県北に集中してみられる。また，「炉穴は早期末葉には衰退して，以降は散発的に確認されるだけである。」[6]とあるように，前期初頭の炉穴は，県内では類例がなく，貴重な資料である。

⑷　土坑について（第38～43図　付図）

土坑は19基確認した。調査区域の北端部と南端部を除き，ほぼ全域に分布している。19基中時期が明確なのは，９基である。出土土器から，前期前半（関山式期），前期中葉（黒浜式期），中期初頭（五領ヶ台式期）に時期区分ができる。前期前半（関山式期）のものは，第15・19・20・29号土坑，前期中葉（黒浜式期）のものは，第５・９号土坑，中期初頭（五領ヶ台式期）のものは第13・14・21号土坑にそれぞ

れ該当する。

以上のように時期別に分布状況をみていくと，前期前半（関山式期）の土坑は，台地の縁辺部に沿うような形で分布している。当期の土坑の性格は，人骨や副葬品などの遺物の出土はないが，形状や覆土状況から墓坑と考えられる。

前期中葉（黒浜式期）の土坑は，同じ等高線上に点在して分布している。関山式期の竪穴建物跡を掘り込んでいることから，関山式期の集落が廃絶後に土地利用をしていることがわかる。同時期の第５号竪穴建物の確認状況から，集落は調査区域外東側の台地平坦部へ拡がるものと考えられる。性格は人骨や副葬品などの遺物の出土はないが，形状や覆土の状況から墓坑と考えられる。

中期初頭（五領ヶ台式期）の土坑は，調査区の南部に集中して分布している。特筆すべきことは，３基の土坑が，トンネル状の横穴で連結していることである。第13・14号土坑の横穴の入り口部分の底面からは，焚火の跡と考えられる炭化材や焼土が出土している。炭化材については自然科学分析（C14年代測定・樹種の同定）を行ったところ，時期が中期頃で，出土土器の時期とほぼ合致している。樹種は，第13号土坑がクリ属，第14号土坑がエノキ属という結果がでている。このことから，食用の植物が周辺に生育していたことがわかる。

次にこの遺構の類例であるが，県内では，同様な類例は現在のところ見られない。県外の管見に触れる類例としては，千葉県柏市の小山台遺跡[7]で，前期の同様な土坑がトンネル状の横穴で連結され，横穴は100ｍ以上にわたって掘り込まれている。焚火の跡や，出入り口とみられるスロープ，貝が多量に捨てられた土坑も確認されているが，性格は不明とされている。当遺跡や小山台遺跡のトンネル状の横穴は，径が１ｍほどで，大人がしゃがんで通れるほどの穴である。横穴の入り口には，焚火の跡があり壁面や天井部に煤が付着していることから，一方の土坑で火を焚いて対する土坑に肉を吊るし，煙でいぶして燻製を作る施設であることが考えられるが，通路のように長く続いているので，詳細が不明のため，資料の増加を待って検討しなければならない。

３　古墳時代

当時代の遺構は，調査区のほぼ中央部に分布している。前期では，方形周溝墓１基，溝２条，後期では，竪穴建物跡２棟が確認できた。出土遺物は，土師器（坏・高坏・坩・鉢・壺・提瓶・甕・手捏土器），須恵器（甕），土製品（土玉・円筒埴輪）である。なお，円筒埴輪に伴う遺構は，調査区域内では確認できなかったが，横位のハケ目がみられることから，調査区域外に５世紀代の古墳が存在する可能性がある。

⑴　竪穴建物跡について（第44～48図　付図）

竪穴建物跡は，台地の平坦部から台地の縁辺部寄りに第６・13号竪穴建物跡２棟が散在して存在している。該当する遺構は，第６・13号竪穴建物跡である。出土土器の特徴から，第６号竪穴建物跡が６世紀前葉，第13号竪穴建物跡が６世紀中葉に比定でき，２時期に分けられる。時期差はあるものの，平面形状は方形で，北壁のほぼ中央部に竈を構築し，主柱穴４か所で，南部の主柱穴間のほぼ中央部に出入り口施設と考えられるピットが１か所付設されていることから，共通した構造をもっている。第６号竪穴建物跡から第13号竪穴建物に建て替えて移り住んだとも考えられるが，詳細は不明である。

遺物の出土状況では，両者ともに，全体にまばらで少量の出土状況から，不要なものだけを廃棄しているような状況である。

また，第６号竪穴建物跡には，西コーナー部の床面に土師器坏のほぼ完形の土器が，正位で置かれたような状態で出土している。これをもって，廃絶時の祭祀と判断するのは短絡的であるが，覆土下層から破砕されてバラバラになった状態で，須恵器の模倣と考えられる酸化炎焼成の提瓶が出土していることから，廃絶時に祭祀が行われた可能性はある。

第13号竪穴建物跡では，竈内から集中して出土しているが，通常の廃棄であり，祭祀を行ったような痕跡はみられなかった。このことから，廃棄時の祭祀は，ある特別な目的や意味があるものと考えられる。他遺跡の類例をみて検討しなければならない。

⑵　方形周溝墓について（第49～51図　付図）

方形周溝墓は，調査区の中央部の台地縁辺部から１基確認できた。出土土器の特徴から４世紀中葉に比定できる。ほぼ中央部には，埋葬施設と考えられる土坑が確認できた。埋葬施設内には，人骨や副葬品等の遺物の出土はみられなかった。

周溝では，北部から南東部にかけて外縁部側にテラス状の段が付設されている。北部から完形の土師器坩が出土しており，祭壇状の性格を持っていると考えられる。

遺物の出土状況は，北部のテラス状の段から出土している土師器坩を除き，そのほかはすべて周溝内の覆土からの出土である。遺物の出土状況を観察すると，底部を打ち欠いた完形の壺が南東部の覆土下層から出土しているが，それ以外の壺や甕はバラバラの破片の状態で出土している。出土状況から方台部側から周溝へ転落したものと考えられる。

方形周溝墓の遺物出土状況については，奥沢哲也氏が瑞龍古墳群[8]において出土状況を分析している。それによると「壺は埋葬後の墓前祭祀で使用され，葬送儀礼に伴って底部の打ち欠きや穿孔，破砕などの変形行為を行い方台部に据え置かれたと考えられる。また，甕類は同様の祭祀後，周溝内に投棄され，破砕されたと考えられる。」と推測している[9]。

当遺跡では，完形の壺がみられるが，バラバラになって出土している壺もみられることから，方台部に据え置かれたものと，祭祀後に破砕して投棄された壺もあることになる。このことから集落や地域による葬送儀礼の違いがあるものと考えられる。

また，特筆すべきことは，当遺構から出土している完形の壺は体部の肩が張っていることである。関東でみられる球形の体部に対し，「北陸系」の土器に似た体部の特徴をもっている[10]。

墓域は方形周溝墓の東側に隣接して，調査区域外の東側に延びる周溝状の溝が確認できることから，台地の中央部にむかって拡がる可能性がある。

⑶　溝跡について（第52・53図　付図）

当時代の該当する遺構は，第３・４号溝跡である。調査区中央部の第１号方形周溝墓に隣接している。時期は，出土土器の特徴から４世紀中葉に比定できる。隣接する方形周溝墓と，同時期であることから，付随する施設と考えられる。遺構の性格は，形状から排水施設か墓前祭祀等の葬送儀礼に関係する施設を区画する溝の可能性がある。台形状に区画された部分は，古墳の「造り出し」のような壇状の施設の可能性がある[11]。溝から出土している土師器壺は赤彩を施されているものがみられ，祭祀に使われて，投棄されたものと考えられる。

4　平安時代

当時代の遺構は，竪穴建物跡２棟が調査区中央部と南部で確認できた。両者は台地の同一等高線上にあり，間隔は 35m ほどの距離がある。

竪穴建物跡について（第 54 ～ 56 図　付図）

該当する遺構は，第３・11 号竪穴建物跡である。時期は，出土土器の特徴から，第３号竪穴建物跡が９世紀中葉，第 11 号竪穴建物跡は９世紀前葉である。時期差は若干あるものの，両遺構の規模はほぼ同一である。調査区が狭長なため，集落の全容はつかめないが，平川南氏の研究によると，「同一時期の土器を出土する住居群のなかには，形態・規模・竈の構造・主軸方位など酷似する一対の住居がしばしば認められるが，住居は二棟一組のあり方と呼び，それを集落の中から抽出すると，その距離はおおむね 20m 前後であり，たいていの場合は 15 ～ 30m におさまっている。」と論じられている[12]。当遺跡も 35m 間隔であることから，ほぼ合致している。

また，両者ともに，竈は袖部の内壁は赤変しており，使用痕がある。火床面が赤変しておらず，灰層も確認できないことから，火床部を清掃の後，埋め戻しているものと考えられる。第３号竪穴建物跡では，埋戻し後に，火床部の覆土上面に須恵器皿の完形品を逆位に伏せた状態で置かれている。第 11 号竪穴建物跡では，天井部を撤去し，竈の火床部から袖部の高さまで埋戻し，煙道部付近に石製の支脚を刺し込み，その上には須恵器蓋の破片が正位の状態で載せられた状態で出土している。

この竈廃絶時のプロセスの研究については，堤隆氏の研究[13]がある。それによると１段階の竈解体では，両遺構共に袖部が残っていることから，竈天井部の解体，さらに，支脚の解体，２段階の構築材の処置では遺構外に廃棄，３段階の祭祀行為では，第３号竪穴建物跡が土器・礫・土による封鎖，完形土器の据置き，第 11 号竪穴建物跡が土器・礫・土による封鎖，支脚の土器による被覆があてはまる。堤氏は「竈祭祀を総体的に位置づけるなら，『解体』あるいは『封鎖』こそその本質であり，それが竈神を送り出す意味をもった行為であることが察せられよう。」と述べられている。

以上のように，第３・11 号竪穴建物跡の廃絶に伴う行為は，解体して，それぞれ使用した部分を封じ込める行為と考えられることから，竈廃絶に伴う祭祀の可能性がある。

5　おわりに

今回の調査区は，遺跡西部の台地縁辺部にあたる。狭長な調査区域であったが，縄文時代では，前期初頭から中期前半の集落跡と断続的に土地利用されていたことが明らかとなった。

特筆すべきことは，当地域では，検出例の少ない縄文前期前半（関山式期）の竪穴建物跡がまとまって確認できたことである。また，古墳時代前期では，台地の縁辺部に方形周溝墓が１基確認できた。園部川を挟んで対岸の石岡市弥陀ノ台遺跡[14]では，前期の竪穴建物跡７棟が確認され，出土土器から第１号方形周溝墓とほぼ同時期であることから，集落と墓域の関連性が考えられる。さらに，第１号方形周溝墓は，県内では類例のない排水溝あるいは祭壇状の張り出し部を区画する溝を付随する特異な形状や，出土土器の特徴からも弥生土器から継承された装飾がなくなる段階の土師器であることから，関東の古墳出現期である４世紀中葉以降の方形周溝墓の系譜を引きながら古墳に移行する過度期の遺構ではないかと考えられる。

当調査 A 区内には，城郭に関する小字名「権現平」から，宮田館の城域と推測されている[15]。このことから，宮田館の関連する施設を念頭に調査を行ったが，台地の平坦部からは，遺構は確認できなかった。しかし，

遺構外から火縄銃の玉が出土しているのと，出土遺物がないため，時期は不明であるが，北部の台地斜面部から竪堀が１条確認できたことから，中世城郭の一部の可能性はある。

調査Ｂ区は，小字名が，「天神山」と呼ばれ，調査区域外の北東側には神社が建っている。現況では，南北と西側には，谷が入り自然地形を利用した中世城郭の曲輪状の形をしている。地元古老の話では，今から 20 年前に調査区域外の北東側のグランドゴルフ整備に伴い，当調査区内も整地したことが判明した。隣接する神社は，以前は，高い山の上に有ったという。宮田館の施設を想定して調査を行ったが，調査の結果，盛土整地層は現代と判明し，城郭に伴う遺構は確認できなかった。

註

１）川崎志郎・佐藤政則・大平達雄・鈴木裕芳・島崎和夫 『日立市遠下遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会　1975 年３月

２）那珂町史編さん委員会 『那珂町史　自然環境・原始古代編』 1988 年３月

３）註２文献に同じ

４）茨城県史編さん第一部会原始古代専門委員会 『茨城県史料　考古資料編　先土器・縄文時代』 茨城県　1979 年３月

５）奥沢哲也 「瑞龍古墳群　県立常陸太田特別支援学校施設整備事業地内埋蔵文化財調査報告」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第 415 集　2016 年３月

６）戸沢充則『縄文時代研究辞典』東京堂出版　1994 年９月

７）財団法人千葉県教育振興財団 『房総の文化財』 VOL.47　2009 年３月

８）註５文献に同じ

９）奥沢哲也 「瑞龍古墳群の方形周溝墓における遺物出土状況の検討」『研究ノート』第 13 号　公益財団法人茨城県教育財団　2016 年６月

10　ａ石川県金沢市戸水 C11 号墳（前方後方墳）から出土している中葉の二重口縁壺に器形が似ている。鈴木三男･栃木英道･大西顕 『金沢市戸水Ｃ遺跡・戸水Ｃ古墳群（第９・10 次)』財団法人石川県埋蔵文化財センター　2000 年２月

ｂ堀大介著 「第１節　墓出土祭式土器の検討」『地域政権の考古学的研究－古墳成立期の北陸を舞台にして－』 雄山閣　2009 年５月

11）渕ノ上隆介 「古墳における造り出し周辺遺物群の様相－配置と組成を中心に－」『考古学研究』第 52 巻第３号　通巻 207 号　考古学研究会　2005 年 12 月

12）平川南 「２　東国の村落」『日本村落史講座２　景観Ⅰ原始・古代・中世』雄山閣　1990 年８月

13）堤隆 「竈の廃棄のプロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』 第７号　山梨県考古学協会　1995 年５月

14）小川和博・大渕淳志・大渕由紀子ほか 『石岡市弥陀ノ台遺跡－小美玉市道栗又四ヶ線道路改良工事に伴う発掘調査－』 小美玉市・石岡市教育委員会・有限会社日考研茨城　2014 年８月

15）田村雅樹 「宮田館跡　主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 374 集　2013 年３月

付　　章

小美玉市殿畠遺跡出土遺物の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　はじめに

小美玉市宮田に所在する殿畠遺跡は，沢目川左岸の台地縁辺部に立地する。今回の発掘調査により，縄文時代の竪穴建物跡・陥し穴・土坑，古墳時代の竪穴建物跡・方形周溝墓，平安時代の竪穴建物跡，室町時代の溝跡などの遺構が検出されている。

今回の分析調査では，土坑から出土した炭化材を対象として，年代確認のために放射性炭素年代測定をおこなうとともに，木材利用を検討するために樹種同定を実施する。

2　試料

試料は，SK-13 と SK-14 から出土した炭化材 2 点である。SK-13 の炭化材は，同一試料名で 2 点（試料名：№6- 炭 1，2）あるうち，炭 1 を用いる。多数の破片が認められる中から，一番大きい破片を抽出した。この炭化材は分割状で 5 年分の年輪が認められ，樹皮は残っていない。また SK-14 の炭化材（試料名：炭化材 14.12.04）は，柾目板状の破片で，3 年分の年輪が認められ，樹皮は残っていない。それぞれ，半分に分割して，年代測定試料および樹種同定試料とした。

3　分析方法

⑴　放射性炭素年代測定

試料中の土壌や根などをメスやピンセットを用いて取り除いた後，HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去，NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去，HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。

測定機器は，３MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に 13C/12C の測定も行うため，この値を用いて δ 13C を算出する。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また，測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBR0.（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは，大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し，過去の宇

宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動, 及び半減期の違い(14Cの半減期5,730 ± 40年)を較正することである。暦年較正は，CALIB 7.1.0. のマニュアルにしたがい，1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果はσ・2σ（σは統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲，2σは真の値が95.4%の確率で存在する範囲）の値を示す。また，表中の相対比は，σ・2σの範囲をそれぞれ1とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

なお，較正された暦年代は，将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1年単位で表された値も併記する。

⑵ 樹種同定

試料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また，日本産樹木の木材組織については，林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

4 結果

放射性炭素年代測定･暦年較正および樹種同定結果を表1, 図1に示す。同位体効果の補正を行った値（補正年代）は，SK-13が4,360 ± 30BP，SK-14が4,330 ± 30BPである。また，測定誤差をσで計算した暦年較正結果は，SK-13がcalBC3,010-2,914，SK-14がcalBC3,009-2,902である。

また，年代測定を実施した炭化材はいずれも広葉樹で，SK-13がクリ，SK-14がエノキ属に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で，孔圏部は3-4列，孔圏外で急激に径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-15細胞高。

・エノキ属（Celtis） ニレ科

環孔材で，孔圏部は1-3列，孔圏外で急激に径を減じたのち，塊状に複合して接線・斜方向に配列し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性，1-6細胞幅，1-40細胞高で鞘細胞が認められる。

5 考察

炭化材が出土した土坑（SK-13，SK-14）はいずれも深さが約3mある大型の土坑であり，炭化材は底部付近から出土している。出土した炭化材の年代測定結果（補正年代）は，SK-13が4,360 ± 30BP，SK-14が4,330 ± 30BPであった。また，測定誤差をσで計算した暦年較正結果は，SK-13がcalBC3,010-2,914（calBP4,959-4,863），SK-14がcalBC3,009-2,902（calBP4,958-4,851）である。の測定結果は，関東地方で蓄積された縄文時代の年代測定結果（小林,2008）と比較すると，縄文時代中期中頃の年代に該当する。今回の結果から2基の土坑は縄文時代中期頃の比較的近い時期に構築・使用された可能性がある。

一方, 炭化材の樹種は, SK-13がクリ, SK-14がエノキ属であった。クリは, 二次林等に生育する落葉高木で,

木材は重硬で強度と耐朽性が高い。エノキ属は，河畔等に生育する落葉高木で，木材はやや重硬な部類に入る。いずれも関東平野で現在も普通に見られる種類であり，縄文時代中期頃の本遺跡周辺にも生育していたことが推定される。

表1. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

調査区	出土遺構	試料名	材質 形状 種類	測定年代 BP	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code №.
							誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
303-179 A区	SK-13	№.6-炭1	炭化材 分割状 クリ	4,430±20	-29.76 ± 0.28	4,360±30 (4,355±25)	σ	cal BC 3,010 - cal BC 2,978 cal BC 2,966 - cal BC 2,951 cal BC 2,943 - cal BC 2,914	cal BP 4,959 - 4,927 cal BP 4,915 - 4,900 cal BP 4,892 - 4,863	0.449 0.161 0.390	IAAA- 143149
							2σ	cal BC 3,078 - cal BC 3,073 cal BC 3,024 - cal BC 2,905	cal BP 5,027 - 5,022 cal BP 4,973 - 4,854	0.011 0.989	
303-179 A区	SK-14	炭化材 14.12.04	炭化材 柾目板状 エノキ属	4,390±30	-28.36 ± 0.28	4,330±30 (4,334±26)	σ	cal BC 3,009 - cal BC 2,981 cal BC 2,938 - cal BC 2,902	cal BP 4,958 - 4,930 cal BP 4,887 - 4,851	0.332 0.668	IAAA- 143150
							2σ	cal BC 3,016 - cal BC 2,899	cal BP 4,965 - 4,848	1.000	

1)試料は、いずれも酸処理ーアルカリ処理ー酸処理の前処理を実施している。
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
5)暦年の計算にはRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である
9)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

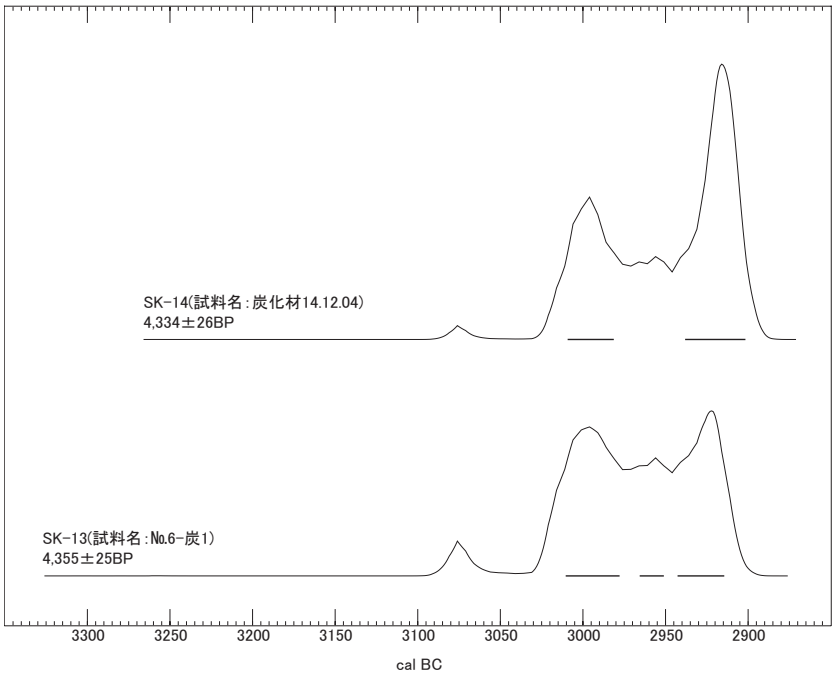
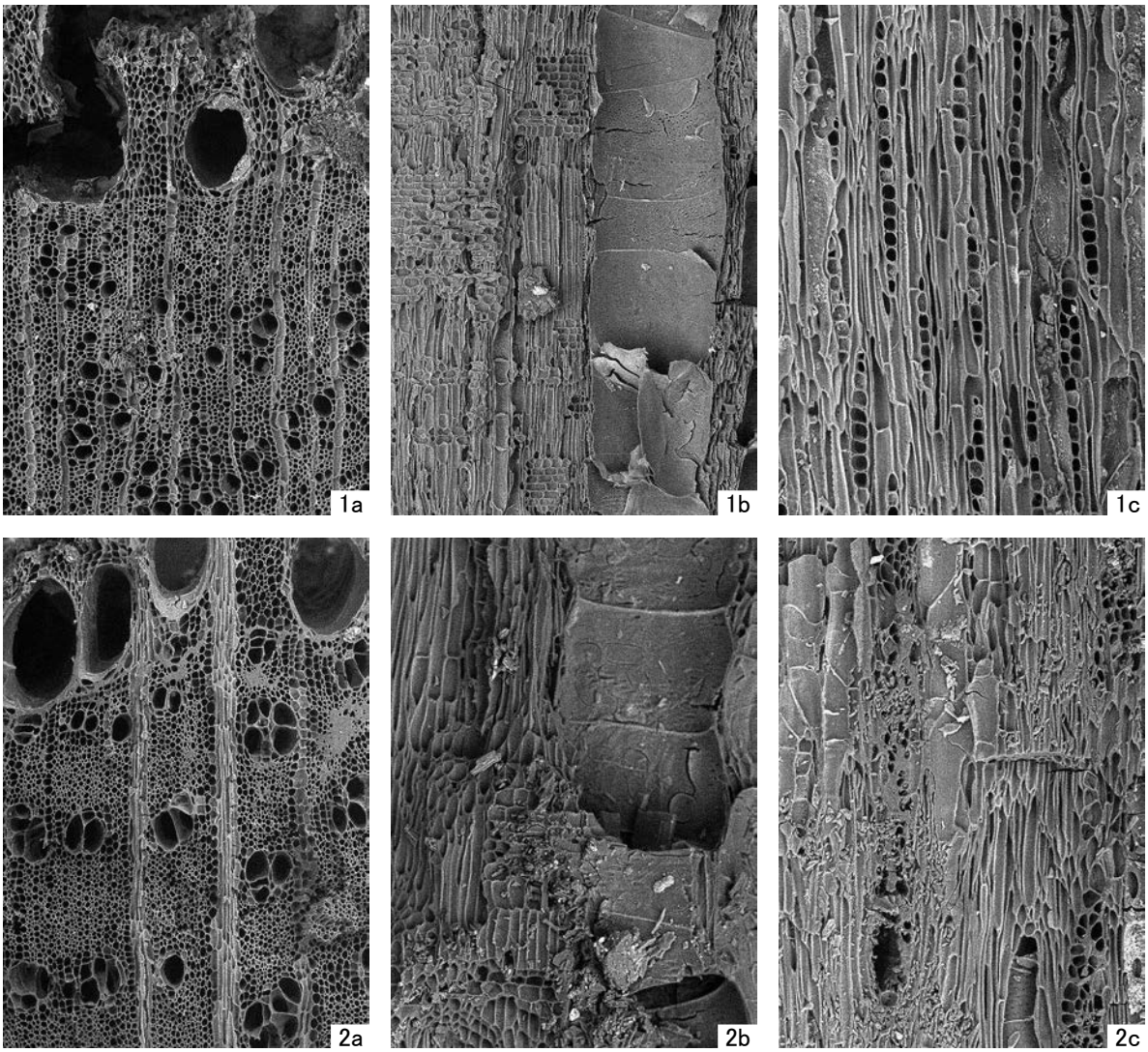


図1. 暦年較正結果(1σ)

図版1　炭化材



1.クリ(SK-13;№6-炭1)
2.エノキ属(SK-14；炭14.12.04)
a:木口,b:柾目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

小林謙一 ,2008, 縄文土器の年代（東日本）. 小林達雄（編）「総覧　縄文土器」,「総覧　縄文土器」刊行委員会 ,896-903.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

写　真　図　版

遺　跡　遠　景
（　西　か　ら　）

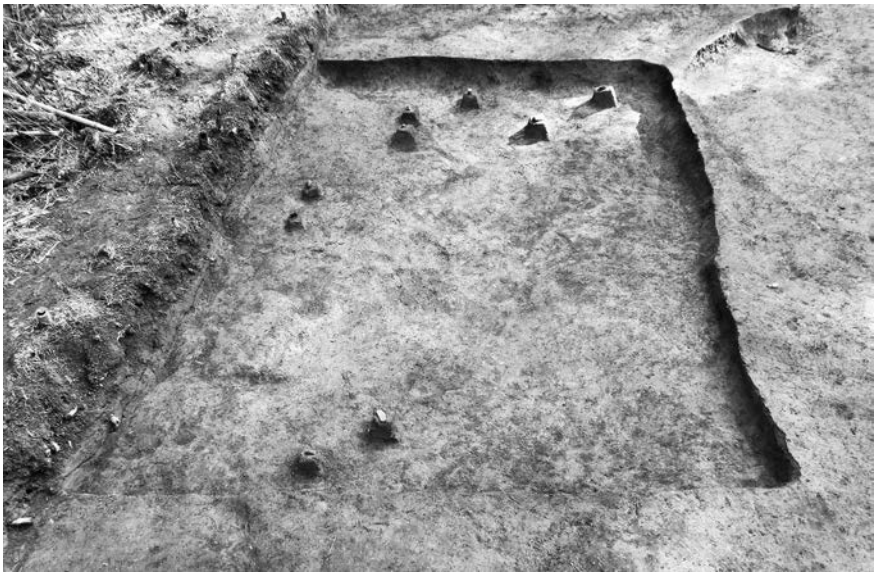
調査区北部全景
（　南　か　ら　）

調査区南部全景
（　北　か　ら　）

第１号竪穴建物跡

第２号竪穴建物跡
遺 物 出 土 状 況

第２号竪穴建物跡



第５号竪穴建物跡
遺物出土状況

第５号竪穴建物跡

第７号竪穴建物跡
遺物出土状況①

第７号竪穴建物跡
遺物出土状況②

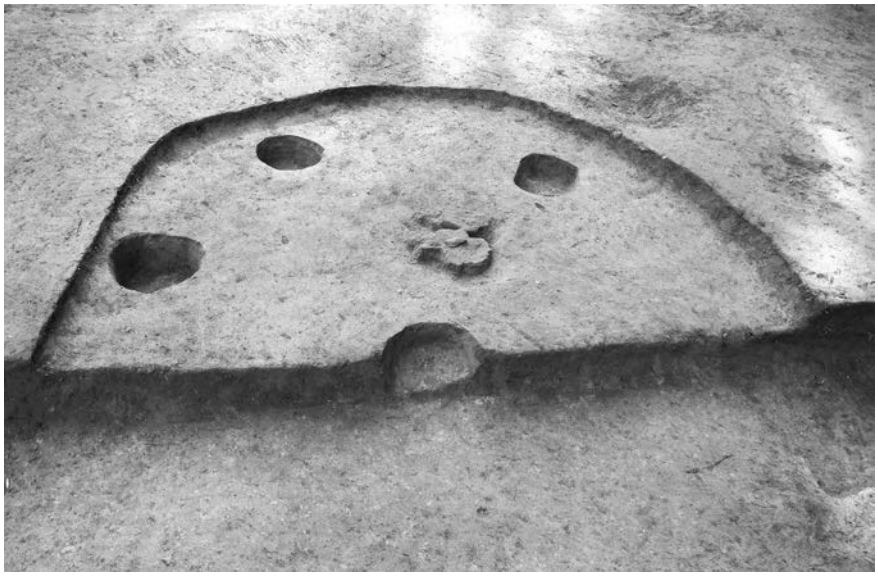
第７号竪穴建物跡

第８号竪穴建物跡

第９号竪穴建物跡

第10号竪穴建物跡

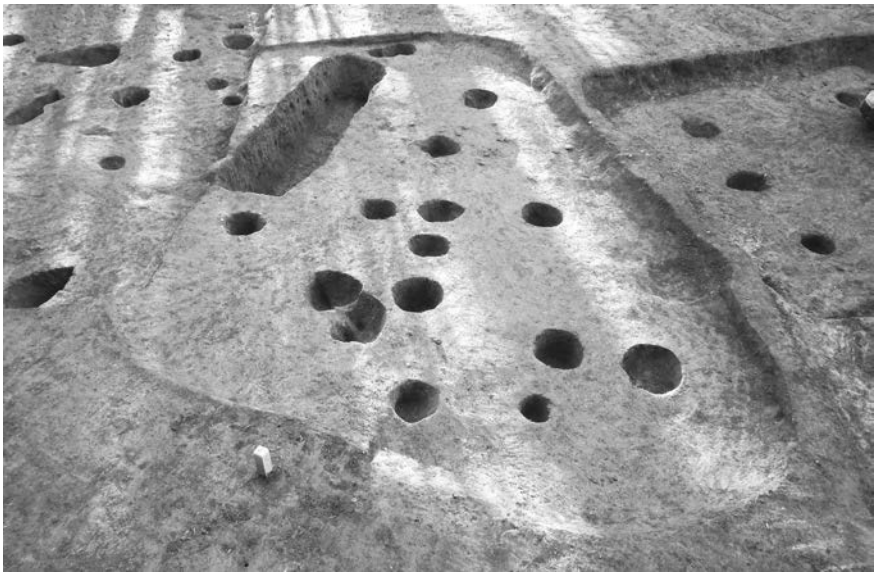
第14号竪穴建物跡



第15号竪穴建物跡

第16号竪穴建物跡

第17号竪穴建物跡

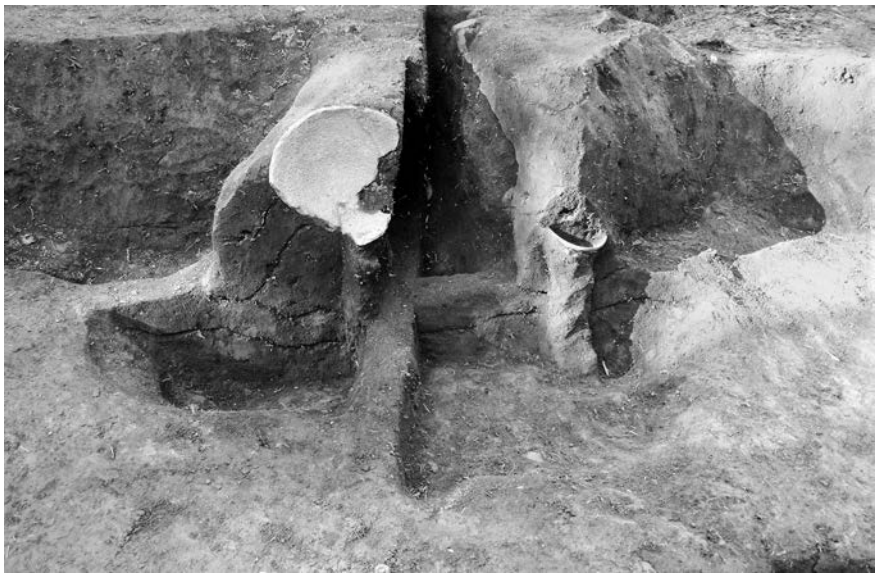


第18号竪穴建物跡

第６号竪穴建物跡
遺物出土状況①

第６号竪穴建物跡
遺物出土状況②

第６号竪穴建物跡



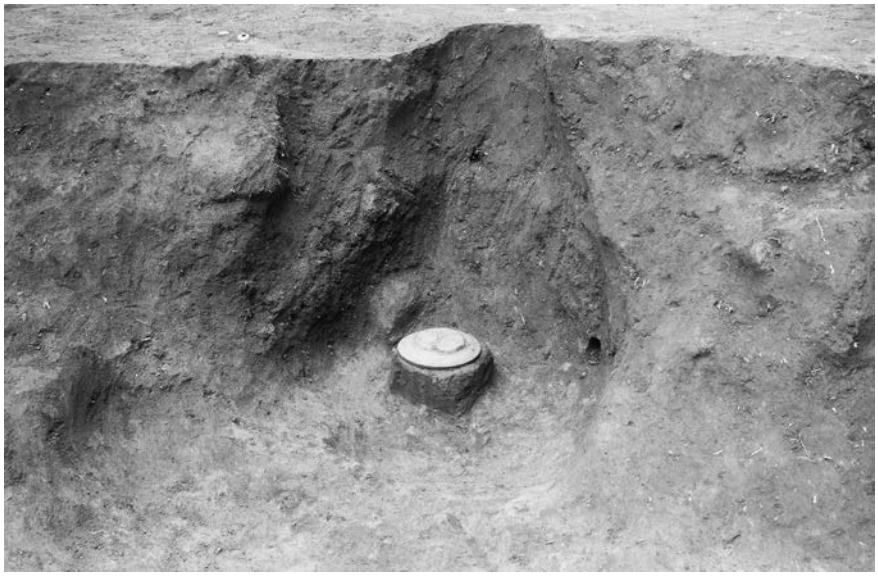
第６号竪穴建物跡
竈袖断ち割り状況

第６号竪穴建物跡
竈袖内遺物出土状況

第13号竪穴建物跡
遺物出土状況

第13号竪穴建物跡

第13号竪穴建物跡
竈近景



第３号竪穴建物跡
竈内遺物出土状況

第３号竪穴建物跡

第11号竪穴建物跡

第１号方形周溝墓

同南東コーナー部遺物出土状況（南から）

同北東部遺物出土状況（西から）

同南東コーナー部遺物出土状況（東から）

同北東部遺物出土状況（東から）

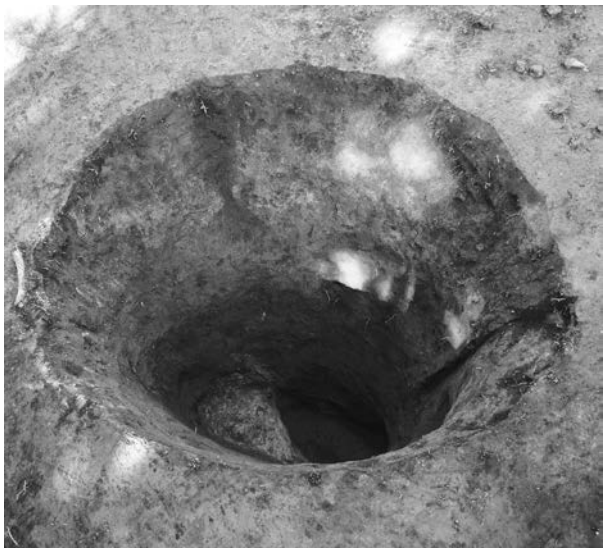
第３号溝跡遺物出土状況（南から）①

第３号溝跡遺物出土状況（南から）②

第３・４号溝跡

第１号陥し穴土層断面

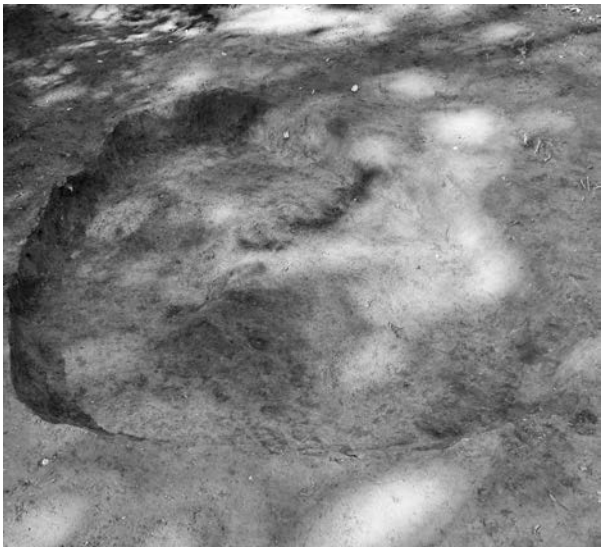
第１号陥し穴



第２号陥し穴

第３号陥し穴

第４号陥し穴

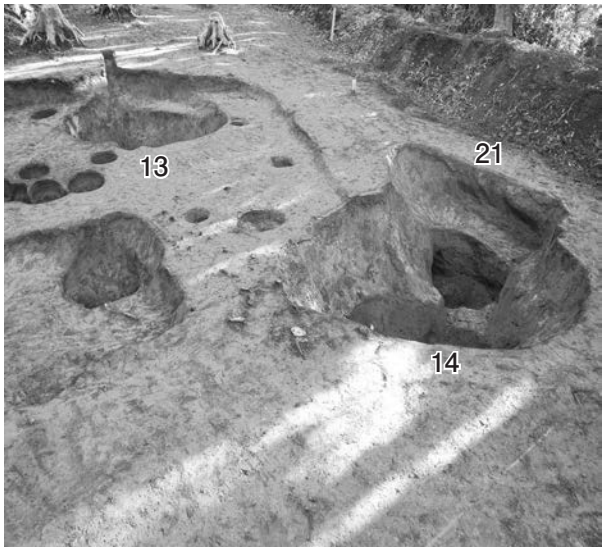


第１号炉穴

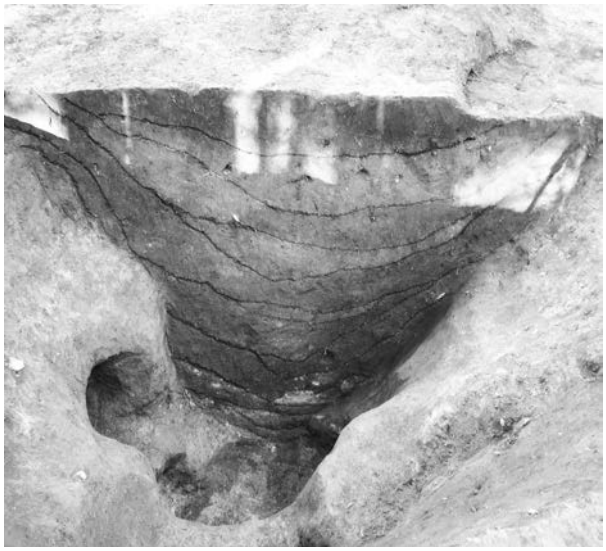
第７号土坑

第９号土坑

第15号土坑



第13・14・21号土坑



第14号土坑土層断面

第13号土坑焼土・炭化材出土状況

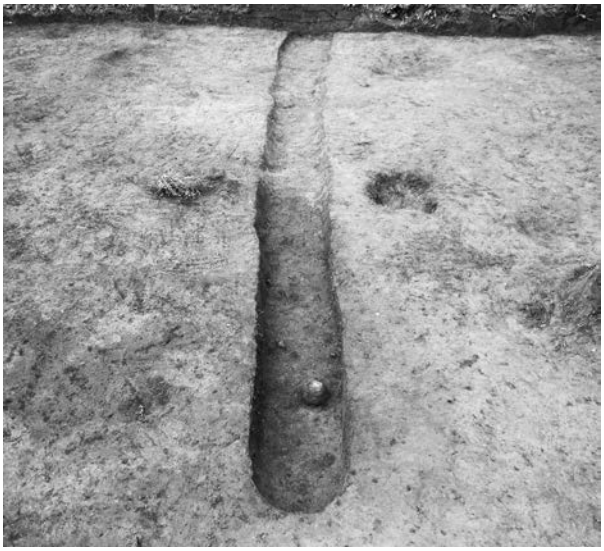
第14号土坑焼土・炭化材出土状況

第13号土坑

第14号土坑

第21号土坑土層断面

第21号土坑

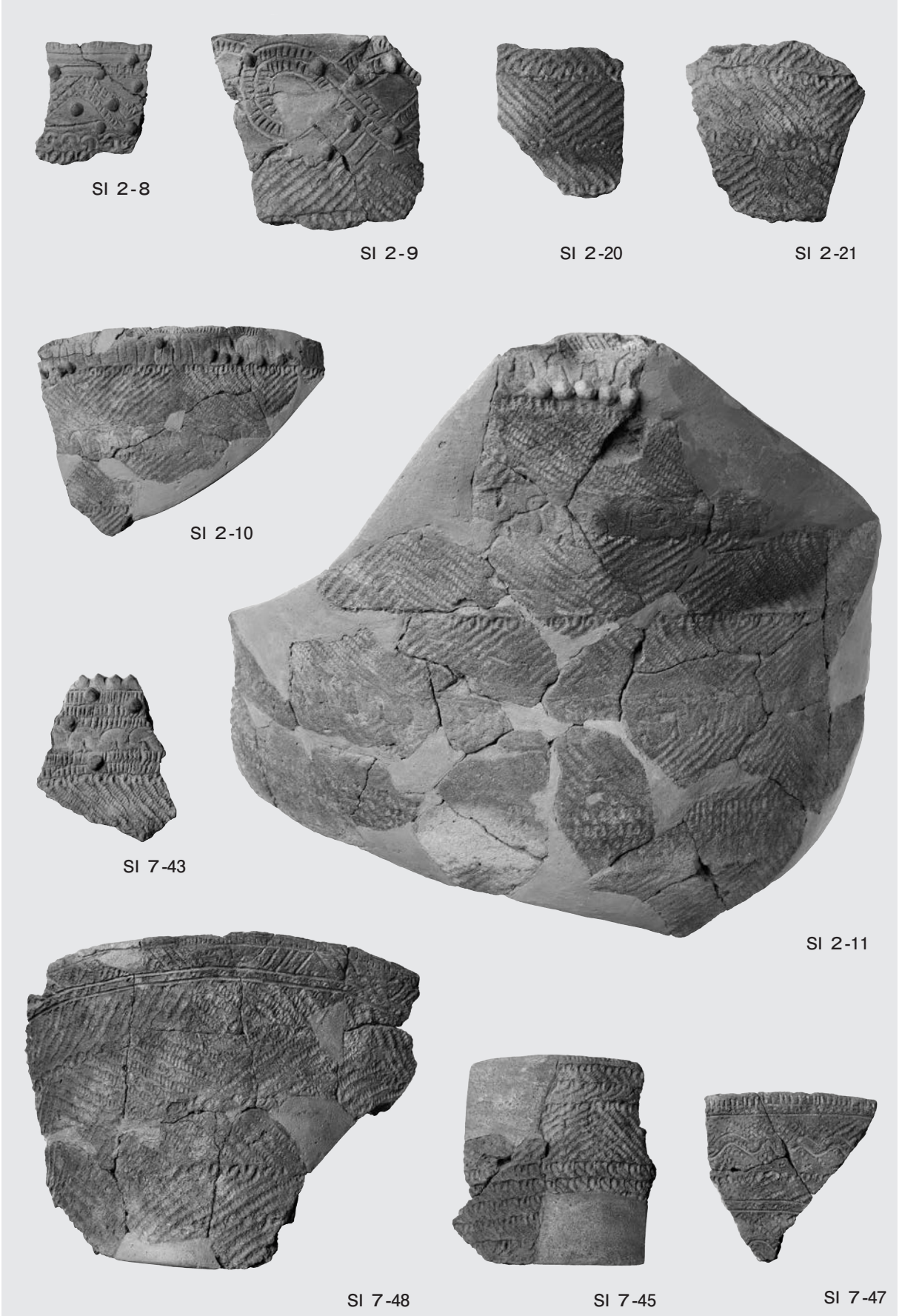


第１号溝跡

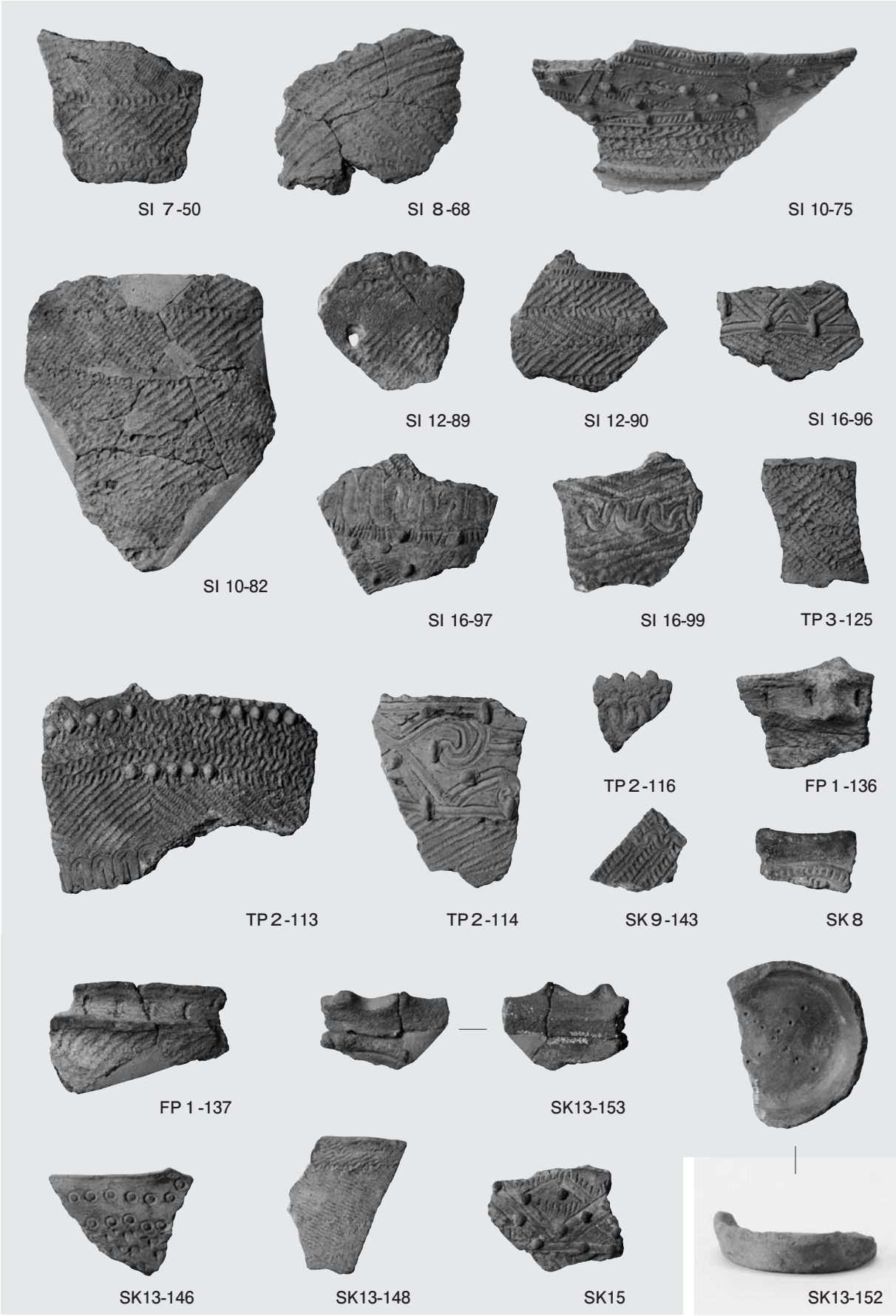
第２号溝跡

第５・７号溝跡

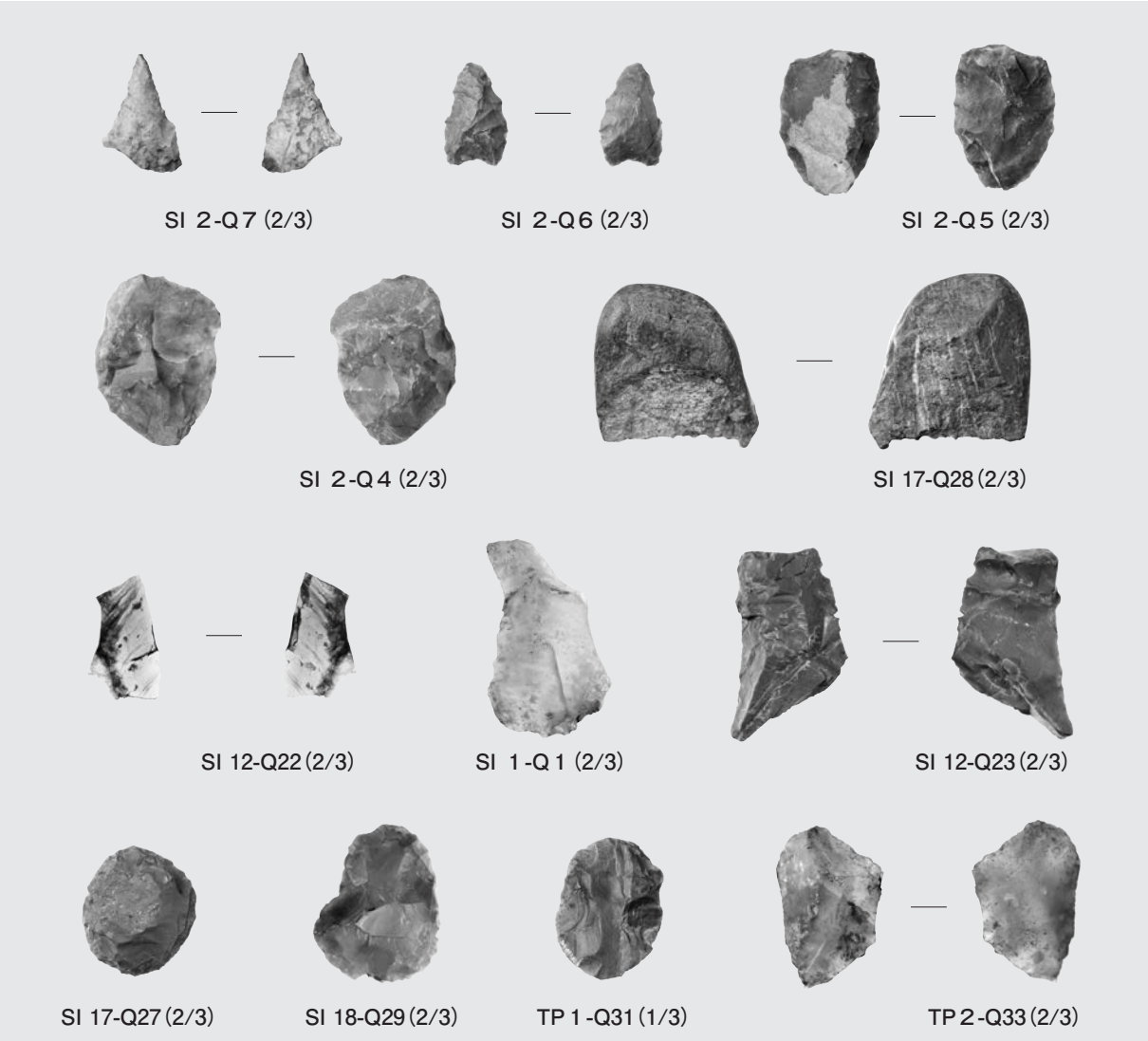
第６号溝跡

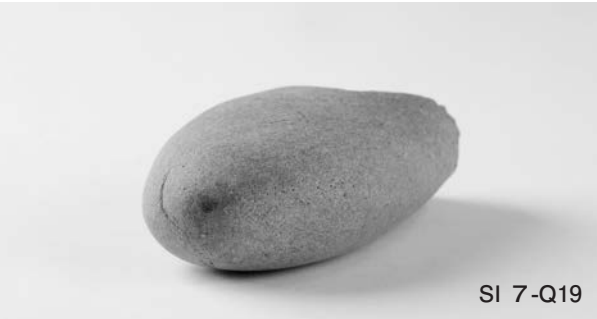


第２・７号竪穴建物跡出土土器



第７・８・10・12・16号竪穴建物跡，第２・３号陥し穴，第１号炉穴，第８・９・13・15号土坑出土土器





第１・２・４・７・12・17・18号竪穴建物跡，第１・２号陥し穴出土石器

SI 6-163

SI 6-164

SI 6-165

SI 6-166

SI 6-167

SI 6-168

SI 6-169

SI 6-172

SI 6-174

SI 6-173

第６号竪穴建物跡出土土器

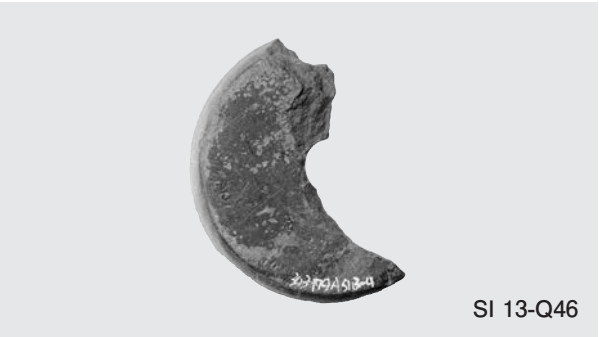
SI 6-171

SI 13-176

SI 13-177

SI 13-178

SI 13-179


SI 13-Q46

SI 13-183

TM 1-188

TM 1-186

第６・13号竪穴建物跡，第１号方形周溝墓出土土器・石器

TM 1 -192

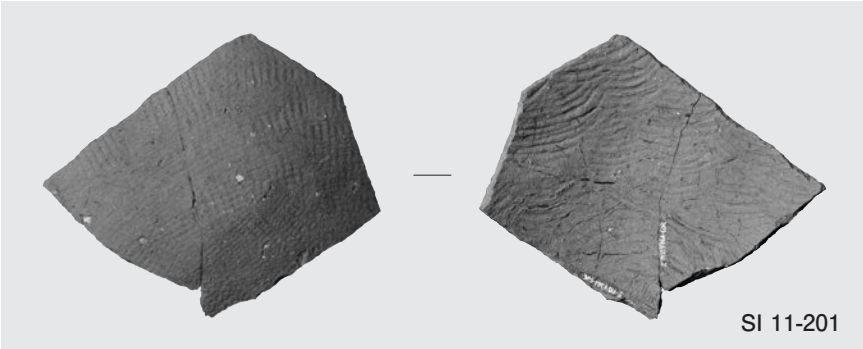
SD 3 -194

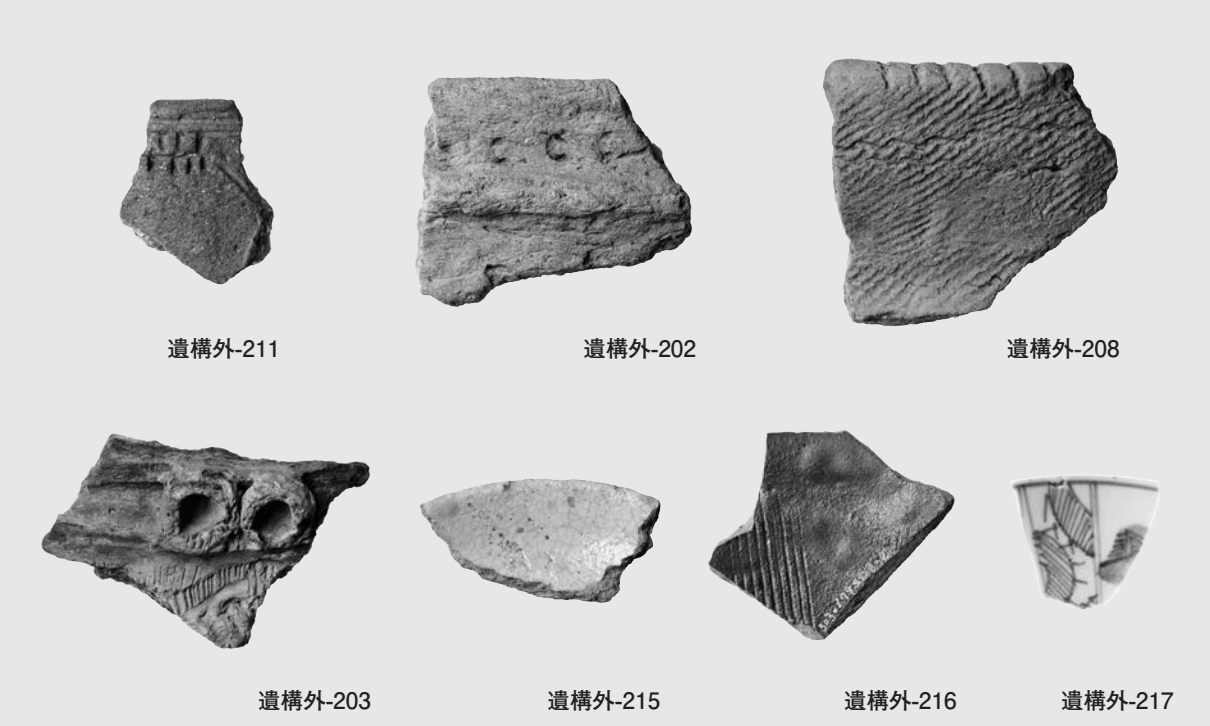
SI 3 -196

SD 3 -195

第３号竪穴建物跡，第３号溝跡，第１号方形周溝墓出土土器

SI 11-199


SI 11-201

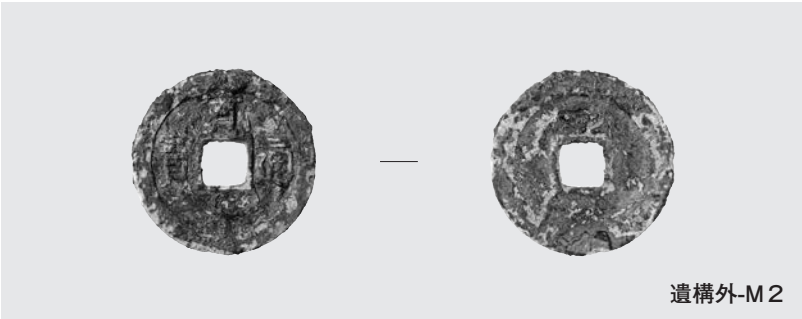

遺構外-211
遺構外-202
遺構外-208
遺構外-203
遺構外-215
遺構外-216
遺構外-217

遺構外-DP１

遺構外-DP２

遺構外-DP４

遺構外-M１


遺構外-M２

第11号竪穴建物跡，遺構外出土土器・陶器・土製品・金属製品

抄　　録

ふりがな	とのはたいせき
書　　名	殿畠遺跡
副 書 名	主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第420集
著 者 名	近江屋成陽
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
所 在 地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　ＴＥＬ 029－225－6587
発 行 日	2017（平成29）年3月17日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
殿畠遺跡（とのはたいせき）	茨城県小美玉市宮田字権現平（いばらきけんおみたましみやたあざごんげんたいら）172－7ほか	08303－179	36度19分30秒	140度34分32秒	20～23 m	20141001～20141231	7,625 ㎡	主要地方道玉里水戸線道路改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
殿畠遺跡	集落跡	縄文	竪穴建物跡　14棟 陥し穴　4基 炉穴　1基 土坑　19基	縄文土器（深鉢），石器（掻器・鏃・石匙・打製石斧・磨石・敲石・凹石）	
		古墳	竪穴建物跡　2棟 方形周溝墓　1基 溝跡　2条	土師器（坏・坩・高坏・鉢・壺・提瓶・甕・手捏土器） 須恵器（坏・蓋・甕） 石器（砥石・紡錘車）	
		平安	竪穴建物跡　2棟	須恵器（坏・蓋・皿・甕）	
	その他	時期不明	溝跡　5条	縄文土器（深鉢），弥生土器（壺），陶器（皿・擂鉢），磁器（染付碗），土製品（土玉・円筒埴輪），石器（鏃・打製石斧・磨石・凹石・砥石），金属製品（銭貨・鉄砲玉）	

要　　約	調査の結果，縄文時代前期から中期初頭にかけての集落跡，古墳時代前期の墓域の一部と考えられる方形周溝墓1基，古墳時代後期，平安時代の集落跡と断続的に土地利用が確認できた。特に当地域において検出例の少ない前期前半（関山式期）の竪穴建物跡がまとまって確認できたことは，貴重な資料である。

印　刷　仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows ７
		Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×７film　Nikon SUPER COOLSCAN9000
		図面類　EPSON ES－10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・Ｌ
写　　真	線数	モノクロ175線以上　カラー210線以上
印　　刷	印刷所へは，Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第420集

殿　畠　遺　跡

主要地方道玉里水戸線道路改良事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成29（2017）年　３月15日　印刷
平成29（2017）年　３月17日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　高野高速印刷
〒310－0853　水戸市平須町1822－122
TEL　029－305－5588